菅江真澄研究

第十九回全国菅江真澄研究集会記念号

菅江真澄研究会

菅江真澄研究
第十九回全国菅江真澄研究集会記念号
菅江真澄研究会

第十九回　全国菅江真澄研究集会　記念号

菅江真澄研究

第五十八号

第１９回　全国菅江真澄研究集会開催日程

日　時　平成１８年５月２０日（土）～２１日（日）

場　所　秋田県立博物館

日　程

■第１日　20 日（土）12 時 30 分～ 16 時 30 分　秋田県立博物館講堂・学習室
※多数参加の場合、講堂の様子を学習室で中継します。

記念講演「菅江真澄の文体」
講師　杉本圭三郎氏（法政大学名誉教授）
『菅江真澄遊覧記』平凡社版の現代語訳者

パネルディスカッション「明日の真澄研究のために」
コーディネーター
石井正己氏（国文学・民俗学・東京学芸大学教授・菅江真澄研究会会員）
パネラー
錦　仁　氏（国文学・新潟大学大学院教授）
菊池勇夫氏（歴史学・宮城学院女子大学教授）
冨樫泰時氏（考古学・元秋田県立博物館館長・菅江真澄研究会会員）
齊藤壽胤氏（民俗学・秋田県民俗学会理事・菅江真澄研究会理事）

交流会　18 時 20 分～ 20 時　　平安閣（秋田市山王二丁目）
（秋田万歳の実演があります）

■第２日　21 日（日）10 時～ 15 時 30 分　秋田県立博物館講堂・企画展示室

講演会　「真澄に学ぶ」
「真澄といる風景」永井登志樹氏（秋田県立博物館元嘱託職員・菅江真澄研究会理事）
「民俗学から見た菅江真澄研究史」丸谷仁美氏（秋田県立博物館職員）
「資料を読み解く」松山　修氏（秋田県立博物館職員・菅江真澄研究会会員）
「菅江真澄の食生活」田口昌樹氏（秋田県立博物館元嘱託職員・菅江真澄研究会副会長）

ギャラリートーク　秋田の先覚記念室・菅江真澄資料センター開設十周年記念展
「真澄の肖像～旅人・うた人・くすし」松山　修氏

第十九回全国菅江真澄研究集会を開催するにあたり

会長　亀井宥三

秋田県立博物館に菅江真澄資料センターと秋田の先覚記念室が併設されたのは平成八年四月一日のことでした。江戸時代後期、四十七年間を雪国の旅に費やし、膨大な記録を残した菅江真澄、うち二十九年間を秋田に過ごした菅江真澄。多くの秋田県民は、この偉大な先人の著作の発掘、保存、研究の成果を全国に発信する場を待ち望んでおりました。それが、菅江真澄資料センターの開設でありました。

この十年間、常設展示のほか、かずかずの企画展や特別展・講演会・学習会・名誉館長講座の開催、各種印刷物の発行、地方での企画展の開催など、菅江真澄資料センターの果たした功績は大なるものがありました。

私どもは昭和五十四年「菅江真澄研究会」を結成しましたが、会誌「菅江真澄研究」の発行、「新春　菅江真澄講演会」「菅江真澄の足跡探訪会」「真澄墓前祭と研究発表」などを実施してまいりました。

昭和六十三年からは、秋田県内の市町村、青森県深浦町、宮城県気仙沼市のご協力のもと、「全国菅江真澄研究集会を十八回にわたり開催し、「菅江真澄という人・その業績」を広く知っていただくことができました。この間、九十人で発足した研究会の会員数も三百人に増加し、友好団体（各地の研究会など）を含むと全国に八百人の会員を擁する団体に成長しました。

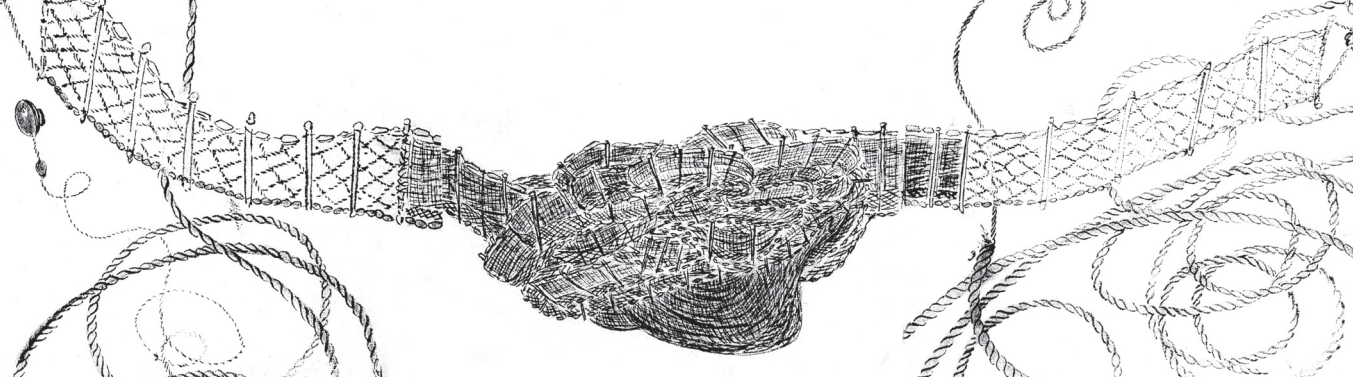
今回、「菅江真澄資料センター」の開設十周年を迎えるにあたり、博物館と協議の上、「第十九回全国菅江真澄研究集会」を共催する運びとなりました。

初日は記念講演、パネルディスカッション、会場からの発言もふくめて活発な討議が期待されます。

二日目は「真澄に学ぶ」として、秋田県立博物館でたずさわって来られた方々がそれぞれのテーマで講演することにしました。また、開設十周年記念展「真澄の肖像―旅人・うた人・くすし」を学芸主事松山修氏が案内するギャラリートークが行われます。

研究集会を記念し、「菅江真澄研究」五十八号を特集号として発行することにしたところ、巻頭論文二点をふくめ、十八人の方々から十九点の作品をいただきました。読後感などお寄せいただければ幸甚に存じます。

本誌の編集にあたられた編集委員の各位の労苦に感謝し挨拶といたします。



■目次

第十九回全国菅江真澄研究集会開催日程 ―― 1

第十九回全国菅江真澄研究集会を開催するにあたって ―― 会長　亀井宥三　2

巻頭論文1　菅江真澄の旅と西行の伝承和歌 ―― 川口市　小堀光夫　5

巻頭論文2　小さき「百姓」たちへの接近 ―― 府中市　松本三喜夫　12

菅江真澄と横手 ―― 秋田市　冨樫泰時　34

『宮本常一写真・日記集成』を読む ―― 秋田市　田口昌樹　39

秋田の円空仏探訪記 ―― 京都市　金沢大士　44

「手這坂」は真澄からのプレゼント ―― 八峰町　嶋津宣美　49

真澄の秋田領入部と吉川五明 ―― 秋田市　石田冲秋　53

菅江真澄の記録した雪形 ―― 秋田市　小笹鉄文　55

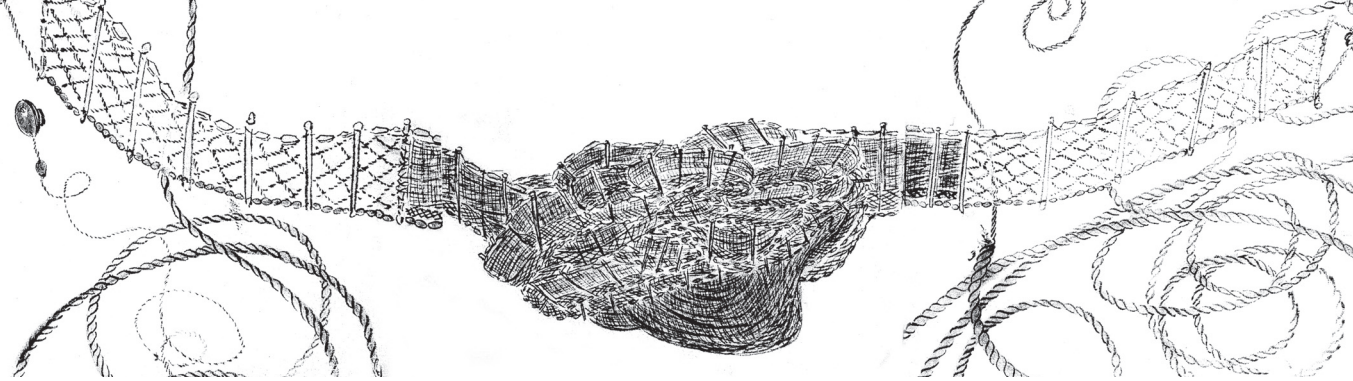
菅江真澄が出会った山内 ―― 横手市　瀬田川芳子　58

祭り・行事における子供の姿 ―― 箕面市　水木孝子（ゆきこ）　61

男鹿五風に記された男鹿の植物 ―― 秋田市　高橋一夫　66

菅江真澄が記録した石碑 ―― 秋田市　佐藤宗久（としひさ）　71

『久米路の橋』をたどる旅（三） ―― 塩尻市　田村国竹　76



漂泊の旅人菅江真澄 ―― 秋田市 佐藤尚武 78
霜月神楽 ―― 横手市 赤川與之助 84
菅江真澄の採薬事情（二） ―― 弘前市 七戸元成 88
短歌 菅江真澄の道 ―― 秋田市 山下恭 90
短歌 菅江真澄が辿った南外村 ―― 大仙市 今野隆栄 91
菅江真澄と三つの古鏡 ―― 秋田市 田口昌樹 92

真澄短信

① 嶋田忠一氏秋田県立博物館副館長に就任 ―― 49
② 「国境を守った人々」 ―― 福岡龍太郎氏 52
③ 「真澄の足跡」 ―― つちざき朝日 75
④ 「あきたわき水巡り」 ―― 秋田魁新報社 99

本誌に掲載した「菅江真澄の図絵」について ―― 99
刊後録 ―― 99

巻頭論文 1

菅江真澄の旅と西行の伝承和歌

小堀光夫

西行法師が諸国行脚の途中ここを通り、豊後富士といわれる由布岳を眺めて、その秀麗な山容に感じて一首の歌を詠んだ。

豊国の由布の高嶺は富士に似て
雲も霞もわかぬなりけり

すると、にわかにあたりが暗くなったので、改めて「豊国の由布の高嶺に富士は似て……」と詠みかえると、あたりは晴れ渡ったという。

『豊国筑紫路の伝説』

（一）

菅江真澄は、初期の旅日記から久保田城下に落ち着いた生活をはじめた後年の仕事である随筆、地誌、図絵、断簡[1]に至るまで、西行伝承をいろいろと書き記している。その内容は、旅先の土地土地で聞いた西行伝承や、『山家集』『撰集抄』といった歌集や説話集等をはじめとした多くの文献資料からの引用によるものであるが、その多くは西行の詠歌と土地に伝わる伝承和歌である。

西行の伝承和歌は、その内容から『山家集』等、西行の和歌本文自体が伝承化されたものと、西行伝承が母体となって生み出された西行和歌に大別できるが、本稿では、真澄が書き残したそれら西行の伝承和歌と、真澄の旅との関係を中心に考察してみたい。

（二）

真澄が、西行伝承を記した著作の一つとして『粉本稿』がある。『粉本稿』は、真澄が記録の必要性を感じた資料をスケッチし、その説明文を加えた図絵集である。この『粉本稿』の一番初め（図1参照）には、美濃国恵那郡（現在の岐阜県恵那市）「花無山」の絵とともに西行伝承が次のように記されている。（『粉本稿』は、『菅江真澄全集』第九巻、未来社、昭和四十八年からの引用。以下、真澄の記事は『菅江真澄全集』よりの引用とする）

みのゝ国大井のすくより入て花なし山といふあり。此麓に竹林山といふ寺ありて、西行上人みとせすみ給ひしといふ也。いま、たかはやしの中に礎二ツ三ツあり。是をいにしへのあとゝて、寺か洞とよふ。上人よみ給ひし歌とて、

花なしのみねにすみける鶯はをのれ鳴てや春をしるらん

こゝろある人にみせはや大ゐなる花なし山のはるのけしきを

かゝるふたくさは里の子のくちすさみてけり。

ちかきみちのかたはらに、こたかきところに上人のしるしとて、五りんをすへたり。のちの人、あととふらはんためとか、こゝろある人は、のほりて、せになと手向て過けり。

記事の内容に目を向けると、美濃国恵那郡に西行が三年ほど住んでいたという伝承のある花無山の麓の竹林山という寺と、西行の墓とされる五輪塔について、また土地で伝承されている西行和歌として「花なしのみねにすみける鶯はをのれ鳴てや春をしるらん」「こゝろある人にみせはや大ゐなる花なし山のはるのけしきを」の二首の

和歌が記されている。

現在、恵那市には、竹林庵をはじめとして梅露庵、松林庵など西行の庵の伝承地が三ヶ所ある。また西行の位牌がある長国寺、長栄寺もある。特に長国寺は、西行葬送の寺とされ、『長国寺縁起』には、西行伝承が記されている。

『長国寺縁起』は、永禄二年（一五五九）に書かれ、慶長十九年（一六一四）に書写されたもので、西行伝承研究会（代表、西澤美仁）の『西行伝説の説話・伝承学的研究』平成十～十二年度科学研究費補助金基盤研究（C）（1）研究成果報告書　課題番号 10610427 神戸大学に坂口博規の翻刻と論文がある。坂口の翻刻『長国寺縁起』の梗概を次に記す。

鎌倉から京にのぼらんとした西行は、信濃から美濃に入り、大井の妊観音に詣でた後、中野坂にさしかかると花無山の南に「弥陀・観音・勢至」の三尊が光を放っていたので、そこに赴くと小堂があり、行基作の三尊があった。そこで西行はこの地に庵を結んだ。

西行の和歌二首「心アル人ニ見せバヤ大井ナル花無山ノ春ノ気色ヲ」「花無ノ峯ニ栖ミケル鶯ハ己レト鳴テ春ヲ知ルラン」

図１．『粉本稿』「西行上人故地」
大館市立中央図書館蔵

ある時、死期を悟った西行は村人を招じ寄せ、自分が死んだら中野坂に埋めるように頼んだ。

西行の臨終歌「夜ル昼ルノ堺ワ此処ニ有明ノ月吉日吉影ヲナラブル」

はたしてその夜半、西行は亡くなり、村人達は遺言どおりに中野坂の傍に西行を葬り、そこに五輪塔を建てた。以来、ここを西行根という。

現在、伝承される土地の西行伝承[2]も『長国寺縁起』とほぼ同じであるが、先に記したように庵、寺院、伝承和歌に関して異なる伝承もある。

ここで『長国寺縁起』と真澄の『粉本稿』の記事を比較すると、西行の庵、二首の西行和歌、西行の五輪塔など一致している。ただし臨終歌の記事はない。

また『長国寺縁起』に記された三首の和歌は『山家集』等、西行の歌集にはない。それは、土地の西行伝承が母体となって生み出された西行和歌である。

先の『西行伝説の説話・伝承学的研究』の中で坂口は、『長国寺縁起』の西行伝承を、重層的な伝承形態の歴史からその伝承が集約されたものとし、恵那の西行伝承は、近世期の美濃の俳人たちなど西行にあこがれ顕彰する文人たちによって伝承されていたことを指摘している。

『粉本稿』の記事から恵那の西行伝承は、文人、宗教者がその伝承に大きく関わること。そして真澄は、恵那を旅した折、それらの人たちと親しく交わり、西行伝承や西行の伝承和歌の知識を得たこと。その後の旅においてその知識が旅の助けになったと筆者は考える。それは『山家集』等、西行の和歌本文自体が伝承化されたものだけでなく、西行伝承が母体となって生み出された西行和歌を真澄が差別せず記録していることからもわかる。

真澄は美濃滞在後、天明三年（一七八三）に信濃國伊那郡（現在の長野県下伊那郡阿智村浪合）から東国への旅をはじめているが、

旅日記の中で訪れた土地に伝承される西行の伝承和歌として、次のような①～⑨の和歌を記している。

①「風越のみねのつづきに咲花はいつ盛ともなくて散らん」（『委寧能中路』天明三年三月半）

②「科野（信濃）なる有明山を西に見てこゝろ細野の路を行かな」（『委寧能中路』天明三年十月二十一日）

③「駒ガ嶽スソ野ノ森ニ来テ見レバ小町ガ家ニハヤスナナ草」（『すわの海』[33]天明四年一月二十二日）

④「科埜（信濃）なる有明山を西に見てこゝろ細野の路を行かな」（『来目路の橋』天明四年七月十四日）

⑤「山はだの岨のたつ木に居る鳩の友よぶ声のすごきゆふぐれ」（『鬱田濃刈寝』天明四年九月十五日）

⑥「西行上人の「波に埋れて」とのたまひし桜は、水の上に枝さし出したり」（『鬱田濃刈寝』天明四年九月二十九日）

⑦「とへば名をいはての丘ともしるべきを奥の不尽とはこれをいはわし」（『けふのせはのゝ』天明五年九月八日）

⑧「みちのくの和賀と江刺のさかひこそ河にはいなせ山にまた森」（『けふのせはのゝ』天明五年九月二十八日）

⑨「道奥の門岡山のほとゝぎす稲瀬のわたりかけて鳴也」（『いわてのやま』天明八年六月二十四日）

さて、これらの和歌の内、①は『山家集』の和歌である。⑤も『山家集』「古畑の岨の立つ木にゐる鳩の友呼ぶ声のすごき夕暮」からとったと思われるが、冒頭の部分が異なっていて、真澄も「此歌、紀の国ふる畑と聞えしはいかゞ、又此鳩（波渡）にてやありけん、おぼつかなし。」と訝しがりつつ記している。⑥西行上人の「波に埋れて」は、「象潟の桜は波に埋もれて花の上こぐあまの釣り舟」という西行の歌と伝えられているが、『山家集』等、西行の歌集にはない。残りの②③④⑦⑧⑨は、西行の歌集にはない伝承和歌となっている。

つまり真澄は、西行の伝承和歌を、旅先の土地土地で聞くことによって、各地の西行を慕い顕彰する文人たちの西行文化サロンに出入りし、そのネットワークによって結ばれていたことが考えられるのである。そして真澄は、そのようなネットワークを意識して利用しながら旅をしていたのではないだろうか。

（三）

その一方で、初期の旅日記の中でも、先に示した旅日記とは異なり西行伝承を文献資料からの引用によって記しているのが、平泉、松島それぞれの滞在中の出来事を記した『かすむこまかた』『はしわのわかば』の記事である。

例えば、『かすむこまがた　続』天明六年三月八日条、平泉の記事と資料A～Cを比較すると、

琵琶の柵のふる跡はいつこならん、翁は知らさりける、a西行上人の文に云、「十月十二日、平泉にまかりつきたりけるに、小雪ふり嵐はげしく、ことの外にあれたりけり。いつしか衣川見まほしくて、まかりむかひて見けり。川のきしにつきて、衣川の城見まはしたり。ことがらやうかはりて、物越に見るこゝちしにけり。汀氷りて、とりわけさむければ、

とりわきてこゝろもしみてさえ渡るころも川見に来たるけふしも」

bまたをなし文に、「陸奥のくに、平泉にむかひて、たばしね山と申山の侍り、こと木はすくなきやうに、桜のかきり見へて花の咲きたるを見てよめる、

聞もせすたはしね山の桜花よしののほかにかゝるへしとは

又

奥になほ人見ぬ花の散らぬあれやたづね越ゆらん山ほととぎす」

翁にわかれて衣河にいたる。琵琶の柵は、貞任すみて、門前に桜あまた、植えたりしといへり。其桜ならんいとふりたる桜あり。今けんだんさくらといふ。検断したるさぶらひや住みけん。花さかばふ

たゝびと、こゝろにちきりたり。c円位法師、松近川といふことを、
　衣川汀によりてたつ浪はきしのまつかねあらふなりけり
この松はかれたり。ありしところは、道遠ければゆかじ。西行上人平泉に、とし月をへ給ふと聞へしは、秀衡にゆかりあるゆへにやあらん。庵のあとなどありといへり、日もくれなんいざとてくれば、さと風吹て、山沢ひとつにどよめいて、なりさはげは、いとゞいにしへのことしのばれて、涙落しぬ。（記号、傍線は筆者が記入）

資料A『山家集』（『和歌文学大系』21　明治書院）
　十月十二日、平泉にまかり着きたりけるに、雪降り嵐激しく、殊の外に荒れたりけり、いつしか衣川見まほしくてまかり向かひて見けり、川の岸に着きて、衣川の城しまはしたる事柄、様変はりて物を見る心地しけり、汀凍りて取り分寂びければ取り分て心も凍みて冴えぞ渡る衣川見に来たる今日しも

資料B『山家集』（『和歌文学大系』21　明治書院）
　陸奥国に平泉に対ひて、束稲と申山の侍に、異木は少なきやうに桜の限、花の咲たるを見てよめる
聞もせず束稲山の桜花吉野の外にかゝるべしとは
奥に猶人見ぬ花の散らぬあれや尋を入らん山時鳥

資料C『夫木和歌抄』（『改訂版作者分類夫木和歌抄　本文篇』風間書房）
　松近河といふ事　衣川陸奥
衣河汀によりて立なみはきしのまつかねあらふ也けり

『かすむこまがた　続』天明六年三月八日条の傍線部a、bは、一部に誤記が見られるが、ともに『山家集』からの引用で、傍線cも『夫木和歌抄』からの引用になっていることは資料A～Cとの比較によって明らかになる。
　このように、『かすむこまがた』の平泉近辺の西行伝承に関する記事は、土地の西行伝承に触れつつも『山家集』や『夫木和歌抄』の引用（『平泉雑記』からの孫引きの可能性もあり）を中心に構成されている。
　また、平泉近辺の旅日記『はしわのわかば』天明六年五月五日条の記事においても、
　けふ軒に蓬、菖蒲ふける事、こと国にかはらず。…略…また円位（西行）上人熊野へまゐりける道の宿に、かつみをふきけるを見て、「かつみふく熊野まうでのやどりをばこもくろめとぞいふべかりけり」『著聞集』に見えたり。
と、真澄も記しているように『古今著聞集』からの引用もみられる。『はしわのわかば　続』天明六年八月二十七日条の松島の記事では、次のような西行伝承が記されている。
廿七日　大白峯天童庵にいたる。こよひはこゝにと、あるじのたまへば、この処に居る。この寺のむかしは、松島のもともはじめた、田村将軍の建給ひて、月見崎の坊、汀の坊とて、いらか二処にありて、是を松島の二つ寺と、人ごとにいひし汀の坊ならんか。みやちよといふわらば、あめよりやくだりけん。御島の庵の、見仏上人につかうまつりて、上人世をさり給へば、宮千代もかひけちたり。其童の塚あれ、いほりを天童といふとなん。又西行上人こゝにいたりて、
　月にそふかつらおのこのかよひちに薄はらむはたか子なるらん
とよみ給ふを、わらばあらはれて「こはいかにぞや、われせばかく思ふと
　雨もふり霞もかゝり霧もふるすゝきはらむはたか子なるらん」
といひて、いづこにかさりぬ。このわらばへは、山王の神にて、わたらせ給ひしとなん。其みやちよも、此神にてぞおましましけるとぞ。こゝに山王の御祠、石にて作れり。いつのころにか、ちりにうづみて、あともなかりしを、近きころ、ふみにのこしたる、ことばをしるべに尋ねて、ほり起し奉るといへり。…略…此山おくに、西行もどしといふ処あるは、かつら男のうたゆへ、都にはぢてかへり

給ひしと、童までいひてけり。

この西行伝承の記事は、見仏上人ゆかりの天童庵にある宮千代の塚を訪ねる場面からはじまり、宮千代（山王権現）と西行の「月にそう桂男…」の歌問答が行われ、負けた西行がそこから戻るという西行戻し[4]の伝承となっている。真澄は、当然、この天童庵の記事を書く際、『撰集抄』「松嶋上人事」に登場する見仏上人を意識していると思われるが、『撰集抄』には、西行と宮千代の歌問答の記事はない。

それでは、真澄が天童庵を訪ねた当時、松島の西行伝承は、どのようなものだったのだろうか、仙台藩の藩医員や気仙沼の地域医療に貢献した相原友直が、安永七年（一七七八）に記した資料D『松島巡覧記』を次にあげる。

資料D『松島巡覧記』（『仙台叢書』第二巻）

一西行法師和歌。里俗口に傳へて止まず。故に爰に載す。

月にそふ桂男のかよひ來てすゝきはらむは誰か子なるらん

と詠じければ童子は翻案して

雨もふり霞もかゝり霧もふるはらむすゝきは誰か子なるらん

是俗間に傳ふる所なり。いぶかしき事也といへども。古來稱してやまず故に此に書す。

童子は宮千代なり。西行此童子にはづかしめられて。背反れりと云。今其處を西行背反の松とて有り然れども撰集抄による時は。松島にとゞまる事うたがひなし。

資料D『松島巡覧記』に真澄の記事と同様の西行戻しの記事と伝承和歌が見られることから、真澄は、『松島巡覧記』の記事も参考にして松島の西行伝承を記したと考えられる。

つまり平泉、松島のような名所、旧蹟には、先行する『山家集』『夫木和歌抄』『撰集抄』[5]といった歌集や説話集、『平泉旧蹟記』『平泉雑記』『松島諸勝記』『奥羽観蹟聞老志』『松島巡覧記』など名所記、地誌等の文献資料が多数あった。

そして『かすむこまがた』『はしわのわかば』に名がみえる土地の文人、鈴木常雄、村上良知、藤塚知明といった知友宅に滞在し、彼らから聞いた土地の伝承とともに机上でそれらの参考資料を使いながら平泉、松島の西行伝承に関する記事を、真澄が執筆していたことが想像される。

（四）

さらに真澄の記した西行伝承は、真澄が久保田城下に落ち着いた生活をはじめた後年の仕事である図絵、地誌、随筆等にも記されている。例えば『新古祝甕品類之図』には、次のように記されている。

三河ノ國寺部村、伊東武介家蔵。

三河國擧母郷に明和ノ年、洪水ノとき高畠崩れて流れ浮き漂るを拾ひて澁壺とせり。一ツは大にして、一ツは小シ、その形、大なる冬瓜の腹に高口を付たるにことならず。

擧母は古、衣の里にて、梅をもはらよめる歌あり。圓位法師の歌とて、

ほと近く衣の里となりにけり二村山を越えて来れは

二村山は尾張ノ國大久傳村に近く、衣へは四五里もあるべし。古道にて麓に大同二年と彫りたる石地蔵あり、山を峠といふ。こゝぞいにしへの両反山ならむと人みないへる。

また三河ノ國の出生寺〔法蔵寺を云ふ也〕の山號も二村山と云ふ也。出生寺の方は衣に遠くして、西行上人の和歌のこゝろといさゝかたがふものか。

ここには、三河の國寺部村、伊東武介家に所蔵される大小二つの澁壺の記事とともに、圓位法師の和歌として「ほと近く衣の里となりにけり二村山を越えて来れば」と記されている。同様の和歌は『百臼之図』にも引用されているが、この和歌は、『夫木和歌抄』の藤原経衡の和歌「程ちかくころもの里に成りにけり二村山をこえてきつれば」から間違って引用したと思われる。

いずれにしても、ここで真澄は衣の里と二村山との場所を問題にしているが、根本的に和歌が違っていることに気付いていない。真澄は二村山の場所として尾張ノ國大久傳村の「二村山」や三河ノ國の出生寺の山号「二村山」などをとりあげている。

『東海道名所図会』寛政九年（一七九七）の「二村山」の項にも、二村山の場所の諸説が記されているが、最後に「一説に猿投山ともいう。また擧母の里の東北にありとなん。今さだかならず」とあることからこの時期にはすでに場所が分からなくなっていたと思われる。

このように真澄は、後年、秋田に腰を落ち着け、地誌編纂、随筆の執筆といった文筆活動をしていた時期には、『新古祝甕品類之図』『百臼之図』にみられるような博識をアピールするための考証の一つとして西行伝承を使っていたと思われる。

同様に、地誌『花の出羽路　秋田郡』「布自山マ」の項では、久保田城下の近く、おふしやま（富士山）と呼ばれる小山を紹介した記事の中で、各地の富士山を詠んだ西行の伝承和歌を紹介している。

西行法師の歌とて、「ふし見てもふしとやいはむみちのくの岩城の山の雪のあけほの、こは津軽不二也。また、西行の歌とて「讃岐にてこれをや富士と飯の山朝けの煙たゆるまもなし、また、「薩摩かた頴娃郡なるうつほ嶋是や筑紫のふじといふらむ、こは開聞嶽也。

日本各地、富士の名のついた多数の山があるが、真澄も西行の伝承和歌をとりあげながら津軽、讃岐、薩摩の富士を紹介し、その博識ぶりを発揮している。さらに随筆『布伝能麻迩万珥』八巻「あそべのもり」の項では、

倭漢三才図絵六十五巻　大日本道中記などに定家卿の歌とて、富士見ずばふじとやいはむみちのくの岩城の嶽をそれとながめむ　といふを載たり。されど此歌定家卿の集拾遺愚集などには見へず。諸国里人談三巻ノ倭訓栞部不ノ　などに、西行法師が歌といへる、その実否をしらず。蓋人の口にいひつたへけむ歌にて、さる歌の仙のよまれしにはあるまじくや云々と見へたり。考、また、不二見てもふじとやいはむみちのくの岩木の山の雪の明ほの　とも人のいへり。此岩城ノ嶽の古名はあそべのもりといふよし。

と、岩城の嶽（津軽富士）を詠んだ定家、西行の伝承和歌を文献資料によって紹介している。しかしここで、注目したいのは、定家「富士見ずばふじとやいはむみちのくの」西行「不二見てもふじとやいはむみちのくの」の初句の違いである。

この初句の違う和歌をそれぞれ紹介した真澄の意図は、久保田城下の文人たちに自らの博識をアピールするという先の『新古祝甕品類之図』『百臼之図』にみられた目的以外に、真澄の旅と西行の伝承和歌との関わりがみえないだろうか。

筆者には、本稿の最初に掲げた『豊国筑紫路の伝説』の西行の姿と真澄の姿が重なるのである。つまり、旅の途中で土地土地をほめる西行の伝承和歌を書き綴った菅江真澄自身もまた、西行[6]（諸国を遍歴する人）の一人であることに気がつくからである。

（当研究会会員・埼玉県川口市）

注

（1）真澄は、断簡に滋賀県坂田郡米原町醒井の泡子塚にまつわる西行伝承を記している。

「断簡」秋田市、福地発明旧蔵

むかし西行上人ある家に入て茶飲みて出給ひてけるとき、其やとのむすめ、上人に恋して茶碗に残りたる淡をなめてはらみ、やかて子うめり。上人ふたゝひ此宿にいたりて、其子をめしてたなこゝろにのせてふと吹たまへは泡になりてちりぬといへり。あは子の碑あり、其台石に彫て、

一服一煎一期終
即今端的雲脚泡
仁和三年　西行とあり。

五倫石也。此ゑり石いさゝか奥にありしを、近きころこゝにうつせり。そをいかゝして書おとしけむ、いぶかしきこと也。

（2）現在の岐阜県恵那市の西行伝承については、『恵那の中山道かたりべの小箱』恵那市教育委員会、平成七年を参照。

（3）『すわの海』に記された西行和歌は、長野県駒ヶ根市の大御食神社が所蔵している。内容は、「神祇道ハ我国ノ大祖ナレバ糸竹ノ直ナランコトムネニタエナカラン、駒ガ嶽スソ野ノ森ニ来テ見レバ小町ガ家ニハヤスナナ草　西行」というもので、三頭の馬の水墨画と和歌の賛のある画幅（絹地　総丈　一・五六m　巾三十六㎝）で、右の西行の和歌が記されている。

（4）『鬱田濃刈寝』天明四年九月二十日の条にも、出羽三山、羽黒山の記事の中に「西行戻といふところあり、いかゞしてかもどり来給ひしやらんと、あないの翁ほゝゑみたり。」とある。

東北の「西行戻し」の伝承地には福島県耶麻郡猪苗代町松橋「西行法師の戻り橋」、福島県いわき市遠野町滝「西行戻し」、山形県東田川郡羽黒町の羽黒山「西行戻し」、山形県寒河江市の慈恩寺「西行戻しの涙坂」、宮城県遠田郡涌谷町箟岳の箟峰寺「西行戻しの石」、宮城県宮城郡松島町「西行戻しの松」などがある。

（5）『かすむこまかた　続』天明六年三月八日の条に『撰集抄』巻二、第六「奥州平泉郡女人法花経授事」からの引用がある。

（6）『国語大辞典』第一版、小学館、昭和五六年の「西行」の項目には、「（西行が諸国を遍歴したところから）諸方を遍歴すること。また、その人。」とある。

小堀光夫（こぼりみつお）
一九六三年、東京都生まれ。國學院大學卒業。現在、㈱三弥井書店出版部に勤務。日本口承文芸学会会員。

編著・論文等（主として菅江真澄関連）

▼『いまに語りつぐ　日本民話集』全45巻（花部英雄共編　作品社　二〇〇一～二〇〇三年）

▼「菅江真澄と「狐の話」―『雪の出羽路』平鹿郡を中心として―」（『昔話伝説研究の展開』野村純一編　三弥井書店　一九九五年）

▼「菅江真澄と民間説話　―『雪の出羽路』平鹿郡を中心に―」（『説話・伝承学』第三号　説話・伝承学会　一九九五年四月）

▼「菅江真澄と民間説話Ⅱ　―地誌における「奇談」をめぐって―」（『世間話研究』第十号　世間話研究会　二〇〇〇年十月）

▼「西行伝承と菅江真澄　―『鬱田濃刈寝』を中心として―」（『西行伝説の説話・伝承学的研究』平成十年度～平成一二年度　科学研究費補助金基盤研究（C）（1）研究成果報告書　課題番号10610427　神戸大学　二〇〇一年三月）

▼「菅江真澄と西行伝承　―『かすむこまがた』『はしわのわかば』を中心として―」（『國學院雑誌』第一〇四巻第三号　國學院大學　二〇〇三年三月）

▼「資料　菅江真澄の記した西行伝承」（『西行伝説の説話・伝承学的研究』平成一三年度～平成一五年度　科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書　課題番号13410125　神戸大学　二〇〇四年三月）

▼「菅江真澄の旅と西行伝承」（『昔話―研究と資料』第三二号　日本昔話学会　二〇〇四年七月）

▼「伝説研究と菅江真澄　―柳田國男『山島民譚集（一）』をめぐって―」（『口承文藝研究』第二八号　日本口承文藝学会　二〇〇五年三月）

巻頭論文 2

小さき「百姓」たちへの接近

―柳田国男と秋田叢書―

松本三喜夫

一

昭和三年（一九二八）九月二十三日の菅江真澄翁百年記念の際に、柳田国男が秋田図書館で行った「秋田県と菅江真澄」と題した講演の中で、彼が菅江真澄の資料について初めて知ったのは、明治の末ごろのことで、故人となった山方香峰から聞いてのことであった（『菅江真澄』ちくま『柳田国男全集』3　四五八頁　以下『菅江真澄』と略す。）とのべている。山方香峰は秋田の人で、山方石之助のことである。

柳田の年譜では、明治三十五年（一九〇二）に内閣に出向するとあり、その後には「内閣文庫の本をよく読む」としばしば記述されている。また昭和四年（一九二九）に『来目路の橋』の活字本に記した「信州と菅江真澄」の中では、「上野の図書館にあるものは、自分が内閣の記録を管理していた頃に、西村・竹間氏等が複写せられた本である」（『菅江真澄』前出　四八一頁）とものべていることから考えると、初めて真澄作品に接したというのはこのころのことをさしているものと思われる。

柳田は真澄の作品について、どのように考えていたのであろうか。彼は「おがさべり」の中で、真澄について次のように記している。

「昭和三年の七月は、菅江真澄翁の百年忌に相当する。ゆえに自分はまず秋田に向って、この遠来の詞客の男鹿紀行五篇を、一つには男鹿の山水の供養のために、刊行することを勧めたいのである。

真澄翁は最後に秋田の地に入って落ち付くよりも十五六年も前に、多分は寒風山の麓を過ぎて、椿・岩館から津軽の木蓮子に、海伝いに入っている。（中略）これが尋常の遊歴文士の勉強した風流でなかったことはもとよりである。現に彼が世を去ってから百年になるけれども、いかなる郷土愛もいまだ寸分の咏歎をもって、彼が述作以上に加うることを得なかったのである。」（『雪国の春』ちくま『柳田国男全集』2　一六〇頁　以下『雪国の春』と略す。）

この記述からも柳田は真澄に対して大いなる関心を持って、その足跡や業績に思いをめぐらしていることがうかがわれる。柳田の男鹿への旅の目的は、直接的には真澄の男鹿の紀行五編の刊行を土地の人びとに勧めることにあった。彼は「前に遊んだ人の筆の跡は、遺すばかりでなく得やすいものにしておきたい」（『雪国の春』前出　一六一頁）とのべているように、真澄作品の刊行、活用を意図しての秋田への旅であった。

柳田の「おがさべり」の中での真澄への言及そのものは少ないが、随所に真澄の説をそのまま根拠として採用しているかのような記述に容易にであうことができる。それだけ柳田は真澄の記述を評価していたものといえる。そのことが男鹿の五編の刊行の奨励につながっていくことになる。

菅江真澄の記述の資料的価値や作品を覆刻していこうという、彼の目的をもう少し見てみよう。昭和四年（一九二九）七月、信州松本で『来目路の橋』が刊行されたとき、その活字本に柳田は「信州と菅江真澄」を著した。真澄の膨大な作品を総称するとき、一般的には「菅江真澄遊覧記」という言い方をする。これからのべようと

するように、柳田は真澄の作品に資料的価値を高く評価するからこそ、秋田に出向き、三河に旅し、さまざまな調査を行っていく。そういった視点から見たとき、果たして真澄の作品を、たとえ総称とはいえ「遊覧記」という言い方でのべることについては、いささか疑問を感じないわけにはいかない。なぜなら「遊覧」は物見遊山で遊びながら見ることであるからである。真澄の旅は彼の人生そのものであり、作品はその結晶であった。柳田自身、いまだかつていかなる郷土愛も彼の述作を超えないと評している。

柳田は「信州と菅江真澄」の中で、真澄を「世に顕われざる生活の観察」者といい、作品については「あらゆる新しい社会事物に対する不断の知識欲と、驚くべき記憶」（『菅江真澄』前出　四八二頁）であるという。彼の記述の方法は「小さき百姓たちへの接近」であって、真澄は学問以外にかくれたる目的は絶対に持っていなかった。なぜなら彼の淋しい一生からそれがうかがえるという。真澄「隠密」説などに対する否定である。真澄の作品は「むしろ我々の学問のために感謝すべきもの」と考えていた。

男鹿の五編の刊行を秋田の人びとに勧めようとする真意は、果たしてどこにあったであろうか。真澄の書き残してくれた作品の刊行によって、その地域の人びとに認識を新たにしてもらい、さらなる真澄作品の発見へとつなげていくことを柳田は想定していた。その地域にかかわる真澄の作品の見本を示し、そういった作品なら私のところにもある、あそこにもここにもある、というように新たな作品発掘を意図していた。真澄についての当時の研究の現状からの発想であったといえよう。

真澄の作品に柳田は何を期待していたのであろうか。それは彼のことばを借りれば、新たなる学問の「芽」（『菅江真澄』前出　五〇二頁）であった。真澄の作品に書かれているのは、それこそ百六十年ももっと前のできごとであり、小さき人びとの様子であった。それらを今と比較して、何がどのように変化しているか、その変化の理由はなぜかがわかると考えた。それは真澄が旅した東北の人びとにとっただけ意義あるのではなく、他の国の人びとにとっても有用であると考えていた。

「九州四国の山の村、もしくは岬の片端に古く住む部落にして、おのおのわが土地のみの奇習異風と認め、原因を祖先の無知蒙昧に托せんとしていた者が、かろうじてこの書によって膝を拊ち、微笑を禁じ得ぬような『偶合』を、発見しようとしているのである。我々が『真澄遊覧記』を刊行せんとする本意は、本当はここにあったのである。」（『菅江真澄』前出　五〇二頁）

もう少し柳田のことばを引けば、さらに次のようにいう。

「南北二千哩（マイル）にわたる長い群島の慣習が、隠れて一致していたのはこればかりでは決してないが、中についても前に列記する四種のごとき（大晦日から小正月、春田打ちの行事のこと…筆者）は、すこしずつ名をかえ形を異にして、今もって各地新春の欠くべからざる式法となつている。しかるにもかかわらずに、人は往々にしてこれを各自の郷里に限るもののごとく、誇りあるいは恥じんとしていたのは、まったく松の内は家に引き籠って、出でて他郷を見る折が少ないからであった。これだけ弘く行われかつ互いに知らなかった習俗ならば、根源はおそらくはなはだ遠く、また説明せられねばならぬ大切な意味があったのである。人にその疑問と想像とを抱かせるだけでも、我々の働いた甲斐はあると思っている。」（『菅江真澄』前出　五〇二～三頁）

柳田はのちに『郷土生活の研究』などの中でのべることになる「遠方の一致」や重出立証法の原初的な考え方を見ることができ、このころから彼の学問的方法論構築への意図を感じとれる。真澄の作品は単に東北の人びとにとって有用な資料であるだけではなく、広く日本の学問のために有用であったのである。

菅江真澄の作品の資料的価値などについて、辞典などでは江戸時代後期の庶民生活をスケッチで記録していること、旅の足跡が各地で確認でき、人びととの交流の様も遺墨資料でわかることなどから、彼の関心事はさまざまに及んでいるものの、彼の旅の目的は「原日本人」の姿を知ることにあったとしている。真澄の旅の目的は、柳田をふくめた真澄研究者にとって最大で、おそらく永遠の課題であ

ろう。それを「原日本人」というものの言い方で処理してしまうには、あまりに問題が多い。そもそも「原日本人」とは何を意味し、「原日本人」でない「日本人」とは何をさしているであろうかと疑問がでてくる。

前述したように柳田は真澄に大なる関心を持ち、しばしば秋田へ旅をする。「雪国の春」の東北の旅のあと、大正九年（一九二〇）十月から中部・関西・中国地方へ旅をする。このときの旅の成果は、『秋風帖』として昭和七年（一九三二）に発刊される。この旅の途次、真澄の生国といわれている三河にたちよる。おそらく真澄と植田義方とのかかわりの追究のためであったろう。

柳田の真澄への関心の高まりと作品の刊行は、大正後期から昭和の初期に集中的に行われている。それらの作品をひとつにまとめて刊行したのが、昭和十七年（一九四二）に発刊された『菅江真澄』であり、各論とも初出以降、新たにわかったことがらについては、部分的に追記がなされている。『菅江真澄』は「序」（昭和十七年二月）、「白井秀雄とその著述」（昭和三年十一月）、「秋田県と菅江真澄」（昭和三年九月）、「信州と菅江真澄」（昭和四年七月）、「遊歴文人のこと」（昭和四年十一月）、「正月及び鳥」（昭和五年二月）と真澄の旅の年譜から成り立っている。

「白井秀雄とその著述」は『紙魚』という名古屋の雑誌に掲載したもので、内容的には真澄という人物の不明な点を彼の生国と思われる国の人びとに知らせて、彼の出自、来歴などに手がかりを求めようとしたものである。そのほとんどが彼の著述の紹介となっている。真澄自身については、彼の著述が彼を語るだけで、彼にかかわる逸話というものもない。したがって彼を知るためには、彼自身がどのような作品をこの世に残したかをまづ知る必要があるという、柳田の考え方に基づいてまとめられている。

「秋田県と菅江真澄」は秋田県考古会菅江真澄翁百年記念の講演でのべられたもので、彼の旅の紹介、その価値と意味などが内容となっている。その後の真澄研究の大きな指針となったものといえよう。「信州と菅江真澄」は『来目路の橋』の、「遊歴文人のこと」は『わがこころ』の、そして「正月及鳥」は『奥の手風俗』の活字本の際にそれぞれ書かれたものである。「菅江真澄の旅」は柳田の真澄研究の中で知り得た彼にかかわる旅の情報を年譜としてまとめたもので、詳細な内容になっているとともに後学の者に対する配慮が感じられる。

これらのことからも柳田が昭和三・四年（一九二八・九）ころ、菅江真澄研究に精力的に取り組んでいたことがうかがえる。真澄の故郷の三河とのかかわり、彼の生涯中でもっともかかわりが深かった地・秋田の人びとへの研究心の喚起、そして信州の人びとの真澄作品の刊行を通じての作品普及と新しい作品発掘への動向が生まれることを期待してのことであった。

しかしながらその後の真澄研究は、目をみはるように盛んになるということはなかったのであろうか、前述した内容で柳田は『菅江真澄』をまとめ出版する。ほとんどが十年以上も前の作品で、「菅江真澄の旅」という年譜をつけ、各論稿の末に若干のその後わかったことがらを「追記」として付け加えたものとなっている。このことからも菅江真澄研究は、柳田の精力的な啓蒙、啓発にもかかわらず飛躍的に進むということはなかったといえよう。

柳田は『菅江真澄』の序文で、自分のかっての作品にふれている。真澄について最初に書いたのは「還らざりし人」（『秋風帖』収録）で大正九年（一九二〇）であった。次いで昭和三年（一九二八）の作品「真澄遊覧記を読む」で、『雪国の春』に収録されている。『退読書暦』のなかの「霜夜談」も同じ年の発表である。そして「民謡と越後」（『民謡覚書』収録）は昭和十四年（一九三九）にまとめられた。これらもふくめて柳田は「もうこの翁に対して私の抱いている感懐は、説き尽くしたといってもよいのである」（『菅江真澄』前出　四〇三頁）とのべている。とはいうものの柳田はそれこそ二十年来の疑問であった、真澄の生い立ちやどうしてあのような大きな旅をするようになったのかという、その動機などは少しも明らかになっていないのであった。

柳田は主として東北の人びとに向かって、今まで調べてきた彼の

業績をもっと利用させることによって、新たに何かを発見でき、今まで知り得なかった何かがわかるのではないかとの希望を抱いていた。そのためあえて古い文章を編むことによって『菅江真澄』を刊行していく。柳田は真澄がどんな人物であったかを最大限に説明するのみで、ひとつの伝記を整理したという気持ちはないという。

柳田は真澄研究の成果をまとめるように、年譜である「菅江真澄の旅」を著す。その中で彼は意図的に多くの村里の名前であるとか、かかわりのある家や人の名前を多く盛りこむこととした。そうすることによって、その地域の人びとが、またその家にかかわりのある人びとが関心を抱いてくれることによって、「あるいはもう一度古い書きものや手紙類を、探してみてくれることになる」（『菅江真澄』前出　四〇四頁）ことを期待していたのであった。

真澄の残してくれた仕事の意義の大きさに比して、彼の人物像があまりにも不鮮明であり、柳田は自分自身の持てるものをすべてさらけ出すことによって、さらに人びとへの研究心の換気を意図していた。柳田は真澄像の究明に非常に精力的に動いてきたが、所期の目的が達成されたわけではなかった。しかし、まだまだ彼はあきらめていなかった。

二

柳田の精力的な真澄研究にもかかわらず、所期の考えのとおりの成果を上げることはできなかったが、彼はその過程でとりわけ東北各地の地域の人びととのかかわりによって研究の推進を考えていた。以下、彼の各地での取り組みと彼に呼応した人びとの動きを見ていくことにする。

真澄作品の新たなる発掘と真澄研究の普及のために、柳田が計画したのは秋田県立図書館などに所蔵されている真澄作品の印刷・刊行であった。「秋田県と菅江真澄」の中で、柳田は真澄本の存在は古くから知られており、その二・三を資料として用いている人がいるが、それを発刊し世の中にひろく知らしめようという計画は南部叢書と秋田の動向以外に知らない。それは相当の理由のあることで、考えてみると、真澄作品の刊行には困難さがある（『菅江真澄』前出　四五九頁）という。

彼が指摘している困難さとは、真澄の作品の挿画には彩色画が多いこと、また彼の文章は今の時代に適していないという。柳田によれば、真澄の文章には癖があり、彼の学殖が表れすぎており、読んで聞かせて解説してやらぬとわからぬところがあるという。囚われた文体をもって、よくあれだけの多思多感を自由に表現したものだと柳田は感心する。また柳田は真澄の文章について、文章も絵と同じで「精彩を発揮したのは、言わば一細点をも惜しまざる自然に対する忠誠であります」（『菅江真澄』前出　四六一頁）とのべ、文章にも真澄の対象を自然のままに映し出したいという努力と気持ちとをくみとっている。

真澄の絵について、柳田は次のようにのべている。

「真澄の絵は確かに習った絵ではありませぬ。後年は自画賛の幅をかくまでの自信ができたようですが、布置構図に少しも法則がなく、もしいわゆる胸中の雲煙がありとしますれば、それは直接に自然を師としたものであります。元来器用な人であったことは確かですが、それよりも何とかして真実を写したいという努力、それが積み重なって末には多くの苦労なしに、ああいう何人にも企てられぬような、無邪気な逸品を世に留めることができたものと思われます。」（『菅江真澄』前出　四六一頁）

それでは柳田はどのような形で、真澄作品の刊行を考えていたのであろうか。信州で刊行された『来目路の橋』（昭和四年八月）、『伊那の中路』（昭和四年十月）、『わがこゝろ』（昭和四年十一月）『菴の春秋』（昭和五年九月）、『鄙廼一曲』（昭和五年九月）を見ると、真澄が書き残した原本そのものの覆刻版と活字本のセットで出されている。また『奥の手風俗』（昭和五年二月）も同様である。発刊元は『鄙廼一曲』が郷土研究社からの刊行で、それ以外はいずれも三元社の発行となっている。

『鄙廼一曲』は当初、信州での真澄本の発刊計画に入っていなかったが、昭和四年（一九二九）十一月に郷土研究社の岡村千明によっ

て、神田の古本屋で偶然に発見されたものを胡桃沢勘内が知らせを受け、とり急ぎ上京して入手したという経緯を持つ。柳田は活字本だけでの発刊を考えていたようだが、信州の関係者は他の資料と同様に覆刻本と活字本のセットによる発刊を考えており、そこには考え方の相違があった。この『鄙廼一曲』に関して、柳田が別の考え方をしたのは、あるいは印刷費の問題であったろうか。結論的にはセットで刊行されたが、このことが他の資料との発刊元の相違につながったものと考えられる。胡桃沢は後にこのころの柳田について「態度に変化があったらしく」（胡桃沢友男『柳田国男と信州』岩田書院　五一九頁）とのべているが、おそらくそういった意見の違いを意味しているのであろう。

柳田が考えていた真澄作品の刊行は、原本に近い形での覆刻版と校訂を行った活字本とのセットによるものであった。これは柳田が真澄作品について持っていた見解の反映そのものであった。彼は真澄の絵画については、そこには事実を写したいという努力が積み重ねられており資料的価値を認めていた。しかしながらそのまま読者に知らせることは至難の業であった。絵画にかかわる印刷技術の問題とそれにかかる経費の問題があり、資料普及という面からはあまり高価にすることはできなかった。そうかといって柳田の意図していたものは美術品をつくることでもなかった。この発想が覆刻本の計画へとつながっていく。

また柳田は真澄の文章について、個人的な記述を除いてもう少し読みやすくしておく必要もあると考えていた。決して流麗でない文体、囚われた文体をどうすれば人びとにもう少し読みやすくなるか思案した。それが校訂による活字本へとつながっていく。

できるだけ原本に近いものを刊行しようとすると読みにくく、読みやすくすると原本のイメージから遠くなっていく。一冊の本の中でその双方を実現するということは困難であった。そこで覆刻本と活字本のセットによる刊行となっていくのであった。一般の人びとにも広く真澄資料を知ってもらおうという、普及のための戦略としての発刊計画であった。

柳田は『菅江真澄』の中の「白井秀雄とその著述」で、真澄の作品の一冊一冊について簡単な解説を附しているが、そのあとに当時の真澄作品の刊行の現状にふれている。

「前に列記した五十余篇の中で、現在印刷に付してあるものは、旧南部領内にかかる日記の十篇だけが、南部叢書の巻六に採録せられたに止まり、それとても不完全な伝写本により、美しい挿画は全部省略せられているのである。実際あまりにこの絵が見事であることは、今後の覆刻を妨げるばかりでなく、また精確なる写しを世に残すことを困難にしている。」（『菅江真澄』前出　四二二頁）

この柳田の文章には、当時の真澄作品刊行の現状の問題点が記されている。一つにはこの活動は旧南部領内に限られていることであり、真澄作品の全体を浮き彫りにするものとなっていないこと、真澄作品の覆刻が不完全な伝写本によるもので、資料的な検討が加えられていないこと、そして真澄作品の最大の価値とでもいうべき挿画がすべて省略されていることである。この南部叢書の発行からも、当時の印刷技術や普及のための経費という面から、いかにその刊行が困難な事業であったかがうかがわれる。

そうはいいながらも挿画を省略することは、真澄作品の資料的価値を損なうものであり、柳田にとっては納得できるものではなかった。南部叢書の覆刻の方法がことのほか気に入らなかったと見えて、柳田は「白井秀雄とその著述」の追記の中で、さらに次ぎのようにものべる。

「以前南部叢書の中でも十種の紀行が刊行せられたことは、本文に述べた通りであるが、彼は旧南部領に属するものを主とし、その順序も飛び飛びになっているのみならず、定本は近年の筆写本で誤読が多く、校訂もまた必ずしも精密でない。」（『菅江真澄』前出　四三三頁）

柳田の南部叢書の底本に問題があるとか、校訂に問題があるとかという指摘はおそらく弁解の余地のないものといえよう。しかし、いつも後世の研究者が前世の研究を後世の視点や成果をもって、それを論評することはたやすいことと思われるが、少なくとも真澄作

品を他から指導を受けることもなく、逸早く作品の普及に努めた南部叢書関係者の努力は、柳田の指摘とは別に評価しておかなければならないと考える。柳田のこの一連の発言は昭和四年（一九二九）、または昭和十七年（一九四二）のものであるのに対して、南部叢書の第六冊、つまり真澄の作品の発刊は昭和二年（一九二七）九月のことである。

柳田はこのあとさらに追記の中で、南部はもちろんのこと、秋田、青森、信州などで、真澄作品の刊行の動向があったことをのべていく。そして昭和十七年（一九四二）の『菅江真澄』刊行年という時代を背景にして、「世の中太平ともならば再び信州の刊行会と同じ計画が、各地に継続せられるようになるであろうことも疑われない」（『菅江真澄』前出　四三四頁）とのべ、信州松本の例を範として、引き続き真澄作品の刊行への執念と期待感を持ち続けていくのである。

三

それでは柳田の意図した真澄作品の覆刻計画が、各地でどのように取り組まれていったかを見ていくことにする。まずもっとも真澄とゆかりの深い秋田であるが、彼が『雪国の春』の中に「半島の一世紀」で真澄に言及し、そこで「男鹿紀行五篇」の刊行を勧めたいとしている。

秋田での真澄作品の覆刻に関しては、当初、大別して二つの動向があったものと考えられる。ひとつは柳田がのべているように、彼が中心となって彼の考える方法での発刊への動向であり、もうひとつは秋田叢書にかかわる人たちの動向であった。結果的には、柳田の意向どおりにはすすまず、彼が秋田叢書の関係者の動向を支援していったものと思われる。

柳田がすすめたという真澄の「男鹿の紀行」五篇の刊行は、その時系列から考えれば、おそらく昭和三年（一九二八）九月に開催された菅江真澄翁百年祭あたりをめどに覆刻を考えていたものと思われる。なぜなら彼は昭和初期において、真澄研究を広く普及させていきたいという強い意志を持っており、真澄の百年祭を絶好の機会ととらえていた。そして出版物を媒体として広く真澄研究のネットワーク化を図り、各地こぞって一緒に研究を進めたいという考えを持っていたからである。

柳田がのべる「男鹿の紀行」五篇とは『男鹿の秋風』『男鹿の春風』『男鹿の鈴風』『男鹿の島風』『男鹿の寒風』である。『男鹿の秋風』は日記で、文化元年（一八〇四）八月から九月の記述である。秋田を八月半ばに出発して男鹿半島を巡って、九月十一日には能代につく。『男鹿の春風』はやはり日記で、文化七年（一八一〇）三月から五月の記述。能代にでて、能代から八郎潟西岸沿いに男鹿半島につき、四月には真山に、五月には湯本にいた。『男鹿の鈴風』は日記で、文化七年（一八一〇）の記述。男鹿半島の北海岸にいて畠（入道崎）から丸木舟で水島を見物した。『男鹿の島風』は日記で、文化七年（一八一〇）七月の記述。男鹿半島の塩戸から丸木舟で島々を巡って加茂の浦につく。加茂から再び丸木舟で門前に上陸。『男鹿の寒風』は日記で、文化七年（一八一〇）七月から翌文化八年（一八一一）二月までの記述。男鹿南海岸にいたが、八月二十七日、男鹿島田で地震にあう。十一月には男鹿北部の村にいた。翌年の一月には宮沢で正月行事を見ていた（内田武志編『菅江真澄著書目録』『菅江真澄遊覧記』5所収）。

柳田はこの五つの真澄の作品に関して「白井秀雄とその著述」の追記の中で、『男鹿の五風』と二重鍵カッコ付けで記して（『菅江真澄』前出　四三三頁）おり、それは文章上で見ると、特定の著作物であるかのような印象を与えるが、「男鹿の五風」は通称、あるいは俗称と見るほうがふさわしい。奈良環之助は「柳田国男先生と秋田」（『男鹿文苑』昭和三九年）の中で、真澄遊覧記の男鹿にかかわる五篇を柳田が「男鹿五風」と呼んでいたと証言している。また『男鹿市史』もそれら男鹿にかかわる作品を「男鹿の五風」と記している。柳田のいう「男鹿の五風」と奈良の証言は微妙な違いを示すものの、おそらくこういった呼び方は柳田が提案し、後に次第に地元で語られるようになっていったのではないだろうか。

それでは柳田はだれに「男鹿の五風」の出版をどのように勧めた

のであろうか。そのことについて、柳田は多くを語っていない。昭和二年（一九二七）の柳田の男鹿への旅の案内をした一人が奈良環之助であり、信州での真澄作品の覆刻刊行の例から推し測ると、奈良個人だけでなく彼の周辺の人びとにへ勧めたものでなかったろうか。『男鹿市史』の記述（四七二頁）によると、昭和二十七年（一九五二）に至り、奈良環之助、山崎真一郎、豊沢武、石田玲水、中山健、長谷部哲郎、天野源一の七人が、男鹿にかかわる真澄作品を現代文に翻訳して『新譯真澄翁男鹿遊覧記』を刊行したとしている。この『新譯真澄翁男鹿遊覧記』はいわゆる「男鹿の五風」と「氷魚の村君」を収録しており、天野源一が代表する男鹿史志刊行会からの発刊で、図絵も納められている画期的なものであった（「菅江真澄研究会会誌」五五号　二二頁）。

『新譯真澄翁男鹿遊覧記』の発刊にかかわって、秋田の田口昌樹から新しい情報をいただいた。『恩荷』創刊号（昭和二七年十月）に奈良環之助の「ヤスコ考」、天野源一の「童蒙記」という作品が掲載されている。そこには『新譯真澄翁遊覧記』の発刊にあたって、柳田国男に教えを請うた状況が記されている。その年の七月であったろうか、天野は「奈良兄に案内されて、東京成城町の森閑たる、翁の大きな研究室に半日余を、直かに教えて頂くことが出来た」とのべている。柳田の「男鹿の五風」への想いもここに実現するのであった。

柳田が秋田での真澄作品の覆刻にあたって、具体的に関係者として名前をあげているのは平福百穂である。

「平福百穂君在世の頃、自分は同君等とともにこの紀行の特に優れたもの、たとえば『男鹿の五風』や『氷魚の村君』などを、原色で模刻してみようと企てたことがあった。種々の障碍があって実現に至らなかった（後略）」（『菅江真澄』前出　四三三頁）。

平福百穂は明治十年（一八七七）十二月、角館に生まれる。明治三十二年（一八九九）、東京美術学校選科卒業。その後、新日本画運動をおこす。帝国美術院会員、東京美術学校教授。正岡子規、伊藤左千夫、斎藤茂吉らとも交流し、アララギ派の歌人としても活躍。昭和八年（一九三三）十月に亡くなる。墓は府中の多磨墓地にある。

平福が柳田ののべているこの計画について、どの程度認識してかかわりをもっていたか、またどのように対応したかは明らかでない。平福が角館の出身であったことと彼の画家としての能力に大きな期待を柳田は持っていたのであろうか。平福については、南部叢書とのかかわりの中でも柳田は言及しているが、それだけ彼に寄せる期待に大きなものがあったということであろう。

柳田が種々の障碍からこの計画は実現しなかったとしているように、「男鹿の五風」の覆刻本と校定本の出版は成功しなかった。『男鹿市史』ののべている奈良らの「男鹿の五風」の刊行は柳田の構想したものとは趣旨も内容も異なり、また時代的にもずっと後のこととなる。

胡桃沢勘内が「真澄遊覧記の機縁」（『信濃教育』昭和五年一月）と題して、信州松本における出版の動向をのべているが、その中で柳田の覆刻計画にふれている。

「真澄遊覧記を原本の通り、彩色画を挿入して写真版を以て一円余で印刷するものがあるが、三百部だけ信州で引き受けて頒布する方法が立てば、其印刷屋に話してもいい。実は真澄翁の百年祭の記念に、秋田でこれを実行する筈で印刷の計画を立てて見たのだが、これは今急に見込みも立たなくなって居る。これを信州の方から始めてもいいのだが。」（胡桃沢友男『柳田国男と信州』　五〇一頁）

この記述によると、秋田と松本の真澄作品の刊行計画は同様のものであったことがわかる。松本では柳田のいう会員をふくめて頒布の見込みが立ち、その後出版の実現へとこぎつけていったが、秋田ではその反対に見込みが立たなく、計画が挫折していったものと考えられる。

秋田の地元紙である「魁新報」は、信州松本での『来目路の橋』の覆刻本と活字本の発刊に関連して、次のような記事を掲げているが、このことは秋田の人びとの間で真澄作品刊行への関心に大きなものがあったことを示しているといえよう。

「柳田国男氏の監修に依り、信州の真澄遊覧記刊行会が真澄遊覧記中信州に関する『来目路の橋』を覆刻し、漸次其他に及ばんとするものにして（中略）更に精良なる和紙に原文原字を其のまま印刷し殊にその精細にして彩色ある画を挿入したる和本仕立を添加したる、用意周到にして親切なる出版は斯界始めて之を見るものにして、真澄翁の事業は益々不朽に伝ふることを得べく、然も縁故深き秋田よりも初発の信州においてこれが美挙に接したるは、翁の意外とする所なるべし。而してこの和洋両冊にて、弐円五拾銭に頒布するも亦意外の廉価なり。」（『柳田国男と信州』前出　五〇九頁から転載）

真澄にとってもっとも縁の深かった秋田ではなく、真澄の旅の出発地ともいうべき信州で真澄作品の刊行がはじまったことは、この新聞記事によれば真澄にとって意外であったろうとしているが、それは真澄にとって意外なのではなく、秋田の人びとにとって、信州松本に先を越されたことへの思いを感じとることができるのである。

四

柳田は秋田考古会が開催した昭和三年（一九二八）九月の菅江真澄翁百年記念会で講演を行ったが、それが「秋田県と菅江真澄」とされている。何とかして柳田は秋田の人びとに、真澄作品の研究の協力を得たいという強い思いが伝わってくる内容となっている。柳田一人では、どこにどのように埋もれているかわからない真澄作品をとうてい発掘することはできそうもないことから、考古会の面々を通じてまずは作品の発掘に心がけて欲しいと柳田は考えていた。

講演の冒頭「昨年の五月、私は仙北に来ておって偶然に秋田考古会の年会があることを聞き、御案内も待たずに出席を致しまして、皆様とこの菅江翁百年祭の御相談をしたのであります」（『菅江真澄』前出　四三九頁）とのべているように、柳田から秋田の人びとへの積極的な働きかけによって、柳田の真澄作品へのかかわりが展開されていく。そして柳田は真澄翁の研究については、真崎勇助をはじめとして多くの思慕者の研究があるが、秋田考古会としてこの百年目という年を空しく逸するべきではないとのべたという。柳田は「申しました」としているが、あるいは檄をとばしたという方が適切であろう。

そしてさらに「真澄遊覧記」の中で、古くから世に知られているものを少しばかり援用した人がいること、また南部叢書の中で、何巻かの略本を刊行したほか、秋田で「今度深沢君等が秋田叢書にその一部を入れようとせられる以外には、まだこれを世に出そうと企てた話も聴きませぬ」（『菅江真澄』前出　四五九頁）とのべる。

柳田のこの記述からすると、秋田では柳田の意図していた方法とは別に、「秋田叢書」というかたちで深沢多市らによって真澄作品の刊行の計画が進んでいたことになる。秋田考古会は大正十年（一九二一）に、秋田叢書の編集者である深沢多市が中心となって設立した研究会（『柳田国男と信州』前出　五〇四頁）であった。

柳田は「考古会」という名称の研究会に、どうして真澄作品の資料発掘とその刊行を期待したのであろうか。明治十年代も終わりに近いころ、坪井正五郎を中心に東京人類学会が活動を開始したが、初期の人類学者にとってさしあたって関心事は古物といわれる考古的資料であった。このことからもわかるように、当時の「考古」ということばは現在のように限定された意味でなく、多様なジャンルを包括することばであったといえよう。秋田考古会についても、こういった研究史の状況からすれば、さまざまな分野に関心を抱く研究者が集まっていたものと考えられる。

講演の中で柳田はまれに真澄作品を援用した人がいるとしているが、おそらく次のような研究動向をさしてのことであったろう。奈良環之助の「秋田に於ける真澄翁の旅行とその著書に就いて」（『草園』二二号　昭和十八年）によれば、昭和三年（一九二八）の真澄翁の百年祭の際に、秋田考古会が村井良八に依頼したことから、村井が『菅江真澄翁伝』を著し、同書を考古会から発刊している。おそらく関係者に配布されたものと思われる。また明治三十一年（一八九八）十一月に寺内村西来院で真澄翁の七十年祭が行われたが、このころ

真崎勇助の真澄に関する資料を取りまとめたものを石川理紀之助が所持していたという。明治二十一年（一八八八）十月には、狩野良知が真澄の伝記をまとめたとしている。

さて秋田叢書であるが、第一巻は昭和三年（一九二八）に刊行され、最終巻の第十二巻は昭和十年（一九三五）八月に発刊されている。秋田叢書の編集の意図について、秋田県知事の序文では次のように記されている。

「主として古来の秘書珍籍を長く現在の如く放置するに於ては、年を経るに随ひ次第に散失湮滅に帰せんとするを憂ふるに外ならざるべし。」（「秋田叢書序」『秋田叢書』第一巻　一頁）

近代化するにつれて、古い書籍などが次第に失われていくことへの危機感があった。そういった現状認識のもと、宮城や岩手では宮城叢書や南部叢書が発刊されている。知事の弁によれば、秋田は仙台や南部に劣らない雄藩である。それまで藩の施策として文化の隆盛に努めるべく、学館を建てて人材の育成を行ってきた。秋田県には「古賢名士の苦心に成れる幾多未刊の秘書珍籍」があり、それをここで改めて刊行することは、県の文教隆盛の意味からも意義のあることとのべる。

秋田叢書の刊行に中心的に努めたのは深沢多市で、奥付によれば彼が代表者となっている。序文では深沢について「文壇の老雄にして斯道の先覚なり、君日夕載籍を渉猟し、秋田に関する郷土史資料の散佚せんとするを慨し敢然起ちて秋田叢書刊行の挙」にでたという。

秋田叢書十二巻のうち、八冊が真澄の著作のほか書画などを口絵として収録している。真澄の作品が収録されていないのはわずか四冊で、当初の巻には真澄の作品が収録されていなかったが、発刊の巻数が進むにしたがって真澄の作品の比重が増していっているように感じられる。真澄作品の発見に努めるとともに、その刊行に努めていたようすがうかがわれる。叢書の真澄作品の収録状況をみておくと次のようになる。

第三巻（昭和四年）口絵写真版　菅江真澄翁肖像
増補雪の出羽路　雄勝郡巻一～六
第五巻（昭和五年）口絵写真版　菅江真澄翁小伝
雪の出羽路　平鹿郡（上）巻一～五
第六巻（昭和五年）雪の出羽路　平鹿郡（中）巻六～十
第七巻（昭和七年）口絵写真版　菅江真澄翁書束
雪の出羽路　平鹿郡（下）巻十一～十四
雪の出羽路　平鹿郡（追加）
第八巻（昭和六年）口絵写真版　菅江真澄翁の手簡
月の出羽路　仙北郡（一）一巻～四巻
第九巻（昭和六年）口絵写真版　菅江真澄翁書画
月の出羽路　仙北郡（二）五巻～十三巻
第十巻（昭和八年）口絵写真版　菅江真澄翁書画・短冊
月の出羽路　仙北郡（三）十四巻～二十五巻
第十一巻（昭和十年）花のいでわち　別本花の出羽路
勝地臨毫（出羽国秋田郡全四冊、出羽国河辺郡全一冊）

秋田叢書第一巻に深沢が記す「凡例」によって関係者の役割を見ておくと、代表者の深沢多市のほかに、編集顧問に喜田貞吉、編集校訂に沼田平吉、細谷則理、大山順造、須田勇助、深沢多市、題簽に赤星藍城、装丁に原田聚文となっている。また中道等ら三人に対しては、本書の発刊にあたって「誘掖指導」に負うところが大であったこと、印刷校訂に関しては国本善治の協力を得たことを記している。

各巻を見ると校訂と校字の担当者が記されているが、校字はほとんど国本一人が担当している。「校字」と校訂とは大きな差異はなく、ほとんど同義的であったろう。柳田によれば、秋田叢書の校訂者は「深沢氏の族人国本善治君である」（『菅江真澄』前出　四三三頁）と記している。また国本は叢書の「巻頭言」では「校字及印刷監督」ともあり、彼の人物像について詳しくわからないが、田口昌樹によれば、彼は秋田の人ではなく、東京の印刷関係者ではなかったかと推測する。

大山の第三巻の『増補雪の出羽路』にかかる解説をみると、編集にあたっては、真澄作品の所在を調べ、その比較検討を行ったうえで叢書に収録していることがわかる。どこどこの所蔵本とどこどこの所蔵本を比較すると、どちらが原本でどちらが草稿本であるとか、あるいは写本か自筆本かを調べながら、真澄作品の成り立ちの経過から、所蔵者の変化を考察する中で編集を行っている。非常に丁寧な仕事となっている。

また秋田叢書とは別に、「秋田叢書別集　菅江真澄集」が全六冊で刊行されている。別集の第一集が刊行されたのは昭和五年（一九三〇）七月で、第六集の刊行されたのは昭和八年（一九三三）八月である。このことからもわかるように、秋田叢書と秋田叢書別集は同時期に刊行されていた。別集は菅江真澄の作品のみを刊行することを目的としていて、第一集には『十曲湖』『恩荷奴金風』『恩荷能春風』『小鹿の鈴風』『牡鹿の嶋風』『牡鹿乃寒かぜ』を収録している。いわゆる「男鹿の五風」が収録されていて、柳田の影響と意図を感じとることができる。

第二集は『けふのせばのゝ』他八篇、第三集には『雪乃道奥雪の出羽路』他九篇、第四集には『鬱田濃刈寝』他十五篇、第五篇『楚堵賀浜風』他十二篇、第六集には『まきのあさつゆ』他十一篇で、それぞれの集の口絵に真澄の遺墨や書簡が収録されている。収録作品は全部で五十作品となり、いかに膨大な事業であったかがうかがわれる。

第一集に掲げられている「編輯同人識」とされている巻頭言から、発刊の趣旨をみてみよう。東北地方は一般に古文献が少なく、とりわけ秋田地方では文献の残されていることはまれで、歴史上の著作、記録、さらには地誌の類はまったく欠けていることから、郷土のことを調べようとする際に非常に難儀をする。しかしながら、幸いにも天明四年（一七八四）に菅江真澄という旅人が秋田に入って、「実に根気よく其の旅日記を書き続け、その中に地方の沿革、風俗、口碑伝説等を詳しく記して置いたのであった」（編集同人識第一集「巻頭言」）とのべ、真澄の作品に着目したとしている。

さらにこの巻頭言では、真澄という人物像にふれ、その名前は自称で本当の名前は白井英二、英雄といい、三河国の豊橋付近の出というが、故郷を去って旅に生涯をおくった理由はわからないとしている。

叢書発刊の趣旨がのべているように、秋田には古い文献が少ないとされる地方であるだけに、真澄によって貴重な資料が提供されているのは事実である。彼が秋田の人でないからといって、他国の人と考えることはできない。むしろ終焉の地が秋田であることから、敬慕と親しみを覚えるとしている。そこで昭和三年（一九二八）の百年忌にあたり、墓前祭を行い真澄に感謝の意を表すとともに、それを機に真澄翁の作品を刊行したいというのが同人の願いであるとしている。

秋田叢書刊行会とは「先づ以て翁の著録を刊行せんとする希望を有したのみならず、その事が本会の重要目的の一つであった」（編輯同人識　第一集「巻頭言」二頁）とものべる。このことは秋田叢書と秋田叢書の別集の双方に真澄の作品が多数収録されていることからも十分にうかがえるのである。

しかしながら真澄作品の刊行には、大きな困難が伴っていた。「それは絵画の非常に多い為めで、若し又此の絵画を除き去るとすれば、其の著録の価値は半減するといふ結果になる。どうしても此の絵画をも生かさねばならない」（編輯同人識　第一集「巻頭言」二頁）と考えたからであり、秋田叢書刊行会では真澄の絵画をも含めた形で刊行計画を進めることになる。柳田も真澄作品における絵画の価値を評価しており、そのために覆刻本と校訂本の二冊による刊行を計画していたことはすでにみたとおりである。秋田叢書同人のこの考え方は、まさに柳田のそれと同じ認識であるが、それはおそらく柳田の指導であったろう。

それでは、秋田叢書に真澄の絵画はどのようにして収録されていったのであろうか。「解題」によれば、「其の本文は総て翁の自筆原本により採録し、又写生図も同原本より直接写真版に製したるものなること、既刊のものと同様である」（別集第五　一頁）としてい

ることからもわかるとおり、原本からの写真製版による手法を用いていた。これは「出来る丈け忠実に翁の意図を再現し、出来る丈け如実に其の面影を伝へやうと努力した」（別集第六　一頁）ことの表れであった。叢書刊行会の面々の細部にわたる配慮と努力がうかがわれる。

こういった秋田叢書の真澄作品刊行の姿勢とその結果に対して、柳田は『菅江真澄』の中で南部叢書と比較して次のようにのべる。

「秋田叢書の方ははるかに親切で、直接に佐竹候家の自筆本に拠り、不必要なる和字漢字に置き換え、句読を明らかにし要目を標出して、すこぶる繙読に便ならしめいいる。」（『菅江真澄』前出　四三三頁）

「真澄翁の紀行には挿絵がはなはだ多く、中には『阿仁の沢水』のごとく、全編画図のものさえあるが、秋田叢書の方はその一枚をも省略せず、他の一方（南部叢書をさす―著者）のは一枚も入れていない。もとより簡略な写真であって、原画の美しさを伝え得たとは言えぬけれども、著者の意図だけはほぼ窺うことができる。」（『菅江真澄』前出　四三三頁）

写真製版という技術を用いた秋田叢書同人の苦労に対して、柳田の評価は原画の美しさという点では今ひとつの感があるが、これらのことによって、秋田にかかわる真澄の主要なる作品が活字として読者の目にふれやすくなったことの意義を柳田は認めているのである。

ここで注意しておきたいのは、菅江真澄の挿画というと私どもは現在出版されているカラーのきわめてクリアな絵を想像するが、この時代にはまだ「総天然色」ということばさえなかった。したがって秋田叢書に収録されているのは、柳田は彩色画による印刷を強調しているものの、当然のことながらモノクロ写真による整版で極めて地味なものである。

五

秋田叢書における真澄作品の刊行に関して、柳田国男以外にも真崎勇助、深沢多市、大山順造、国本善治らの名前がすでに出てきているが、ここでは彼らがどのように活動したかをみてみよう。

柳田は秋田考古会に、真澄作品の新たなる発掘と刊行を勧める役割を担っていた。「自分はこの集（秋田叢書別集のこと―著者）の監修者となっているが、これは単なる看板に過ぎなかったことを告白する。実際の事務に当ったのは、主として深沢氏の族人国本善治君であるが、その校訂の誤り少なく整版の鮮明なのには敬服している」（『菅江真澄』前出　四三三頁）とのべている。柳田が監修者となっているのは、秋田叢書別集四集から六集である。また柳田は秋田叢書の刊行は「深沢多市氏の畢生の事業」ともべている。

別集の第一集には秋田叢書刊行編輯同人として、秋田叢書の同人とほぼ同じく編集顧問喜田貞吉、石井忠利、編輯及校訂沼田平吉、細谷則理、大山順造、深沢多市、題簽赤星藍城、代表者深沢多市、校字及印刷監督国本善治の名前が記されている。

代表者である深沢多市とは、どんな人物であったろうか。人物辞典などにその記載があるものの、評価としては郷土史の研究家という域にある。官吏として働く一方で、郷土研究に努める。ライフスタイルとしては、研究領域の違いはあるものの、初期の柳田に似たものがあった。深沢の研究にかかわってのもっとも大きな仕事としては、県史の編さんに携わったことと何よりも秋田叢書の刊行であった。仕事のかたわら研究に努めることによって、柳田と知己になり、また喜田貞吉と交流するなどしたことが、彼をより一層研究へと進めていく原動力になったものといえよう。彼の略歴について、秋田叢書は次のように紹介している。

「明治七年四月十八日、秋田県仙北郡畑屋村（現美郷町）に生る。東京二松学舎及び仙北郡飯詰村（現美郷町）酔経学舎等に漢文学を修め、明治三十三年仙北郡役所に入りしより、秋田県属、宮城県属、京都府属を歴任して、京都府熊野郡長に任ぜられる。大正十年退官帰郷し、後平鹿郡横手町助役及び名誉助役に就任。昭和六年、病の故を以て辞す。是より前、日露戦役に出征し陸軍一等計手に陞る。其間好みて詩文の作多く、京都時代特に史学熱に拍

車を加へ、帰県後、県史蹟名勝記念物調査委員を嘱託せらる。偶大正十一年祝融の為、多年蒐集の珍籍史料を烏有に帰せしより、貴重史料公刊の急を痛感し目に触るゝに隨って之を謄写印刷に付し、同好に頒つを常とせり。尋で昭和三年、『秋田叢書』出版を敢行し、同五年よりは『菅江真澄集』を続刊し、幾度か経済上の難関に遭遇しつゝも苦心惨憺、編集と経営に膺り、前者は其最終巻第十二巻、即ち本巻の編輯を了りて原稿を印刷所に廻附し、後者は第六巻を発刊して更に材料を蒐集中、昭和九年十二月二十日病革りて永眠す。」

深沢多市の顕彰碑（秋田県美郷町）

彼の墓は横手町清水沢の無量寿院に納められた。深沢の人物紹介では、このあと彼の著作や編集した資料などに言及している。

この略歴には、彼がなぜ秋田叢書の刊行を意図したかがよくうかがわれる。苦心惨憺の末に蒐集した資料を火災のために失った体験が、資料を個人的に所蔵するのではなく、広く普及できる状況にさせておくことの必要性を改めて認識させられたのであった。略歴にもあるように彼は昭和九年（一九三四）に亡くなったが享年六〇という若さで、これからの活動がまだまだ期待されるところであっただけにおしまれる。

真澄翁の百年記念祭が開かれ、仙北郡角館町（現仙北市）では喜田貞吉の、また秋田の秋田県立図書館では柳田国男の講演会が開催された。さらには寺内村では墓前祭、真澄翁の資料展示会が開催されるなど、真澄を通じて郷土研究への気運が大いに高まっていった。秋田県の郷土研究や民俗の研究にとって、真澄の作品が必要欠くべからざるものであることを、深沢は自覚していたであろう。しかし一般の人びとにとって、真澄の作品を手にすることはもちろん、目の当たりにすることすら難しかった。そこで深沢は、それではそれらを出版すれば人びとにとって大いに便利であろうと考えたことから、秋田叢書の真澄作品の刊行へとつながっていく。

深沢はまず県内の有力者といわれる百人に宛てて、秋田叢書刊行の趣意書を配布して、資料刊行への協力を求めた。深沢は会員組織による刊行会の形態を考え、会員の募集を行ったが、入会の返事を出したのは、深沢がかつて世話になった飯詰村（現美郷町）の有力者一人だけであった（『ふるさとの文化人たち秋田人物風土記続』二〇〇頁）という。彼はそういった状況を嘆きつつも、このことが叢書刊行への気持ちをさらに強固なものにしていき、その志は彼が亡くなったあと、彼の夫人へと受け継がれていく。

秋田叢書の第十二巻が刊行されたのは、奥付によれば昭和十年（一九三五）八月であり、深沢は情熱をかたむけた叢書の最終巻を見ずに逝った。第十二巻の編集人兼発行人の代表は「深沢喜佐子」とあり、彼の夫人がその志を継いだ形になっている。

秋田叢書は当初、六冊程度の巻数をもって構成されていたようだが、編集をすすめるにしたがって全十二巻に変更したものと考えられる。深沢は当初の六冊を第一期、後の六冊を第二期と呼んでおり、昭和五年（一九三〇）十月に第二期の発刊を次のように宣言する。

「各位益々御多祥之段奉慶賀候。陳者兼て御援助を得居候秋田叢書刊行の件、今回御蔭を以て大過なく第一期事業完了候事は、本県文運の為め御同慶の至りに奉存候。偏に各位の御同情に依る事と厚く御礼申上候。就ては別紙会報の如く更に第二期事業計画致

候。而して本叢書刊行事業は第二期全部、即ち十二巻刊行を以て終結致度と存候。何卒文献保存の為め引継き第二期にも御加入被成下度奉懇願候。御承知の通り会員数多ければ隨而叢書各巻の頁数も増加し得る次第に候間、特に従来の御厚誼を以て御援助の程折入て奉願候。」（配布文書…著者蔵による）

この配布文書には追記として、この内容を承諾された方は返事を不用とし、もし都合で第一期かぎりで退会される方はご一報願いたいとしている。

秋田叢書の発行部数はわからないが、著者の手もとに「秋田県横手町秋田叢書刊行会　深沢多市」を加入者とする郵便振込み用紙があるが、それには三円六八銭の金額が記入されている。柳田は松本での作品の刊行にあたっては、三百部で一人一円の経費を想定していた。秋田叢書と松本での作品の刊行の形態は根本的に異なるものの、秋田叢書の一冊一冊が大冊であること、また前述したように叢書刊行会への会員の入会がままならないことなどから考えると、この金額は一冊あたりの配布価格であったと推測される。

秋田叢書の編集顧問として、喜田貞吉の名前が記されているが、それでは彼はどのようなかかわりをしたのであろうか。柳田は自分をさしていみじくものべているように、喜田もまた「看板」であったろうか。深沢が京都府の日本海の西端の熊野郡の郡長をしていたとき、初めて喜田貞吉と出会う（『ふるさとの文化人たち』前出　一九四頁）ことになる。

それは、大正八年（一九一九）の秋のことであった。京都府熊野郡久美浜町に住んでいた深沢は、漁師たちの使用している久美浜湾の丸木船（まるこぶね）と出雲美保神社の神事に用いる諸手船が似ていたことから、双方の関係に着目して、京都帝国大学の国史研究室の喜田を訪れたのがはじまりとされている。このときどのような内容が喜田と深沢の間で話されたかはわからないが、以後、二人の交流がはじまる。その年に喜田が主宰する『民族と歴史』の十一月号の表紙に深沢が問題とした船の写真が掲げられていく。このことは喜田が深沢に大きな関心を示していたことの証左で、深沢の学識も大きく飛躍していく大きな契機になったといえよう。

このとき深沢は「表紙説明」として、次のような「諸手船と丸木船」と題した一文を寄せている。筆者は「丹後久美浜紫水生」とある。

「余は本年四月官務を奉じて京都府熊野郡に赴任せるものなるが、寓所の久美浜湾といふ内海に臨み、風景絶佳なり。此の湾に漁夫等の使用する『マルコ』と称する舟は、独木を刳りて作りたらんが如き古代の形を存し、船体大ならざれども走ること軽快なり。而して古来より此の湾にのみ使用せられしと伝えられたり。本年八月出雲に遊び、美保神社に詣し、宮司横山清丸氏と語りて、偶々同神社の神事に用ふる『諸手船』といふを見る。形状及び容積マルコと相似たるは、何等か理由のあることあるべし。即ち写真にして大方の研究料に供す。」（『民族と歴史』大正八年十一月号　四九頁）

このあと深沢は、日本書紀に記載されている美保神社は諸手船に言及していく。

その後、喜田は大正十二年（一九二三）三月に、秋田を訪れて深沢と交流を深めている。また昭和三年（一九二八）九月には、前述の仙北郡内で講演会を実施している。喜田が秋田叢書や秋田叢書別集の刊行にあたってどのような働きをしたかについては、おそらく具体的に大きなものはなく、むしろ深沢にとってその交友が精神的な支えとなっていたといえよう。

真澄作品のうち秋田藩校の明徳館に納められている、いわゆる『菅江真澄遊覧記』七七冊十二帖は国の重要文化財に指定されている。そのほか真崎勇助の蒐集になるもので、明徳館に納められなかった二十数種の作品が大館の栗盛教育財団に所蔵されていたが、現在では大館市立中央図書館に移されている。柳田は真崎について次のようにのべている。

「深沢・国本二君の活躍する以前、秋田県で菅江真澄翁のために最も多く働いたのは、真崎勇助という考古学者であった。この人の蒐集中にはなお二十数種の、明徳館に入らなかった遺著が含まれていたが、現在それがことごとく大館町の栗盛教育財団に買い取られて珍蔵せられている。『真澄遊覧記』のこれまで知られ

ずにいた巻々が、この文庫のみにあって、幸いにして秋田叢書の中に載録せられ得たものも幾つかあるが、それよりも著者の伝記のために大切であるのは、『筆のまに〳〵』と題した数巻の随筆、その他若干の雑記録で、これらは今もまだ活字になっていない。自分はその保存と将来の利用について、深い関心を抱かずにはおられぬのである。他の多くの旧家でも掛物とか短冊、いわゆる断簡零墨の末までも珍重しているから、著作や書翰の類とても、散佚するようなおそれは今はなかろうが、それだけでは実は何にもならぬのである。少なくとも社会に向かって栗盛財団のごとく、ここに持っているということを明示する必要があると思う。」（『菅江真澄』前出　四三四～五頁）

真崎の蒐集していた図書資料は「真崎文庫」と称され、今年（平成十七年三月二十九日）の大館市の文化財保護審議会で市の有形文化財に指定された。文化財としての申請時の図書は二〇八一冊とされている。昭和四十五年（一九七〇）に「真崎文庫」の整理をした、当時の秋田県文化財専門委員の原武男がその「真崎文庫目録」に解説を記しており、真崎の人となりについてふれているので、その記事に依拠しながら真崎の人物像を紹介する。真崎の蔵書は昭和三年（一九二八）九月、財団法人栗盛教育団の所管にあったものを大和田楳之助らが整理して、「文献目録」を発行したが、再度、その全容を的確に把握するため原が蔵書整理をしたのであった。

真崎勇助は天保十二年（一八四一）七月十日、今の秋田市東根小屋町（中通）に生まれる。長じて藩主に仕え戊辰の役に出陣する。明治二年（一八六九）の藩政改革の後も佐竹知事（旧藩主・『菅江真澄遊覧記』所持者）に家従としてつかえる。かれは学究肌の人で碩学の人。原の解説によれば、そのころ「菅江真澄の遊覧記に刺げき」（『真崎文庫目録』解説　一〇六頁）されたとある。

また真崎を真澄資料の発見者的存在とする説がある。真崎が「特に好んで読んだのは大冊から成る菅江真澄の遊覧記であった。流れるような文章にひきつけられながら、各地を旅する思いで読みふけった。明治になって遊覧記の価値をいろいろな面から唱えた最初は勇助であった（秋田県広報課編『秋田の先覚　近代秋田をつちかった人びと』三〇一頁）という。真澄の作品全体からみたとき、それはまさに「大冊」であるが、果たして彼がどのようにそれを認識していたのであろうか。また真澄の文章を「流れるような」文章と表現しているが、このことについては柳田の指摘と著しく異なる。

ともかくも真澄の作品に刺激を受けながら、真崎は終生、土器、石器の蒐集と研究に、そして古文書の蒐集と編集に努めていくことになる。たゆまぬ勉学によって、郷土研究者として第一級の人となる。明治二十年（一八八七）の最初の県史編さん計画、そして明治三十四年（一九〇一）の二回目の県史編さん計画と、二度とも編集委員になるが、知事の更迭などによって双方の計画とも実現を見なかったが、委員となったことは彼の学識の高さを如実に示しているといえる。

しかしながら真崎は行政人としては、顕著な成績をあげ得なかったようである。その後も秋田博覧会の御用係、明治天皇巡行の天覧物世話方、秋田書籍館や秋田師範学校秋田中学の舎長、書記などを務める。どちらからというと地味で目立たぬ役職が多かったが、学問に直結した場所や環境での勤務が多く、その分彼は自分の志をとげやすい位置にいたといえる。趣味の茶道にも力を入れ、秋田史談会の創設者の一人でもあった。

こういった官吏としての勤務のほかに、田地からの収入も多少あり、生活に困窮することはなかったという。したがってその分、研究や趣味に没頭できたとも考えられる。大正六年（一九一七）三月十八日、七十七歳で亡くなる。墓石は秋田市の誓願寺、「真崎季顕の墓」とあるという。「季顕（すえあき）」は勇助の名乗り。

ここでは「真崎文庫」の解説に依拠して真崎の人物像について記しているが、他にも真崎のプロフィールを示したものもいくつかあるがほぼこれと同様な内容となっており、こういった人物像がおそらく秋田での定説と思われる。真崎勇助は生前から自分の蒐集していた資料について考えるところがあった。自分の敷地内に倉庫をつくって資料の保存を考えていたが、そこまでの資力はなく、自分が

亡くなってからの資料の散逸を一番恐れていた。篤志家の協力を得て保存できないか、あるいは博物館などが設置されればそこに寄託しようとも考えていた（『真崎文庫目録』解説　一〇六頁）ともいう。心ある人がおり、秋田市内で保存利用できるように動いてくれた人もいたが、結局は実を結ばなかった。そういった思案をしながら彼は鬼籍に入った。

真崎が亡くなって七回忌の大正十二年（一九二三）になって、真崎の蒐集した土器、石器類など八千百点、書籍、書翰約三千点が大館町の栗盛家に引き継がれ、財団法人栗盛教育団で管理されることになった。この背景には、県の関係者や大館町の町長らの斡旋により話がまとまったといわれる。秋田から大館に地を移して、真崎の資料は守られて今日につながっていくことになる。

その後、前述したように昭和三年（一九二八）には、大和田楳之助らの編集によって「文献目録」がまとめられ資料利用の便が図られた。昭和二十六年（一九五一）には栗盛家から財団の敷地建物もふくめた全財産が大館市に寄付され、昭和二十八年（一九五三）に大館市立栗盛記念図書館として発足する。真崎の存命中から彼の資料は「真崎文庫」、あるいは「酔月堂文庫」（酔月は真崎の号）と呼ばれていた。栗盛家がそれを引き継ぐことによって、本来であれば「栗盛文庫」と称されても仕方のないところであったが、真崎の意志を尊重して栗盛家では、「真崎文庫」の名称をそのまま用いたという。

真崎勇助の墓碑（秋田市旭南・誓願寺）

何といってもこの真崎文庫の中には、秋田県の有形文化財に指定されている菅江真澄の著作が含まれていることが特徴的である。目録によれば、和本で五十三冊の所蔵となっており、内四十六冊が秋田県有形文化財となっている。その中には、真崎の自筆で明治二十二年（一八八九）に商人から求めたとか、真澄の自筆本若干冊を佐竹候に返上したという記録も残されている（『真崎文庫目録』解説　前出　一〇七頁）という。

今から二十年も前になろうか、真澄について世間の関心が今ほどに高くなかったころ、私ども研究グループが大館市立中央図書館を訪ね、真澄の作品を手にとって閲覧させていただいたことは記憶に今も鮮明である。柳田が関心を抱き続け問題にしていた真澄の絵画の存在が、何よりも鮮明で印象的であったのを思い出す。

ところで真崎についていろいろと考える中で、最後まで解けない謎として残ったことがひとつある。それは真崎がどこで真澄作品を入手したかである。「商人から求めた」という記述があるというが、果たして真澄の作品がそういった商業ルートにのっていたのであろうか。真崎は古文書の蒐集と編集に努めている中で、大曲の人進藤久治と知り合う。彼は漢詩人で、号を「有竹」といった。代々肝煎で豪農、特に明徳館の払い下げにかかる書籍を持った蔵書家で「有竹文庫」を所蔵していた。その蔵書をも活用しながら秋田書籍館が設置され、進藤は館長となる。真崎はこのとき書籍館の係員を命じられる。ここで真崎は希望する書籍に出会えるとともに、明徳館払い下げの資料などにも接し得る機会を持った。あるいはその中には、真澄の作品などもあった（『秋田の先覚1　近代秋田をつちかった人びと』前出　三〇六頁）であろうか。

真澄の作品をふくむ「真崎文庫」を今日まで保存し継承してきたのは、何といっても栗盛教育団の力によるところが大きい。真崎文

庫を引き取った経緯については前述したが、財団の内容を少し見ておこう。教育団の創設は明治四十三年（一九一〇）、拠出金は一万円（現在の三千五百万円～五千万円程度）で運営は財団法人、創設者は栗盛吉右衛門であった（渡部誠一郎著・発行『人を作り人につくす　大館栗盛教育団の軌跡』四三頁）。寄付行為による事業を見ると、育英事業を目的としており、義務教育を受けるのに困難な児童へ、主として衣服を支給することによって援助を行うこと、義務教育修了後、学資が困難なため上級学校へ進めない人への援助を行うことにあった。

さらに事業にあっても当初地元の子どもたちだけを対象としていたものを、北秋田郡全体へ拡大していったほか、大正十四年（一九二五）には、教育団として木造二階建て洋風の事務所をもつに至るなど順調な経営状況にあった。真崎文庫受け入れも、そういった事業拡大の時代的背景の中のことであったといえよう。

六

柳田は南部叢書の中に、真澄の作品が収録されていることについて、「白井秀雄と其著述」やその追記でもしばしばふれている。柳田は明徳館に所蔵されている真澄の作品には「著者生涯の愛撫の痕が遺っている」（『菅江真澄』前出　四三四頁）といい、何とかして津軽、南部の人びとにも真澄作品の覆刻刊行への思いを伝えたいと考えていた。そこで青森県の篤志家にも覆刻を勧めていくことになる。

真澄作品の覆刻刊行について、真澄遊覧記刊行会信濃の部委員の一人である胡桃沢勘内らは、「此間に東京に居る中道等氏等によって南部の『奥の手振』の覆刻は決定し、函館市立図書館の岡田健蔵氏によって『蝦夷の手振』、青森県史蹟名勝調査員の奥田順蔵氏によって『津軽のつと』と、次々刊行が計画されて居ることは、曾百数十年の昔に我が真澄翁の健脚によって繋がれた此地方が、此事業の上にも斯うした歩みを続けて行くことを思うて、ほゝ笑まれさへする」（『伊那の中路』活字本「巻の終に」）と記している。これは昭和四年（一九二九）の暮れ近くの動向であった。柳田はまた三河にも共鳴している人が少なからずいる（『菅江真澄』前出　四三九頁）ともしている。このように真澄作品の覆刻刊行の計画は、松本、秋田以外にも南部、津軽、そして函館と広がりをもっていった。柳田は松本以外のそれらの計画を「第二段」（『菅江真澄』前出　四三四頁）の計画と表現している。それら各地の動向を見てみよう。

まず南部であるが、南部では秋田同様に大別して二つの動向があったといえよう。ひとつは南部叢書にかかわる動向で、もうひとつは中道等にかかわる動きである。柳田は南部でのこの動きに関して、自ら考えた覆刻本と校訂本の刊行計画について、「たった一冊の『奥の手風俗』を出しただけで、共鳴者が乏しく損失が多く、一方には好意をもって仲介せられた平福氏が突然に世を去り、侯爵家家令の石井忠利氏が引退せられたために、事業は頓挫してしまったのである」（『菅江真澄』前出　四三四頁）とのべている。『奥の手振』の奥付には、発行元は真澄遊覧記刊行会、代表は柳田の名前となっている。秋田だけでなく、ここにも平福の名前が出てくるが、そのかかわりは不明である。

たった一冊の『奥の手振』が刊行されることになった経緯を柳田は「正月及び鳥」（『奥の手風俗』活字本の端に）でふれている。北海道からもどった真澄は寛政四年（一七九二）から約二年半を下北半島で過ごす。真澄三十九歳から四十二歳の春までで、その間に残されている日記は六種。柳田によればいずれも南部叢書におさめられている。柳田は没後百年を記念するために、特にその中の一巻を選んでほぼ原型に近い形で覆刻・普及しようとするが、何を選ぶかでは迷うものがあった。

その中で『奥の手振』を選んだ。その理由としては、比較的客観的記事が多く、ことに人びとの生活にふれていること、昭和三年（一九二八）四月に、日本青年館で南部地方の小正月に行われる豊作祈願の芸能であるえんぶりが中道等ら郷里の人びとによって演じられたが、真澄の作品の中にそれと同じ踊りの絵と記事があること、そこには他の作品には持ち合わせていない余裕が感じられること、単なる旅人の見聞以上のはるかに精確で用意のある記事となってい

ることなど（『菅江真澄』前出　五〇〇～一頁）からであった。

この『奥の手振』の刊行の際に、中心的に活動したのが中道等であった。中道については、かつて拙著『柳田国男の民俗学への底流』の中で『津軽旧事談』にふれながらのべたことがあった。そこに記した彼の略歴をもう一度見てみよう。

中道は明治二十九年（一八九六）、宮城県登米郡登米町に生まれる。のちに八戸に移り、県立八戸中学へ進む。二松学舎を経て、大正七年（一九一八）京都大学の内藤湖南のもとで東洋文献考証学を学ぶ。その後、青森県史編さん委員や青森県史蹟名勝天然記念物調査委員を務める。また南部叢書の編さんなどにも従事。昭和元年（一九二六）、中道は東京に出て出版業を営むが、のちに他人に譲渡。自らは鳥居龍蔵に師事し人類学や考古学を学ぶ。さらに神奈川県内で市史編さんなどにたずさわる。終戦後は青森県にもどり上北郡『講和記念甲地村史』や『十和田村史』の編さんに取り組む。そのかたわら県の文化財専門委員として文化財行政に取り組む。晩年は小川原湖博物館長として南部地方の民俗研究に務める。昭和四十三年（一九六八）七月二十三日、中道は野辺地で亡くなる。享年七十六。

中道は一貫して地域の歴史や民俗などにかかわる仕事をしており、柳田や渋沢敬三の知遇を得て『郷土研究』や『旅と伝説』などにも執筆するほか、『爐辺叢書』の中でも『津軽旧事談』を著わしている。彼の『奥の手振』の覆刻刊行もまた柳田とのかかわりの中で行われた事業であった。中道が柳田と真澄の作品を通じてどのようにかかわったかについては、拙著の「菅江真澄との対話」の中で記してあるのでここでは省略する。また中道は秋田叢書の編集にもかかわり指導したことは、秋田叢書の「凡例」にも記述されているとおりであり先にのべた。

さて、中道がかかわったとされる「南部叢書」であるが、本編は昭和二年（一九二七）六月から昭和四年（一九二九）十二月までの約二年半の間に全十冊が刊行されている。そのうち昭和二年（一九二七）九月に刊行された第六冊に真澄の作品が収録されている。収録作品は「けふのせばの布」「はしわの若葉」「岩手の山」「牧の冬枯」「奥のうらうら」「牧の朝露」「奥の手振」「奥の冬ごもり」「十曲湖」「おぶちの牧」の十作品である。この真澄の作品を収録した第六冊は太田孝太郎が校訂を担当した。

柳田の南部叢書に対する批判もあるので、少しく南部叢書の発刊の考え方にふれておきたい。まず叢書発刊の目的について、「凡例」は次のように記している。

「旧南部藩領内に於ける文献を編纂して刊行せんとする希望は、洵に数年以前から断えざる思念の一つであった。往昔から上梓された版本としては、僅に詩文の一少部分に限られ、史料としては『旧蹟遺聞』の一本に過ぎず、随て旧藩時代から現今に至るまで、都鄙の間に埋もれ、往古から伝承来つた儘、幾百年の久しい間、秘蔵せられる貴重な旧記・古文書等の珍籍秘書が決して尠くはない。即ち此の主として人目に觸れず、且は流布することの少ない文献を蒐め長く後昆に貽されんとして刊行したのが、実に此の南部叢書の主たる目的なのである。」（『南部叢書』第一冊　凡例）

叢書は全十冊から成り立っているが、刊行にあたっては四千余種の資料から厳選し、それらを便宜的に風土記類、史料、伝記類、地理紀行、詩文、学事、漂流記などに分類したこと、極力異本を蒐集し、その中から「善本に拠り」原作者の意図を尊重したこと、文字の用法等もすべて原本のとおりとするよう配慮したとされている。

南部叢書の代表者は太田孝太郎であった。「岩手県百科事典」によれば、太田の人物像は次のようである。

生まれは明治十四年（一八八一）、実業家で郷土史研究家、中国の古印、篆隷書の研究者である。明治三十九年（一九〇六）早稲田を卒業後、横浜正金銀行に入る。天津支店勤務の際に中国の古印に関心を持ち収集と研究を行うようになる。大正九年（一九二〇）に父小二郎のあとをつぎ盛岡銀行の支配人となる。以後、同行常務、盛岡倉庫社長、岩手日報社長などを務める。その一方で「南部叢書」の刊行に尽力する。昭和八年（一九三三）盛岡銀行の役員を退いたあとは学究生活に入り、『盛岡市史』十二巻、『漢魏六朝官印考』十二巻、『夢庵蔵印』など多数の作品を著す。

柳田は「南部叢書刊行の計画」（『民族』大正十五年一月）として、太田の叢書計画に大なる期待をして次のように記している。

「北隣の県では、学者が年少く且つ各郡に分住して居る故に、自然に真土の香の豊かなるものが出来るらしい。南部叢書の計画の中心は、盛岡銀行の太田孝太郎君であるが、同君は最も謙遜な態度を以て、此事業に対する伊能嘉矩翁、小笠原、小田島の二君の如き、県内各地の諸同志の助力の重要なることを説いて居る。現在提示せらるゝ書目を見ても、県外の学徒には珍らしい書が甚だ多いが、此計画の進行につれて、尚若干の無名の労作が、追々と世に顕れ来るべきことが予測せられる。例へは古い家々に保存せられる日記覚書の類など（後略）」（『定本』第三十巻　四五四頁）

柳田はいかに「南部叢書」に大きな期待をよせていたかがうかがわれる。「無名の労作」とか「古い家々に保存せられる日記覚書の類」などの記述は、明らかに真澄を意識した文章となっている。また柳田は「仙台叢書」との比較をのべる。「仙台叢書」の編さんを行っている者が城下に居住する古党で、旧藩の資料を中心に編集しており、ほかの者には格別興味をひかぬものまで珍重している、いわゆる文学趣味であるという。それに対して「南部叢書」はまさに南部全体に広がりをもち土の香のもつものを期待していた。そしてこういった「叢書」刊行の計画が米沢、最上、秋田、津軽の旧領に広がりをもっていってくれることを柳田は期待していた。

南部叢書の校訂者をみると、太田孝太郎のほかに中道等、小笠原謙吉、上関光三、新渡戸仙岳、金田一京助、及川與惣治の名前が記されている。太田、中道の人物像はすでにふれたが、小笠原謙吉はかつて拙著『柳田民俗学への底流』の中で見たことがあり、昔話の収集家としても大きな功績を残している。大正十五年（一九二六）に刊行された佐々木喜善の『紫波郡昔話』をめぐっては、原資料の提供者としての小笠原と、著者として作品をまとめた佐々木との間に確執が生じていく。この二人の間柄をもっとも懸念していたのは柳田であった。

新渡戸仙岳は教育会に身をおいて、盛岡に明治十五年（一八二二）に設立された私立書籍館ともいえる玉東舎の舎長の立場から図書館の設立・充実に努めていく（中村三喜夫『日本近代図書館史小考』私家版）。玉東舎の展開した図書館運動は、明治三十六年（一九〇三）に、盛岡市教育会図書館として新たな発足を見ることになる。

柳田の「南部叢書」の真澄翁の作品の収録に関しての評価は低い。「白井秀雄とその著述」の中で、「現在印刷に付してあるものは、旧南部領内にかかる日記の十篇だけが、南部叢書の巻六に採録せられたに止まり、それとても不完全な伝写本により、美しい挿画は全部省略せられているのである」（菅江真澄』前出　四二二頁）という。この南部叢書の収録に関しては、柳田はことのほか不満であったらしく、のちにさらに追記の中でも言及する。「以前南部叢書の中でも十種の紀行が刊行せられたことは、本文にのべた通りであるが、彼は旧南部領に属するものを主とし、その順序も飛び飛びになっているのみならず、底本は近年の筆写本で誤読が多く、校訂もまた必ずしも精密でない」（『菅江真澄』前出四三三頁）としている。

真澄の作品のとりわけ絵を大切にして、覆刻刊行しようという柳田の考えと南部叢書の編集の仕方は、基本的には相容れなかったものというよう。柳田自身「実際あまりにこの絵が見事であることは、今後の覆刻を妨げるばかりでなく、また精確なる写しを世に残すことを困難にしている」（『菅江真澄』前出　四二二頁）という。柳田はこの南部叢書に比較するかたちで、秋田叢書のできばえを評価していく。

こういった柳田の叢書編集の評価に対して、南部叢書刊行会では多少なりとも気にしたのであろうか、その後の編集にささやかな配慮が見られる。昭和四年（一九二九）八月に発行された叢書の第七冊では『北奥路程記』という作品をとりあげる。解題によれば、この作品は漆戸茂樹という人の筆になり、校訂者である太田が所蔵していた資料で、明治初期の盛岡以北、下北半島の突端までの絵図に解説を付した内容となっている。叢書では絵図も解説もそのまま印刷しており、印象的にはむしろ絵図が主流を占める。しかしながら全体的には、印刷のためかどうかはっきりしないが荒っぽい感じが

しており、作品の普及という面でも、また原著に近い形での印刷という面でも必ずしも成功しているとはいえない。南部叢書の中で、絵図を収録しているのはこの巻をのぞいて他には見当たらない。

柳田の厳しい評価は評価として、叢書の第六冊は柳田が秋田で真澄作品の発刊に向け啓発的な活動を行いはじめるのが昭和二年（一九二七）五月ごろであるのに対して、わずか四か月後の九月には南部叢書の真澄関係の集が刊行されているという事実を指摘しておきたい。南部叢書関係者の先見性とその努力こそがまさに啓発的であった。

七

『伊那の中路』の校訂本のあとがきによれば、青森県では青森県史蹟名勝調査員の奥田順蔵によって、「津軽のつと」の覆刻刊行が予定されていたとされている。この計画の中身を知りたくて四方手をつくしたが、結局わからずしまいであった。奥田順蔵の人物像については、「青森県大人名辞典」によれば、次のようである。

生年は不明。昭和二十八年（一九五三）に亡くなる。自治功労者、郷土史研究家であった。北津軽郡の書記から後に飯詰村の村長となり十年間その職務を務める。大正二年（一九一三）には、内潟村の村長となる。このころから郷土の研究に打ち込むようになり、十三史談会などを結成し、郷土史、考古学の普及に努めていく。文部省から青森県歴史調査員を委嘱される。また村長としても村民から敬愛され、村づくりにも身を呈して務め、内潟村の部落有財産の統一、納税完納という模範村の育成に成功する。昭和四年（一九二九）に村長を退職する。さらにその後、農会などにたずさわる。

著作には「青森県に於ける大陸文化の遺跡及遺物」「十三側面史」「涼風十三潟夜話」など多数がある。大陸との交渉史や十三潟（湖）への関心がつよく、この点で柳田の関心を誘ったものとも考えられる。

やはり『伊那の中路』の校訂本のあとがきによれば、函館では市立図書館の岡田健蔵によって『蝦夷の手振』の覆刻刊行が計画されていたという。しかしながら青森でも、函館でも計画は実現しなかったものと思われる。胡桃沢は計画どおり会員が集まらなかったのではないかと推測する（胡桃沢友男『柳田国男と信州』前出五一七頁）。予定としては、信州と同様に真澄作品の刊行会を組織して、覆刻本と校訂本の二冊を発刊しようとしたものであったろう。

函館で中心となって活動したとされる岡田健蔵については、坂本龍三よって詳細な伝記がまとめられているが、その中には菅江真澄との接点を見いだすことはできない。坂本の『岡田健蔵伝』は彼を図書館人として描こうとする意図があまりにも強く、岡田の全人格のどれだけ表現しているかはやや疑問が残るように感じられる。

岡田の人物像を「日本人名大辞典」からのぞいてみよう。岡田は明治から昭和にかけての社会事業家で函館市立図書館長。明治十六年（一八八三）八月生まれ、昭和十九年（一九四四）十二月に亡くなる。享年六十二。明治四十二年（一九〇九）に私立函館図書館を創設し、その後、市会議員となり図書館の拡充に力を注ぐ。昭和二年（一九二七）に市立図書館が開館すると私立図書館の全蔵書を移管し、自らは市立図書館の館長となる。辞典などによって若干の記述は異なるものの、おおむねこのような内容でほぼ同様である。

坂本の『岡田健蔵伝』によれば、彼が函館図書館で収集した北海道関係の資料は約二万五千点にのぼり、彼が生涯その収集に情熱をかたむけた結果であったという。弘文荘の反町茂雄の目録からも関係資料を購入しており、そのための費用の捻出に苦労していたようである。上京のおりの彼の言として「函館へ帰ったら、すぐに町の有力者の中を歩きまわって、寄付を頼まなくちゃ」（坂本龍三『岡田健蔵伝』講談社出版サービスセンター　平成十五　二六五頁）とのべていたという話が伝わっている。このように岡田の資料収集にあっては、ひとつには土地の有力者の寄付による経費の捻出を想定していたものと思われる。もうひとつの方法としては自分の家屋敷や土地をも売却していたようである。その結果として、大正七年（一九一八）の彼の年譜には「多年の収集に全資産を失ふ、為に一家八人の生活漸く窮す」とされている。

岡田が具体的に収集していた資料として『アイヌ画幅』や松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』などがある。坂本は昭和三年（一九二八）四月から九月までの半年間に、資料購入のため東京や関西の古書店への注文ややり取りを図書館の日誌から整理し一覧表としてまとめている。その中には真澄の作品名は見当たらない。しかし、真澄は北海道にあった時期に『えみしのさへき』『ひろめかり』『えぞのてぶり』『千島の磯』などの作品を残しており、岡田が北海道関係の資料収集にその生涯をかけていた執念とその状況からすると、当然に真澄作品もその蒐集の対象であったものと考えられる。

『蝦夷の手振』の覆刻刊行が計画されたとされるのは昭和五年（一九三〇）前後であるが、岡田のこのころの状況としては、自らの財産を処分してまで北海道関係の資料の収集に奔走していた結果として、貧窮の真っただ中にあり客観的に見ても、とても真澄作品を刊行できる余裕はなかった。したがって真澄作品の発刊計画をうちあげ、関係者に資金の募集を呼びかけたところで、おそらく岡田の病気がまたはじまった程度に受け止められたであろう。果たしてどれだけ周囲の人びとの協力が得られたかは大いに疑問である。

函館では大正十二年（一九二三）から昭和五年（一九三〇）までの間、八冊の「函館叢書」が刊行された。発行元は「紅茶倶楽部」で、図書館内に設けられた同好会、あるいは同人会的な組織であったろう。八冊のうち五冊までが、岡田健蔵の著纂であり、タイトルを見ると『小学校建築の不燃化に就いて』『函館駐箚独逸領事ハアバア氏遭難記』『ロシア文化と函館』『函館の史蹟と名勝』『ジョン・ミルン博士の生涯』である。叢書の二冊目の阿部覚治の『大函館論』を除くといずれも三二頁から六四頁という小冊子である。函館図書館内に発刊元があること、また叢書の多くが岡田の執筆になることから考えると、この叢書は岡田の大きな影響力のもとにあったといえよう。

叢書の一冊目に刊行された『小学校建築の不燃化に就いて』の巻頭では、岡田の名前で「尚本書発刊に就て私の　中固より余裕ありません。偏に函館教育会及同会長斎藤與一郎氏、同志武富平作氏並びに紅茶倶楽部同人の後援に負ふ所である事を諸君に告げ謝意を表する次第であります」（岡田健蔵　函館叢書一　『小学校建築の不燃化に就いて』）とのべていて、小さな冊子の刊行すらままならないことを告げている。岡田はあるいは真澄の作品をこの叢書の中の一冊として、覆刻刊行しようとしていたものであろうか。南部叢書、秋田叢書の例にならえば、まさにそういったことが考えられる。

柳田は真澄作品の刊行にあたって、覆刻本と活字による校訂本の二冊をつくることは、原本に忠実につくることと読みやすい本をつくることの二つの目的を一冊の本の中ではできないことから考えたものであった。しかし、それはひとつ間違えば、原本に忠実な本の発行は、趣味的、観賞的となる危険性をはらんでいた。

函館叢書の発行状況をみると、発行元といい、内容的にも岡田の思いつくままに発刊されており、そこには体系的な編集の意図というものがよくわからないという点では、多分に岡田の趣味的な事業であったように受け止められる。岡田は真澄作品が北海道関係の有力な資料であるという面から関心を示していたであろうが、経済的にも困窮している状況にあるにせよ、その刊行には根本的で大きな問題点があったといえよう。それは柳田があくまでも研究を意図して真澄作品の発刊を意図していたのに対して、岡田の計画はあくまで趣味的であったという、考え方の大きな相違は否定できないであろう。

八

柳田の真澄研究はその初期にあっては、『雪国の春』の旅の延長線上で展開されていたが、昭和に入るともっと情熱をこめて、また活発に真澄研究に取り組んでいった。秋田での昭和三年（一九二八）の墓前祭をはじめとして秋田図書館での百年祭、真澄翁の資料展示会など自ら参画するとともに、地元関係者へ真澄への取り組みを鼓舞していった。そのひとつの象徴として、今まで見てきたような各地における真澄作品の挿絵をもりこんだ覆刻本と校訂本のセットによる作品の刊行計画があったといえる。

信州の松本では柳田の計画に全面的とはいわないまでも、ほぼ見合う形で作品の刊行ができたが、他の地域では『奥の手振』を除いては、いずれも失敗に終わった。しかしながら秋田や南部では叢書という形をとって真澄作品の刊行が行われた。特に秋田叢書では、刊行の形態こそ柳田の意図のようにはいかなかったものの、柳田の意向を十分に取り入れて刊行が進んだ。もちろん秋田叢書の編さんのすべてに柳田が加わったということではなかったが、彼の果たした役割とその影響力は大きかった。

真澄研究を少しでも広めたいという、柳田の意図がひしひしと伝わってくる。特にセットでの真澄作品の刊行には、柳田の深い意図があった。作品を印刷刊行するだけでも膨大な経費がかかるのに、真澄本の原本に忠実に挿画をおりこんでの刊行となると、その経費がさらにふくれあがることは容易に想像された。真澄の作品の数が多いことはさらに問題を複雑化していった。とても個人的な、そして単発的な篤志家の気持ちだけでは解決できる次元の問題ではなかった。

そこで考えられたのが柳田を代表とする「菅江真澄遊覧記刊行会」という会の組織を立ちあげることであった。真澄資料にかかわりのある人、また関心をもって研究しようとしている人など、一人でも多くの人をまきこんで組織化することによって、作品刊行について少しでも経済的負担を軽減してもらうことであった。私には柳田の取り組みへの真意は、むしろ真澄研究における関係者の全国的な組織化に意図があったようにすら感じられる。柳田はよく指摘されているように、また拙著の『野の手帖』や『柳田民俗学への底流』でも見てきたように、地方の研究者の組織化ということをたえず意識し意図的に行ってきている。もちろん柳田自身がのべるように、真澄作品の忠実な発行と校訂本の発刊によって、地方の人びとに真澄作品の資料としての意義を示すという直接的な目的があったにせよ、間接的には研究者や関心を持つ者の組織化であったといえよう。

そして昭和十七年（一九四二）三月に『菅江真澄』を刊行する。これは柳田のそれまでの真澄研究のひとつの集大成であることはいうまでもない。柳田のその著作発刊から一年ほど遅れた昭和十八年（一九四三）六月に、秋田の郷土文化雑誌を標榜している『草園』（二十二号）が菅江真澄研究の特集号を組む。特集の内容は、柳田国男「菅江真澄のこと」、奈良環之助「秋田に於ける真澄翁の旅行とその著書に就いて」、中島耕一「宣長大人像と真澄翁」、武藤鉄城「菅江真澄翁と又鬼言葉」、武塙永之助「真澄の伝説抄」、小林新「真澄翁と二つの植物」、武塙三山「真澄の常冠りについて」、そして秋田叢書別集の編輯で校訂を担当した大山順造の「菅江真澄翁と深沢多市氏」の八編からなっている。

真澄翁の百年祭から十五年近く経とうとしているにもかかわらず、菅江真澄の研究は秋田で地道に進められていたことを物語っている。おそらくこの『草園』の特集号の発行は、柳田の『菅江真澄』の刊行に呼応する形で編集されたものではなかろうか。柳田が寄稿したことについて編集後記は「柳田国男先生から御寄稿いたゞけたのは忝ないことです。深く御礼申し上げます」とのべている。

さて柳田の「菅江真澄のこと」の内容であるが、昭和十七年（一九四二）の九月の段階における、今までの真澄研究の回顧と展望となっている。要点を見ると、①今まで柳田は真澄の資料について各地でかかわりのありそうな旧家に残された資料の発掘に努めてきた。また呼びかけを行ってきたが、その成果にはなかなか難しいものがあった。②秋田の文化のみならず、東北という視点から真澄資料の価値をのべた後、真澄の文章をもう少し読みやすくして、広く人びとに読んでもらえるようにした秋田叢書の仕事の意味は大きかった。③柳田は『菅江真澄』を刊行したが、真澄の旅立ちの動機もふくめて依然として不明の点が多く、まずは真澄の伝記作成に向けて今後とも同情の念を持って見守っていきたい。④今わかっている真澄の資料をたとえ断片的であってもそれらを整理排列しておいて、できるものなら印刷しておいてもらいたい。そうすることによって多くの人びとの目にふれ、まことに偶然のことかもしれないが、真澄についてもっとよく知ることができる機会にであうことができるかもしれない、という内容になっている。

今までの真澄研究の総括とでもいうべき内容で、『菅江真澄』発刊後の感想である。真澄研究の必要性と作品のセットでの刊行を呼びかけたことによって、一部の地域で成果は見られるものの、なお前途の険しいことを物語っている。

明治の末ごろにはじめて真澄の作品に気がついた柳田は、大正九年（一九二〇）のいわゆる「雪国の春」の旅を経て、昭和三年（一九二八）九月の真澄翁の百年祭へ、そして昭和十七年（一九四二）の『菅江真澄』の発刊へと、自らの研究を深めていくとともにその普及を強く意図してきた。一般の人びとへの真澄研究の啓発普及という点では百年祭の実施は大いに有効であった。

この墓前祭という方法は、このときが初めてではなく、明治三十一年（一八九八）には真澄の七十年忌追善会が、明治四十二年（一九〇九）九月十九日には秋田の古四王神社で「菅江真澄翁八十年祭」が行われている。このとき秋田県知事も出席したほか、真崎勇助が著した「菅江真澄翁履歴」や「菅江真澄翁著作目録」などの資料が刊行（『菅江真澄翁墓前祭記録』十五頁）されている。真澄の百年祭のあとも、昭和三十一年（一九五六）十月には百三十年祭が、昭和四十四年（一九六九）七月には百四十年忌（『菅江真澄翁墓前祭記録』二二頁）が、昭和五十三年（一九七八）九月には百五十年祭（『出羽路』六八・六九号　四七頁）が実施されている。

昭和五十四年（一九七九）には菅江真澄研究会が結成され、毎年七月十九日の命日に近い休日には、研究会の主催により秋田市寺内の真澄の墓の前で墓前祭が行われている。十年ごとには昭和六十三年（一九八八）七月には百六十年祭（『なぜ真澄は北を旅したか』四頁）、平成十年七月には百七十年祭（『菅江真澄研究』菅江真澄翁一七〇年祭記念号　五頁）が実施された。墓前祭だけでもこのようにほぼ十年ごとに実施されており、人びとの真澄への関心が継続されていることがうかがわれる。

「菅江真澄研究会」は全国的な組織として、会員に外国籍の人三人を含む三百人の大世帯に成長している。柳田が意図した真澄研究と普及の担い手の中心的存在として現在活動している。また秋田県内をはじめ一部青森県や北海道内では、真澄の歩いた道を検証してまちづくりに生かす試みも実施されている。

しかしながら真澄作品の分析などを通じての研究という視点では、今日でもまだまだのように感じられのは私一人ではあるまい。柳田が何よりも真澄の作品に関心を示したのは、それは真澄が書いたからではなく、真澄の作品の中に豊富な、そして貴重な利用可能な情報がたくさんふくまれているからに他ならなかった。中道等の『津軽旧事談』に関連して拙著の中でも言及したが、そこには東北のアイヌ民族にかかわる豊富な記述も見られる。最近田口昌樹が地元紙「さきがけ」によせた「菅江真澄と漂流民　二人の吉太郎の漂流譚」は真澄作品のある一面の魅力をくまなく知らせていて、研究資料としての可能性を示している。おそらく柳田もこういった内容に気がついたうえでの活動であったろう。

研究の現状から見ると、どうしても真澄の旅程の実踏と検証、あるいは伝記研究という側面のみにウェートがおかれがちの真澄研究であるが、全集の刊行もほぼ終盤にさしかかっており、そろそろ真澄作品の資料としての研究段階に至ならければならない時期にあるといえよう。

（当研究会会員・府中市）

松本三喜夫（まつもとみきお）

昭和二十五年（一九五〇）、新潟県生まれ。元東洋大学非常勤講師。現府中市教育委員会学校教育部長。日本民俗学会・菅江真澄研究会等会員。著作に『柳田国男と海の道』『柳田国男の民俗誌』『野の手帖』など。菅江真澄関係としては「菅江真澄と柳田国男―高志路の旅―」（『柳田国男と民俗の旅』所収）、「信州洗馬村真澄譚」（本会誌第二四号）、「生きた証としての旅」（本会誌第五五号）など。

菅江真澄と横手

冨樫泰時

一、はじめに

菅江真澄についての印象は、秋田県では秋田市を境にして北と南では違っており、それは、真澄が書き残した記録がそうさせているように思われる。

真澄が横手盆地に初めて足を運んだのは天明四年（一七八四）十月十日のことで、翌日の十一日には西馬音内（羽後町）に入り、十三日には市の風景、人々の言葉のやり取りを記録している。その雑踏の響きが耳に反響してくるように表現されている。秋田の方言―ひやこ、しがこ、筆こ―など「こ」をつけることなどを記し、この年湯沢市の草彅家で冬を越している（『鬱田濃刈寝』）。

翌年の天明五年正月から四月まで草彅家を本拠に湯沢、岩崎、横堀（小野）などを巡り、正月の風俗、七草、秋田万歳、お年玉、雛遊び、闘鶏、小野小町のことなど四月末までの記録を残している（『小野のふるさと』）。

この二編『鬱田濃刈寝』・『小野のふるさと』はいわゆる「真澄遊覧記」と呼ばれ親しまれている仲間に入るもので、横手盆地の「真澄遊覧記」には、ほかに『高松日記』・『駒形日記』が確認されているだけである。これ以外の大多数の記録は「地誌」と呼ばれる類のものである。したがって県南の人々の真澄の記録に対する接し方は、郷土史研究の史料―特に江戸時代後半の我が村の様子が記録されている―役立つといった態度が一般的であるように思われる。そこで真澄の地誌『雪の出羽路』『月の出羽路』の中の記録で自分の住んでいる村や町の部分を書き写すことが行われ、その写本がいくつか遺されているし（註1）、横手市の例のように町村合併するとその部分の真澄の地誌が『郷土史資料』に書き加えるといった作業が行われたりしている（註2）。

二、横手盆地の真澄の足跡

真澄の各種記録から横手盆地に足を運んだ足跡を真澄の記録と藤田秀司等の研究（「県南に於ける菅江真澄の足跡」『真澄研究』創刊号平成九年三月）等を参考にして見てみるとおよそ次のようになる。

・天明四年（一七八四）十月十日に由利郡から入り、十一日には西馬音内（羽後町）に入り、湯沢の柳田の草彅家で冬を越す。『鬱田濃刈寝』

・天明五年（一七八五）正月から四月末まで。『小野のふるさと』

・天明五年五月から、湯沢を出発し横手、大曲、長野（中仙）、角館を経由？このとき中仙町野田の草彅喜兵衛に宿す。『凡国異器』の鹿島の記事から。（註3）

・文化十一年（一八一四）五月から文化十二年（一八一五）三月、雄勝郡巡村調査『雪の出羽路雄勝郡』『勝地臨毫雄勝郡』を書く。九月五日、皆瀬村板戸（湯沢市皆瀬）から曽我吉右衛門の案内で山路分け入り、三津川、川原毛をへ着き、高橋甚太郎の案内で泥湯をへて八日に板戸へ帰着。九月十九日から東成瀬村檜山台から朴木台、足倉山麓を行き、こおろぎ沢、赤川を渡ったところまで記された草稿『駒形日記』。

・文政元年（一八一八）雄勝郡再訪、高松岳等の高山を踏査し薬草、薬石等の製薬等の原料採取。十一月、仙北郡に寄る。『かぜのおちば』第六巻の表裏紙裏内側に「野田村草彅氏」、中の裏に「野田村草彅常治文政壱歳寅ノ十一月」とある。（註4）

・文政二年（一八一九）仙北・平鹿郡を巡村、薬草等の採取、施薬、診療等（推測）。

・文政五年（一八二二）夏、高松付近を踏査『霧の高松』（不明）。

・文政七年（一八二四）秋、平鹿郡地誌作成開始。約二年を費やす『雪の出羽路平鹿郡』十四巻。

・文政九年（一八二六）五月から仙北郡の地誌作成に着手、巡村調査。
・文政十一年（一八二八）八月半、板見内村（大仙市横堀）出原三郎兵衛家に滞在。真澄の肖像画を描かす。
・文政十二年（一八二九）七月十九日、角館にて死去。『月の出羽路仙北郡』（未完）。

三、真澄の記録の出版活動

①

秋田県内陸南部すなわち横手盆地に真澄が足を運んだのは前記のように秋田県に初めて入った天明四年、五年で真澄が三十歳代前半の時期と、文化十一年以降の六十代以降の晩年に入ってからの両極に分かれている。真澄の記録の量は晩年のものがほとんどでいわゆる「地誌」が大部分を占める。その地誌の『雪の出羽路平鹿郡』横手ノ部が翻刻されたのが明治四十四年十一月二十日であった。多分、菅江真澄の著作が石版で印刷刊行された最初のものと思われる。その一冊が秋田県立図書館にある。研究史資料としても貴重と思われるので少し詳しく紹介しよう。

A四判和綴じで、表紙左上に「菅江真澄著雪の出羽路横手ノ部」と印刷された題名を貼ったものである。奥付には

明治四十四年十一月一日印刷
明治四十四年十一月廿日発行
愛知県渥美郡小国田村百三十二番地
著作者　故菅江真澄
秋田県平鹿郡横手町新町下丁拾六番地
発行者　三浦運吉
秋田県平鹿郡横手町古川町七番地
印刷者　小田嶋清
秋田県平鹿郡横手町大町上町卅七番地
印刷所　羽後新報社
非売品

とある。

細谷則理氏の緒言がある。それを転載しよう。

緒　言

菅江真澄ぬしの著されし、この雪の出羽路はしも、吾が秋田縣の歴史、地理を研究するには、こよなき書なりけり。されど、未、梓に上せざるものなれば、容易く得ること難し。稀には蔵せる人なきにはあらねど、皆、謄写本のみなれば、多くは、寫し取る際に、見誤り書き損こひ(ママ)て、寫しひがめたるを、更に寫し僻め、誤謬は陪、誤謬を重ね、脱漏は愈、脱漏を加へたるにて、心を安じて、研究の資となり得るもの、殆、無し。されば、大に之を遺憾とし、正確なる版本の出でて、便益を與へられんことを渇望する者、多かるめり。羽後新報は、今般先、その横手の部を印刷に附し、さる人どもの望を充さしめんとて、校訂を余に嘱せられぬ。これ、吾が力の勝ふる所にはあらざれどもその企を喜ばるゝ餘に、萬うち忘れて、之を諾しつ。浅識寡聞の己、到底、完全無缺の善本となすことは、能はざれども、引用の文、または古文書等は、原書原本に就きて考訂し、本文は、二三の本に照校しつれば、甚しき舛誤なぎは、自、確信せらるゝなり。さて、異説また愚考等は、鼈頭に記して、繙閲者の参考に供しぬ。文字、假名遣、及、文法の誤れるは、筆者のわざなるべし。目に觸れたる限正したれど、文書のいかにぞやおぼゆる、又は語尾記載法の一定せざるは、妄に筆を加へず。是、原文または、原書の體裁を、損せんことを恐れてなり。巻首の目次と、頭書の見出とは、有りても原文に害なくして、反りて讀者に便なれば、そは付け加へつ。かの圖書は、實物實景とは、いたく違へれば、有りても、さして益なしとて、出版所にて省かれたるものなれば、此は我が關り知る所にはあらざるなり。

明治四十四年天長節の朝

細　谷　則　理

識す

とある。

この細谷則理の緒言は、真澄の記録に対する根源的な考えを示し

ているように思われる。最後の文章には、図絵が附されなかったことが残念であった気持ちが「かの図書は（中略）此は我が関り知る所にはあらざるなり」という表現から読み取ることができる。

本文の上の欄外に注記があり、地名や人名、神社仏閣名が抽出され、それに加えて細谷自身の考えにもとづいて訂正、解説を施している。著作者・真澄の住所が書かれていることも注目される。

細谷はその後、昭和四年の『横手郷土史資料』第十五号に『雪の出羽路横手郷之部』を再録し詳細な校訂を加えている。（註2参照）

②

昭和三年四月七日の横手郷土史編纂会の委員小集会が細谷則理家に於いて開催されたとき、深澤多市が『秋田叢書』刊行計画を発表し（註5）、菅江真澄の資料を中心とした秋田叢書刊行が実行されるのである。菅江真澄関係の巻を挙ると次のようになる。

秋田叢書第三巻　昭和四年七月十日発行
　増補　雪の出羽路雄勝郡六巻　校訂者　大山順造
秋田叢書第五巻　昭和五年四月二十五日発行
　雪の出羽路平鹿郡（上）巻一～巻五
秋田叢書第六巻　昭和五年十月五日発行
　雪の出羽路平鹿郡（中）巻六～巻十
秋田叢書第七巻　昭和七年七月三十一日発行
　雪の出羽路平鹿郡（下）巻十一～巻十四
　雪の出羽路平鹿郡（追加一巻）校訂者　深澤多市
秋田叢書第八巻　昭和六年四月二十日発行
　月の出羽路仙北郡（一）一巻～四巻　校訂者　大山順造
秋田叢書第九巻　昭和六年十月三十一日発行
　月の出羽路仙北郡（二）五巻～十三巻
秋田叢書第十巻　昭和八年四月十五日発行
　月の出羽路仙北郡（三）十四巻～二十五巻
秋田叢書第十二巻　昭和十年八月二十日発行
　花のいでばぢ　別本花の出羽路

［秋田叢書別集］
　編集顧問　文学博士喜田貞吉　石井忠利
　編集及校訂　沼田平治　細谷則理　大山順造　深澤多市
菅江真澄集　第一集　昭和五年七月十日発行
　十曲湖　恩荷奴金風　恩荷能春風　小鹿の鈴風　牡鹿の嶋風
　牡鹿乃寒かぜ
菅江真澄集　第二集　昭和五年十二月二十五日発行
　けふのせばのゝ　錦木　辞夏岐野芥望図　阿仁廼澤水
　雪能飽田寝　秀酒企乃温濤　美香幣乃誉路臂　贄能辞賀楽美
　房住山物語
菅江真澄集　第三集　昭和六年七月三十一日発行
　雪乃道奥雪の出羽路　宇良乃笛多畿　霞むつきほし
　雄賀良能多奇　比遠能牟良君　簷廼金棣棠　雪のやま踰え
　花のしぬのめ　梅の花湯の記
菅江真澄集　第四集　昭和七年三月二十日発行
　齶田濃刈寝　小野のふるさと　高松日記　駒形日記
　比良加の美多可　月廼遠呂智泥　雪能袁呂智泥　勝手能雄弓
　花の真寒泉　『枝下紀行』　委寧能中路　わかこゝろ
　洲輪の海　いほの春秋　来目路乃橋　蝦夷廼手布利
菅江真澄集　第五集　昭和七年十一月三十日発行
　楚堵賀濱風　雪乃膽澤邊　かすむこまがた　はしはのわか葉
　委波氐乃夜麼　率土が濱つたひ（婢呂綿乃具）　蝦夷喧辞辨
　ゑみしのさへき　智誌磨濃膽岨　ちしまのいそ
　於久能宇良うら
菅江真澄集　第六集　昭和八年八月三十一日発行
　まきのあさつゆ　をふちのまき　淤隅濃冬隠　『津可呂の奥』
　『外濱竒勝』　雪乃母呂太竒　都介呂廼波末　追柯呂能通度
　作良かり赤葉かり　栖家の山

以上のように秋田叢書三、五、六、七、八、九、十、十二巻の八巻と菅江真澄集全六巻、合わせて十四巻が真澄の地誌、遊覧記の記録を翻刻したのである。当時、菅江真澄の資料の存在が一般に知られてい

なかった時期に、横手に於いて深澤多市を中心に、細谷則理、大山順造、沼田平治の四名によって編集出版されたのである。その期間は昭和四年から十年までの六年間の仕事である。

『秋田叢書』全十二巻

『秋田叢書別集　菅江真澄集』全六巻

③

深澤多市を中心とする菅江真澄の著作を翻刻した人たちとは別に、菅江真澄の「文章」を採用して絵葉書を出版した横手の大澤鮮進堂がある。絵葉書は二種あり、一つは「秋田県横手町ノ蛇崎橋（大澤鮮進堂発行）」、他の一つは「秋田県横手町蛇ノ崎橋畔の鐘楼より鳥海山を望む（大澤鮮進堂発行）とある。二種の絵葉書には、真澄の『雪の出羽路横手郷』の次の文章を引用している。

「菅江真澄著雪の出羽路に曰く朝倉川（横手川の一名）いづくはあれどわきてこの蛇の崎のあたりに、かはづ（河鹿）をきけばその聲鈴鳴きなんど、井手、芳野川にもをさをさ劣るものかは」

と蛇の崎を中心とした風景写真の上に、右の文章を掲載している。この絵葉書が何時発行されたか明らかではないが、戦前であることは確かで、推測するに昭和十年前後のものと思われる。菅江真澄の文章を絵葉書にして紹介した最初のものであろう。菅江真澄を普通の人々に知らしめた最初のものとして評価してよいものであろう。

蛇崎橋（絵葉書・大澤鮮進堂発行）

「蛇ノ崎橋の鐘楼より鳥海山を望む」（絵葉書・大澤鮮進堂発行）

四、おわりに

このような仕事が横手において行われ、出版にこぎつけた文化力はどこから生まれたのであろうか。その要因を考え続けているが未だ結論を得るまでに至っていない。

直接、間接的な要因があるのだろうと考えるのだが確かな自分で納得のいく結論はない。

しいてあげると、直接的な要因は深澤多市の長年蒐集した史料等が大正十一年七月八日夜の火災で「多年苦心して集めた記録や累代の古文書、貴重な書画や和漢の書籍五千余冊」が灰燼と化したのである。大山順造が指摘し（註6）、伊澤慶治も「この祝融により、記録の整備、保存の必要を痛感したにほかならない。」（註7）と書いたとおり、私もこの大山、伊澤の説に賛同するものである。どんな形でもよいから、とにかく史料を印刷物として残すことを強烈に意識した事であろう。

秋田叢書別集『菅江真澄集第一』の巻頭言に「総じて古文献の少ない地方丈に、それ丈翁の此旅日記によりて、郷土研究上の乃至地誌的な考古学的な貴重な資料を供せられる事は莫大である。特にわが秋田県はその最たるものである。のみならず秋田は翁の終焉の地であるから、我々は翁に対して、他国の人、さすらひの旅人としてのみ考へる事の出来ない深大な敬慕と親しみとを禁じえないのである。（中略）もともと我が秋田叢書刊行会は、先ず以て翁の著録を刊行せんとする希望を有したのみならず、その事が本会の重要目的の一つであったのである」と書き、秋田叢書刊行会会報の第六集に「月花の出羽路だけは藩名によりて調査したものであるとの見地から、之を引離して本集に編収し、其他の著録は此の別集によりて刊行を進めたいと思ふ」といっている。

深澤多市はこれらの叢書とは別に雑誌『秋田史壇』第壱輯（七十一頁）を昭和八年四月に発行し、第二輯（七十一頁）を十一月に発行している。このように出版活動に意欲的にとりくんでいるのは、やはり火災で貴重な資料が灰燼に帰したことが、このような行動にはしらせたものと推測されるのである。

加えて細谷則理、大山順造、沼田平治等の強力な協賛者がいて、この人たちはただの応援者ではなく、具体的な仕事を進める人たちであったことが大きいと思われるのである。大山を除いて、深澤は旧千畑町、細谷は旧平鹿町、沼田は旧雄物川町の出身で横手町に移り住んだ人たちであることも注目される。この協賛者の人たちが持っていた文化的資質が高かったことは勿論のことだが、それにプラスして横手にはこのような人たちを文化的な活動に駆り立てる雰囲気のようなものがあったとも考えられるのである。

真澄が表現した横手川の河鹿の鳴き声や蛇崎橋のあたりの風景は、横手市民の多くがなじみ親しんだ風景である。

作家石坂洋次郎の「横手町の思ひ出」の冒頭に「横手町といふと一番先に思ひ出されるのは旭川（横手川）である。形の上から観ると、あの川があって横手の町が生きて来るのだと云ってもよい。市街を貫流してゐる川としては水も綺麗だし、沿岸の風景もなかなかすぐれている。櫻が咲く頃の女子小学校前の川岸の景色や、月が明るい夜、上の橋から眺めた上流の景色など、今も私の脳裏にその美しい風趣がありありと浮かんでくる。そのほか河鹿が鳴く、船流しがある。花火がある。観音寺の鐘撞堂は赤い、などと思ひ出してくると、あの川こそ横手の町に住む人々の心のふるさとなのではないかしらんといふ気がする。」（註8）

と書いた景観は、横手市民は勿論、真澄も石坂洋次郎もそして横手市を訪れた多くの人々を魅了し、今も魅了し続けている。その町、横手市が真澄研究と、その普及の魁をなしていたことを再確認したいのである。

註1、戎谷南山写本『雪の出羽路』十四巻、（大正年間に写す）
栗林治郎作写本『月の出羽路』二十五巻（大正十一年～昭和二年に写す）
真澄の「遊覧記」・「地誌」等の写本については『真澄』NO18（菅江真澄資料センター平成十七年三月）の「写本の

系譜」に詳しい。

註2、雪の出羽路横手郷之部『横手郷土史史料十五』細谷則理
昭和四年七月
雪の出羽路平鹿郡十二抄出『横手郷土史資料二十三』
昭和十九年三月
雪の出羽路（旭地区、栄地区）『横手郷土史資料二十四』
昭和二十七年三月
雪の出羽路（黒川地区）『横手郷土史資料二十八』佐川良視
昭和三十一年一月
雪の出羽路（境町地区）『横手郷土史資料二十八』佐川良視
昭和三十一年一月
雪の出羽路（大沢地区）『横手郷土史資料三十三』佐川良視
昭和三十五年十一月

註3、藤田秀司「県南に於ける菅江真澄の足跡」『真澄研究』
創刊号　平成九年三月

註4、註3に同

註5、『横手郷土史資料』第十三号昭和三年五月

註6、大山順造「菅江真澄と深澤多市氏」『草園』第二十二号
昭和十八年六月

註7、伊沢慶治「深澤多市」『秋田人物風土記（続）』
昭和四十八年四月

註8、石坂洋次郎「横手町の思ひ出」『横手町勢要覧』
昭和十四年版

本稿を書くにあたって横手市史編纂室の黒澤純一室長、同伊藤武士氏はじめ室員から協力いただいたことを記し感謝の意を表したい。

（当研究会会員・秋田市）

『宮本常一写真・日記集成』を読む

―内田武志の出版活動との関連―

田口昌樹

昨年三月、毎日新聞社から標題の著書が発刊された。高橋勝視氏の編集によるもので、上・下・別と三巻にわたる大作で民俗学者宮本常一（昭和五十六年没）の日記・写真をまとめたものである。日記は昭和二十年から昭和五十六年までの部分が簡潔な文章で綴られていた。

この文章を読んで、内田武志の著作刊行に宮本常一が深くかかわっていたことが、改めて認識された。内田武志の菅江真澄関連著作の刊行は三段階にわける事ができる。

①『菅江真澄未刊文献集』二巻
昭和二十八年（一九五三）～二十九年（一九五四）
編・著者　内田武志
序文　澁澤敬三
発行所　日本常民文化研究所

②『菅江真澄遊覧記』五冊
昭和四十年（一九六五）～昭和四十三年（一九六八）
訳者　内田武志・宮本常一
発行所　平凡社（東洋文庫）

『菅江真澄随筆集』一冊
昭和四十四年（一九六九）
編者　内田武志
発行所　平凡社（東洋文庫）

③『菅江真澄全集』十二巻・別巻一巻

昭和四十六年（一九七一）～昭和五十六年（一九八一）
編・著者　内田武志・宮本常一
発行所　未来社
※「別巻」二（索引・年譜）はいまだ未発行である。

このように、内田武志の出版活動を三段階に分けることができる。宮本常一の内田武志訪問はこの出版開始と深くかかわっていることを知ったわけである。

以下、順をおって紹介しよう。

一、昭和二十年代初期

昭和二十二年三月二十六日（水）
角館→雲沢村→雲然→角館→大曲→秋田→田中町
…夕やみの中を田中町へ行き内田武志氏をとう。松葉亭というのはおおきな家である。そこに居るのである。今度は部屋もひろくおちついて居る。真澄の事について色々きく。そして高階定房、鳥屋長秋らとの交友関係、とくに定房と本居大平、伴信友の交友など明らかになって来たのはうれしい。信友の手紙の中には平田篤胤の悪口も出て来る。

三月二十七日（木）
田中町→辻兵吉氏宅→日銀→内田ハチ氏宅→辻氏宅
くもり。朝おきて見ると雀がないている。雪も多少ちらついていたが雨になる。辻兵吉氏の家の『真澄遊覧記』を見に行ってくれというので、ハチさんと二人して辻氏の家へ行き、事情をはなして見せてもらう事にしたが、全部は見せてくれない。必要な分だけをという。仕方がない。昼まで見て、午后は兵吉氏留守なので、夜また見せてもらうことにしてかえりに日銀へ寄り、吉岡支店長とはなし、昼飯を御馳走になる。三時ごろまではなして内田君のところへかえり、『遊覧記』のことについてはなす。色々とあたらしい発見があるようでうれしい。夜はハチさん、友子さんの三人で行ってしらべる。十時近くまでいてかえる。

三月二十八日（金）
秋田→追分→船越
朝一番の汽車にのって追分まで行く。ハチさんも一緒。※奈良さんの家をたずねていく。丁度居られた。奈良さんは十時の汽車に乗って秋田へ行くとの事で、私はのこって『公私用日記』寛政六年及び八年のものを写す。教えられる所が多い。内田さんも奈良さんと一緒に秋田へかえった。
二時近くまでいて、それから※吉田さんの家に行く。吉田さんは丁度家にいた。奥さんも海岸の方からかえって来る。併し今夜は船越ではなしをしなければならないので、五時の汽車でたゝねばならぬ。一時間半ほど居て追分へ出、そこから船越まで汽車にのる。駅におりると大野権治郎氏が迎えに来ていてくれる。夕飯をすましして農業会へ行く。集まるもの三十名あまりだが青年が多い。農村文化と農政についてはなす。九時から十一時までになる。終って※大野氏の家に行き、更に宿へかえると十二時すぎである。

※奈良（環之助）～民俗学者、秋田県文化財保護協会会長などを務めた。内田武志の支援者の一人。真澄の百四十年祭の主催者。『菅江真澄遊覧記』や『菅江真澄全集』の刊行を支援したが、『菅江真澄全集』第一巻が発行された直前の昭和四十五年に死去した。

※内田ハチ・知子～故内田武志の実妹、故ハチは秋田大学教育学部助教授で退官。武志の真澄研究を支援した。元当研究会顧問。

※吉田（三郎）～男鹿市脇本の出身、昭和十年、『男鹿寒風山麓農民手記』（アチックミュウゼアム刊）を柳田国男・澁澤敬三のすすめで刊行した。三十四歳の昭和十二年に上京し、澁澤敬三の民俗学博物館管理人などを務めた。終戦後、潟上市追分西に開拓農民として移住し、文筆活動を行った。真澄研究会発足以前にも行われていた真澄墓参には毎年追分から自転車で参加

していた。昭和五十四年没。
※大野（権治郎　号・為田）故人、元当研究会会員。男鹿市船越に真澄を含む文人七人の男鹿来訪者の合同歌碑建立に力があった。

十二月二十二日（月）
新津→鶴岡→酒田→秋田
雪。朝七時十五分の酒田行きにのる。汽車は混んでいる。雪はしきりに降る。足がひえる。一面の雪の原で窓外の風景もゆっくり見ることもしない。村上から北は昼間通るのははじめてである。暗い海の向うに雲をかづいて低い粟生島（粟島）を見る。そこへ渡って見たい気もする。併し冬はどうすることも出来ない。この島は日本海に於ける能登、佐渡、粟生、飛島、男鹿と一連をなしているものの一つである。鶴岡へ出るまでの間の海岸は山がせまっていて、海岸の家はその山の木を利用し、塩をたいているものが多い。鶴岡でやっとすわる事が出来る。酒田へついてこの列車がそのまゝ秋田へ行く事になり、ホッとする。『日本小説代表作全集』をよみ終る。しっとりと心にしむ作品が多いのはうれしい。『お園抄』『永夜』などが特に心にのこる。秋田について内田武志君をとう。師範学校は駅に近い。そこの寮の一室に居る。行ってから色々と学会の様子などをはなす。

昭和二十三年八月十八日（水）
大曲→羽後四ッ屋→角館→秋田
はれ。今日はここをたって秋田へ出なければならぬ。四ッ屋の駅まで自転車で行く。柳田君は下桧木内まで行くという。角館に下車して武藤さんをたづねる。行ってみると一人ポツンとしている。しばらくはなして出かける。富木氏の所へも寄る。荒川書店へも寄って見たが買いたい本も少い。角館から秋田へ…。そして内田君をとい、菅江真澄についてはなしあう。

八月十九日（木）
秋田→大館→追分はれ。朝四時すぎにおきる。下痢す。今日は大館に行く。ハチさんと一緒。汽車はすいている。車中ねむる。米代川の流域は近頃あたらしくひらけはじめた所のような気がする。古い家は少なくて板ぶきの新しい家が多い。〔乙〕大館について栗盛氏をとう。駅から三十分もかゝる。そこで真澄の本を借り出すように交渉する。中々容易でない。色々にはなして見て、かなり心は動いたやうであるが遂にきまらない。〔乙〕栗盛氏の弟吉蔵氏は奈良に居たと、はなしあうて見ると息子さんは郡中へ来ていたとの事である。奇縁ともいうべきもの。先日逢った川田博士の叔父が日良居村に居たり、高比良さんの父君の友人であったり、今度の旅は意外なことが多い。教育団の方へ行って真澄の本を見せてもらい、四時まで居て辞す。〔乙〕四時四十分の汽車は二十分もおくれて来る。そしてはなはだ混んでいる。リンゴの買出し客が多くのっている。追分で下車して吉田三郎氏をとう。昨年の冬作ったのだというよい家に住んでいる。この地に入って以来、大して収穫もあげているとは思わないが、何時かこうした立派な家に住むようになって来た。指導者としての役得の少くなかったことを思わせる。但し私は家一戸すらたてる余力ももっていないが…。

※『菅江真澄未刊文献集』一が刊行されたのは昭和二十八年十二月である。これに収容された著作のほとんどは、大館市の栗盛教育財団（代表栗盛順吉）が所有していたものである。これの書写と出版を応諾していただく事が最大のポイントであった。宮本常一の日記からも、宮本が栗盛順吉氏を訪ね、依頼活動をしていたことがわかる。
ただ、『菅江真澄未刊文献集』一の「あとがき」で、内田武志は「昭和二十二年の夏に許可された」と記している。内田武志の記憶違いであろう。この著作の刊行には宮本常一の協力・支援があったことが分かる。

二、昭和三十年代

昭和三十年十一月六日（日）秋田
雨。秋田着、九。傘をかい、名刺をたのみ、天王に吉田氏をとい、秋田にかえり内田君をとう。水戸屋にとまる。

昭和三十九年四月十六日（木）
弘前→鰺ヶ沢→東能代→追分→御所野湯本
おきてみるとくもっている。寒い。五能線にのる。リンゴ畑の中をゆき、アジガサワに下車。町をあるく。岩木山雪に白し。アジガサワより西はまったくまずしげなところ。もう一度来てみたいと思う。東能代で奥羽線にのり追分下車。吉田三郎をとう。それより湯本にいってとまる。よい宿。

四月十七日（金）
湯本→秋田、古四王神社
雨になる。寒風山をこえたけれどキリのため視界きがず。自衛隊まえで下車して古四王神社にまいり、真澄の墓にまいる。昼、内田君をとう。福岡※さんきている。『遊覧記』について話す。そして今夜はとめてもらうことにする。一日中雨。内田君元気づく。

※福岡（多恵）平凡社編集部員
※この日の記録にある『遊覧記』は現在重要文化財である「自筆本菅江真澄遊覧記」ではなく、平凡社が発行しようとしている『菅江真澄遊覧記』全五冊を指していると思われる。
昭和三十九年四月十七日の記録に平凡社の福岡多恵氏が内田家にあり、内田、宮本、平凡社の三者会談がなされ、『菅江真澄遊覧記』刊行の見通しがついたのでなかろうか。「内田君元気づく」が喜びを語っている。昭和四十年十一月、訳者、内田武志・宮本常一による現代語訳『菅江真澄遊覧記』一が刊行された。なお、内田武志の支援者の一人であり、日本常民文化研究所の主宰者・澁澤敬三は昭和三十八年に死去している。

三、昭和四十年代

昭和四十三年十二月十九日
ＮＨＫ渋谷→上野→（夜行→秋田）
ＮＨＫ１―３千葉、シブヤ、40分。臼井吉見。日本人の活動の舞台がひろくなる。伝統的なものを見なおす。「／」11時半家を出てＮＨＫへゆき臼井氏と対談録音。
それより上野にゆき、二十二時二十二分の急行にのる。真澄全集刊行打合せのため。西※谷、小箕氏と一緒。

※西谷能雄氏は当時の未来社社長、小箕氏は編集担当者。

十二月二十日（金）
湯沢→秋田。内田武志宅、秋田銀行、魁新報社
はれ。湯沢付近で目ざむ。九時五十分秋田着。内田君のところへゆき秋田銀行に前※田頭取をとい、真澄全集の協力をたのむ。内田君のところへかえって打合せ。四時辻※兵吉氏をとい『遊覧記』をみせてもらうことをたのむ。サキガケへいって井※上氏にも全集のこと依頼。

※内田武志は昭和二十年五月、東京から秋田に疎開したが、内田武志の有力な支援者であった時の大蔵大臣澁澤敬三は、秋田県の有力銀行である秋田銀行の頭取辻兵吉氏（二代）にその保護・支援を求めたといわれる。実際の担当者に任命されたのが前田實であった。前田はのちに頭取に就任した。
※辻兵吉氏は二代辻兵吉氏の孫、秋田銀行前取締役、秋田商工会議所前会頭などを務め、現在、秋田観光コンベンション協会理事長などの要職にある。重要文化財「自筆本菅江真澄遊覧記」の所有者。菅江真澄研究会顧問。
※井上隆明氏は前秋田経済法科大学学長、宮本が訪問した時は秋

田魁新報社文化部長の職にあった。菅江真澄研究会顧問。

十二月二十一日（土）

秋田→雫石

くもり。朝、内田君のところへいって真澄全集打合せ。ついで県庁にゆき秘書課、社会教育課をまわり、さらに図書館にいって全集協力をたのみ、内田君の家にいって最後の打合せをする。奈良氏県庁より同行。駅に出て六時五十分の汽車にのる。雫石に下車。佐々木旅館にとまる。「メモ欄「雪ト文化、鈴木、ＮＨＫ、八八〇字著者のことば。橋のハナシ十二枚。写真五枚」」

真澄研究にとって最大の贈物である『菅江真澄全集』十二巻・別巻一はこのようにして刊行の運びとなったのである。

民俗学の権威者であった宮本常一は全国行脚の生活を四十数年間にわたって続けてきたわけであるが、その超多忙な中にあって、病床にあった内田武志を支援し、三回の出版事業を完成させたのである。内田武志の最後の仕事である『菅江真澄全集』が完成したのは昭和五十六年であった。同じ年、宮本常一は七十四歳の生涯を終えた。

現在、われわれは菅江真澄の著作を簡単に読むことが出来、真澄の旅の足跡を自由に訪ねることが出来る。江戸時代後期、厳しい自然の中にあって懸命に生きた雪国の常人の喜びや悲しみを知ることが出来る。粟や稗を常食とした人々、狩猟や漁労で生きた人の存在をも知ることができる。内田武志や宮本常一の存在を考えるとき、この両者の出現と出会いがなければ、現在われわれがなにげなく享受している「菅江真澄の業績」はなかったかも知れないし、少なくとも数十年は遅れたと思う。

（当研究会副会長・秋田市）

参考文献

『秋田銀行百年史』　秋田銀行
『秋田人名大事典』　秋田魁新報社
『菅江真澄顕彰記念誌』　岡崎市立図書館
『菅江真澄翁墓前祭記録』昭和四十四年　内田武志他
『菅江真澄未刊文献集』　日本常民文化研究所
『菅江真澄遊覧記』一～五　平凡社
『菅江真澄全集』十二巻・別巻一　未来社
『宮本常一写真・日記集成』　毎日新聞社

宮本常一撮影の昭和三十九年四月の「菅江真澄の墓」風景
『宮本常一写真・日記集成』（毎日新聞社）より

秋田の円空仏探訪記

金沢大士

土地柄にも相性がある。私は長らく京都に住んでいるが、生まれは広島県である。今や私にとって秋田は東北地方でも遠くて近い県になっている。それは人柄と同様にまた理屈抜き。そもそものキッカケは平成九年（一九九七）七月十八日、秋田県立博物館を見学した時、田口昌樹氏（現・菅江真澄研究会副会長）とたまたま出会ったことである。それ以来、毎年菅江真澄の足跡を辿って今日に至っている。その頃、すでに『菅江真澄遊覧記』（東洋文庫、平凡社）を読んでいた。これを実際に追体験してみたい気になったのは田口氏と出会ってからである。それが最初の経緯である。

一、十一面観世音菩薩（赤神神社五社堂）

さて、秋田県には円空仏（約五〇〇〇体）が九体あるということだが、秋田県の円空仏に最初に出くわしたのは『男鹿の秋風』（文化元年[一八〇四]）を辿っている時であった。平成十一年（一九九九）二月十六日のことである。前日、門前（男鹿市）に着いた時、町中を歩いている頬被り長靴姿のおばさんに声を掛け、赤神神社五社堂の参拝ができるかと訊くと、今は工事中だからダメだという。その近くまで行くと、ショベルカーによって行く手を遮られた。誰が動かしているのかと運転席をみれば、顔の厳ついオヤジではなく、うら若き女性ではないか。これにはビックリ。そのちぐはぐさが変に面白いと思った。男鹿の女性は働き者なのである。仕方なく門前を離れ、荒涼とした感じの山腹の道を進む。左側の眼下は断崖絶壁である。何となく『ゼロの焦点』（松本清張作）の気配がした。実に素晴らしい夕映えである。そのうち戸賀湾に出た。江戸時代、北前船で賑わった港町ということだが、今はその面影がない。当地は全く不案内なので、道路標識を頼りに夜道を進み、やっと「白龍閣」に着いた。

翌朝早く宿を発ち、入道崎を巡って、再び戸賀湾に出た時、公電話から電話帳を捲って男鹿市教育委員会に電話を掛けた。事情を説明すると、その件なら生涯学習課だと言って取り次いでくれた。ぶしっつけで先方には失礼と思いつつ五社堂の円空仏拝観を申し出ると、二十分後にまた電話してくれという。どうやら脈がありそうだ。その間、その辺をぶらつく。民宿が数軒ある。夏場、海水客や釣人が利用するのであろう。再び電話すると、OKとの嬉しい返事。その生涯学習課の職員が言うには、五社堂のカギは二つあって、その一つは工事事務所に預けてあると言う。そして、その旨を現場監督者に伝えたからと言う。急いで車を飛ばした。長楽寺の境内にその事務所があって、まず本多巌氏（文化財建造物保存技術協会の技術員）と挨拶を交わし、彼の後について長い石段を上る。石段は凍結しており、足下に気をつけて上がる。彼いわく三年がかりの工事だと。途中、作業員とも挨拶を交わす。そのうち「姿見の井」の掲示板が目に付いた。そこから五社堂はすぐ近い。向かって左から第四番目のお堂が開けられた。すると、その堂内にサッと光が差し込むや否や、等身大の十一面観音立像がわが目に飛び込んできた。一瞬、その尊像の美しさに感極まった。木肌が白く木目も奇麗だ。彼いわ

十一面観世音菩薩立像
（赤神神社五社堂）

く、それは他所で包帯のように布にまかれて大事に保管されていたものだと。

十一面観世音菩薩立像（赤神神社五社堂）天井の低い狭苦しい空間の後壁に背中斜めに立て掛けられている。このお姿がまた実に様になっている。しばし御前に拝跪。その際、己の生命の底の底へと透徹する一瞬の契機があったとしても不思議では無かった。自己凝視がその何とも言えぬ微笑に摂取されるように思われた。この円空仏は荒削り（鉈彫り）だが、そこに〝無相の美〟（崇高な美）が開示されているのである。その材質は分からなかったが木の持ち味をよく生かしている。霊木化現と言うべきか。下山する時、鳥居付近に苔むして古びた石碑が幾つもあった。修験道との関わりがあるのではないかと思いつつ、下方を見やれば、暗碧の日本海が穏やかに見渡された、冬場荒れるというのに。参道の石段を下りきったところで、本多巌氏の親切に謝意を述べ、赤神神社五社堂を後にしたのである。

二、阿弥陀如来座像（北秋田市鷹巣・大太鼓の館）

平成十二年（二〇〇〇）二月下旬『おがらの滝』（文化四年［一八〇七］）を辿る。その途次、同月二〇日、「糠沢」に立ち寄る。さて人伝に鷹巣町（現・北秋田市）にも円空仏があると聞いていたので行ってみることにした。当地は全く不案内な土地柄なので、何が何処にあるのかサッパリ分からない。ひとまず「たかのす風土館」を訪ねた、円空仏に関する情報が入手できるかと思って。しかし手掛かり無し。いったん鷹巣駅へと向かった。国道は除雪されているものの、ちょっと横道に逸れると、車の轍がない。辺り一面雪景色である。その駅前に古ぼけた観光案内板があった。見ると、円空仏が表示されているではないか。その場所が「糠沢」としてある。大館よりの一駅の近さである。とはいえ雪道ではなかなか思うように歩けない。登山靴なので、膝までズボッと雪に埋もれた。一つの村社に近付こうとするが、鳥居より先に進めない。その近くの農家に入り、円空仏について訊いてみた。すると、主人が確かに円空仏について聞いたことはあるが、今どこにあるものやら知らないと言ってあちこちに電話を掛けてくれる。あいにく日曜日なので、どこも通じないと言う。主人が言うには、ここの無住寺に木造の阿弥陀如来が安置されていたが、それが大事な円空仏と分かって、管理上の問題からどこかへ移されたとは聞いているが、その移管先は分からないと。ひょっとして「大太鼓の館」（国道七号線沿い）に保管されているかも知れないので、当館で訊いてみるようにとの親切なアドバイス。これに一縷の望みを託す。その場所はすぐ分かった。道の駅「たかのす」の一角にある。なぜ大太鼓かと言えば、それは綴子の大太鼓のことである。その大太鼓を叩くお祭りが綴子神社の伝統行事として数百年前から今日に至るまで続いていると言う。まず受付で円空仏のことを訊いてみた。すると、当館に保管展示してあるとのこと。アキラメかけていたが、思いが叶った。早速入館。第一室では大太鼓の館と命名しているだけのことはあって、巨大な太鼓四基が所狭しと展示してあり、室内全体に耳を劈くような太鼓の音がドンドン、ガンガン鳴り響いている。しばらく呆気に取られて見物する。壁面にはお祭りの様子がパネルで展示している。元はと言えば、それは雨乞いの神事であったらしい。それなりの臨場感があった。もう一つ奥に資料室があり、その片隅に円空作「阿弥陀如来座像」が安置されてあった。陳列ガラスケースの内だか、明るい

阿弥陀如来座像
（大太鼓の館）

照明のもと、その威容がはっきりと見て取れる。これを造像した時円空の真摯な気持ちが伝わってくるようだ。その円空仏の解説から、恐らく、円空が留錫（りゅうしゃく）した当時（寛文六年後九年前）、その辺一帯（米代川流域）は未開墾地が広く残っており、入植した人々も貧しく苦しい生活を強いられていたことであろう。そういう農民の苦しみを親身になって聞き届け、彼らのために出来るだけの事をしてあげたいという気持ち（慈悲）から、彼らの求めに応じて、—衆生済度の願を込めて—作仏したことであろう。その時、私はしばらくの間、その仏様と対座していた。柔和なかんばせが、拝観する者に無畏を施す一絶対的な安らぎを与える—無限の包容力を秘めているように感じられた。

三、十一面観音立像（湯沢市雄勝町・愛宕神社）

平成十二年七月八日第十三回全国菅江真澄研究集会（於「仙北ふれあい文化センター」）に参加した翌日（九日）愛宕神社（雄勝町上院内—現湯沢市）に参拝することにした。今回も飛び込みだから、果たして円空仏が拝観できるものやら。「たざわこ芸術村」から角館へ出て、樺細工を買い求め、それから羽州街道を通る。秋田県で唯一の国宝「線刻千手等鏡像」のある水神社（中仙町—現大仙市）に詣でた。その国宝を見たいと思ったが、社殿は締め切ったままだ。全く取り付く島がない。老杉の木立ちがこんもりとした鎮守の森をなしている。仕方なく境内をうろつく。すると菅江真澄の歌碑に目が止まった。〝いつ万代も筆の命毛長らへてかき流さばや水くきの安斗〟と印されてある。それは文政十二年（一八二九）に参拝して詠んだ歌である。これがせめてもの慰めであった。ところで水神社の「水」といえば、その辺一帯は水の豊富なところ。特に六郷町（現美郷町）の湧水群は有名である。今日では、それが環境庁の「名水百選」に選ばれているという。そのまま横手方面へと向かっているうちに、六郷町の町中に入ってしまった。狭い路地を進んでいると「御台所清水」に行き着いた。まず一杯飲んでみる。実にウマイ。近所のおばさんが汲みに来ている。彼女たちの顔立ちがいい。綺麗だ。正しく秋田美人。その時、ふと細谷さつきさんのことを思い出した。平成二年、角館で最初に出会ったのが彼女であった。「石黒家」の案内係をしていた。彼女の写真を数枚撮らせてもらった。その後一、二年経ってからか「ミスあきたこまち」に選ばれたと知らされた。その時、私の審美眼にくるいはなかったと確信した。彼女が言うにはお米とホウレン草を作っている農家だと。その率直さが彼女の美しさを一層引き立てたのである。そのうち結婚したという知らせを受けてから音信は途絶えた。

横手—湯沢を通過して、昼下がりに院内駅に着いた。この駅舎は「銀山異人館」を併設している。受付にて愛宕神社の円空仏について訊いた。するとその仏様はあるという。しかしご開帳は年一回お盆の時だけと付け加えた。何処から来たのかと訊ので京都からと言うと、それでは一度、先方に電話を掛けてあげようと言う。すると運よく電話は通じた。彼女に代わって私が電話口に出た。開口一番、円空仏を拝観したいと告げると、宮司は名刺を戴きたいと言う。どういう人か知っておきたかったのであろう。何しろ、特別な拝観になるのだから、普通では甚だ無理な話なのだ。彼女がうまく執り成してくれていたからかも知れない。宮司にしてみれば、愛宕神社に円空仏があるなどとはあまり知られていないし、知っているとすれば、その筋の研究者か造詣者かと判断したのであろう。私自身アゝこれなら脈があると思い、宮司の意にそうようにした。これから神社に上がって準備するまで少々時間がかかるので、十二、三分後に来てくれとの嬉しい返事。彼女はよかったですネと言って、その間、お茶を出してくれた。普通、こんな気配りは一見の客に対してできるものではない。さて、その神社は駅から歩いて近く、すぐ近くを流れる谷川を渡ると、右手に大きな鳥居が見えてきた。これだ。広い境内では近所の子供がボール投げを楽しんでいる。今も昔もそういう場所が子供の格好の遊び場なのだ。鳥居をくぐると、左側に社務所があり、来訪を告げると、宮司はすでに正装して待って居た。初対面の挨拶を交わし名刺を渡す。それから拝殿に向かって二礼二拍一礼する。宮司の後について本殿に上がる。少々厳かな気持ちに

十一面観世音立像
（愛宕神社）

なる。その裏手は鬱蒼（うっそう）とした森である。神域は広々として奥深い。宮司はおもむろに本殿を開扉した。その内部は薄暗い。円空仏は向かって左側の大きなガラスケースに納められている。御前に礼拝合掌。目を近付けてよく見ると、何とそれは大きな十一面観音立像ではないか。一瞬、前記五社堂の十一面観音立像とよく似ていると思った。撮影の許可をえてビデオカメラで撮る。薄暗いので持参した懐中電灯で照らす。ところが、ガラスケースに外の景色が反射して、二重写しのようになってしまった。やむなくそのガラスに直接、懐中電灯を当てて、その像容の部分部分をコマ切れに写す。時にはクローズアップして詳細に写す。刀痕がどのようになっているかを調べんがためである。鉈彫りといわれながら、実に丁寧なタッチである。私の印象判断では、それが前記五社堂の十一面観音と同じなのである。両者は作風において軌を一にしている言っても過言ではない。その際、宮司の見守っている中の撮影だから出来るだけ失礼のないようにした。宮司（鎌田太一氏・菅江真澄研究会会員）が言うには、何でも元禄の頃（十七世紀末）この村に大水が出て、村のお堂に在った、その十一面観音が川に流されているところを村人が見つけて拾い上げ、当神社に預けたもの（口伝）と。そのようにいわく因縁のある仏様なのだ。それにしても三百年以上も経っているというのに、あまり傷んでいない、保存状態がいい。村のお堂に安置されていた時も村人によって大事にされていたのであろう。そこで問題は、円空が院内に留錫し作仏した後どちらの方角に足を向けたのであろうか。山形領へ抜けたのか、それとも仙台領へ抜けたのか。ただ瑞巌寺（宮城県松島町）に円空仏（釈迦如来座像）があるので恐らく円空は「鬼首峠」を越えたのであろう。では円空は院内にどこから来たかということが問われるが、これは本荘市（現由利本荘市）に円空仏二体ほどあるので日本海から一応「本荘街道」を通ったであろうことは想像に難くない。いったん院内駅に戻って「院内異人館」の受付の女（ひと）にお礼を述べた。すると彼女は「雄勝町略史年表」をコピーして渡してくれた。この親切さには頭が下がった。秋田人の情け深さが身に染みて読めた。

四、正観音座像（由利本荘市・郷土資料館）

平成十三年（二〇〇一）五月下旬『秋田のかりね』（天明四年［一七八四］）を辿る。その途次、本荘市郷土資料館を見学した。入館してみると見学者は他に誰もいない。歴史ないし民俗の資料を一つ一つ見て行くうちに円空仏（観音座像）が目に入った。陳列ケースの中に大事に保管されている。一見して、その像容自体かなり傷んでいることが分かる。それまでの保存状態がよくなかったのであろう。職員の話では、その円空仏は蔵堅寺から寄贈されたものであるが、そのお寺に元からあったものではなく、それから先のことは全く分からないと言う。他所から当寺に遷座された時、すでに傷んでいたのであろう。ただはっきりしていることは、その仏様が本荘市の何処かにあったということである。よく見ると全体的に摩滅している。長い間、雨ざらしにされていたような感じである。刀痕もボヤケている。宝髻が切り取られ、左肩が削がれているように崩れている。見るも無残なお姿である。でもれっきとした仏像なのである。「時」の淘汰を超えて厳存しているのである。そのように、その円空仏は相当傷んでいるものの、その内に覆蔵されている衆生済度の誓願はそのまま不変なのである。子供に弄ばれて原形を止めな

くなった円空仏もあるやと聞く。その円空仏の内面より発せられる慈悲の光は絶対に遮られない。そういう思いをいだきながら退出した。

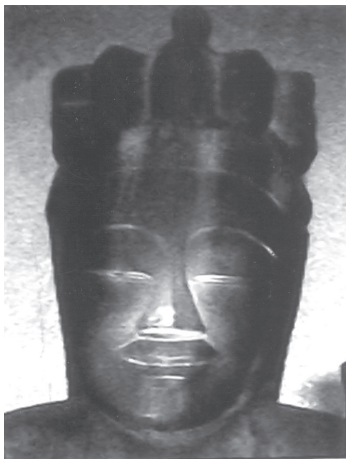
五、正観音座像（由利本荘市・大泉寺）

それから大泉寺を訪ねた。訪問に先だって一か月前、電話を入れ、ご住職（小番秀顕氏）と話し合って、円空仏拝観の承諾を得た。去年は飛び込みで不発に終わったからである。庫裏の呼び鈴を押すと、若住職が応対に出た。早速その旨を伝え、座敷へと通される。床の間に安置されている円空仏を持ち出してテーブルの上に置いてくれる。前記郷土資料館のものと同じタイプである。この円空仏は全く無傷である。まずその御前に拝跪。彼の話では元から当寺にあったものではないと言う。彼の許しを得て撮影する。その背面は墨がかけられていて、背銘があるのやらないのやら分からない。台座の裏に種子があってもおかしくないのだが、それも分からない。それにしても素晴らしい仏様である。いずれにせよ円空が日本海の海路で本荘湊に上陸し、しばらくの間、当地に留錫して作仏したことは間違ない。恐らく蝦夷地からの復路、土崎湊の次に立ち寄ったのであろう。それというのも鳥海山が修験の「行場」であったからである。

正観世音菩薩座像
（大泉寺）

六、十一面観音立像（能代市・湯殿山竜泉寺）

平成十六年（二〇〇四）二月十七日、竜泉寺（能代市清助町）に参詣する。当寺の場所を地図で確かめてその方向へ進んで行く。能代の町は不案内なので、その場所を探すだけでも一苦労であった。森を目掛けて歩いているうちに、その参道入口まで来た。そこから上がって行く。二、三〇センチの積雪がありしかも凍結しているので歩きづらい。手摺に掴まりながら一段一段、本堂に通ずる石段を上がると、湯殿山竜泉寺という表札が見えてきた。その一瞬〝湯殿山〟とは出羽三山（羽黒修験）かと思った。本堂横の庫裏で呼び鈴を押し、円空仏拝観を申し出た。ご住職が心安く応対してくれて、本堂に上がれと言う。堂内に入ってみると、向かって右側の間に円空仏（十一面観音立像）が安置されてある。その御前に拝跪。一見して、この尊像は前記赤神神社五社堂のものとソックリである。像容上、天衣の鰭状突起、腰裳の鱗状衣文、踏割蓮座・岩座は両者とも同じである。作風は同じと見ていい。それにしても、これも素晴らしい仏像である。撮影の許可を得て、ビデオカメラで撮る。薄暗いので、仕方なく懐中電灯を当てる。全体として、その写しがコマ切れになってしまった。その撮影が一段落して、ご住職にいろいろ訊いてみた。開口一番、彼は当寺は神仏習合のお寺であると言った。そして、その円空仏は元からここにあったものではないと言う。しばし彼の説明に耳を傾けた。すなわち当寺の前身は羽黒修験の能代出張所。明治の廃仏毀釈の際、秋田市上新城の石名坂高倉山観音院竜泉寺と合併して、真言宗湯殿山竜泉寺になる。現在は



十一面観世音立像（竜泉寺）

智山派（本山・京都智積院）に属する。そしてその円空仏は前記上新城の竜泉寺の旧蔵であった。

そこで問題はなぜ円空が上新城辺りに足を踏み入れたかということである。『角川地名大辞典五秋田県』を見ると、その村域に白山村ないし白山鉱山のあったことがわかった。そして白山村は〝南北朝に見える村名〟という。では、その村人は何を信仰していたか。『菅江真澄全集』第十二巻、四八六頁以下）を見ると、〝ククリヒメを祀る生土神社（ウスナ）があった〟という。ククリヒメは白山信仰の主神・白山妙理権現・菊理姫の謂であり、この本地仏が十一面観音なのである。それで円空が当地に留錫して十一面観音を作仏したことは確かだと解るのである。私の性分として、自分の目で確かめたく、平成十八年二月十五日、上新城「白山」地区を訪ねた。ところが人家のないところは除雪されていない。一メートルほどの積雪である。白山川沿いの道は雪で完全に埋まっている。丁度、雪かきをしている古老（八五歳）に白山神社があるかと訊くと、あると言う。しかし今は雪でそこへ行けないと言う。女性の神様（菊理姫）だという。これで納得。その神様にまつわるいろいろな伝承も聞き出すことができた。次回、実際に参拝することにして、古老の親切に謝意を述べ「白山」をあとにした。

（当研究会会員・京都市）

真澄短信①

◇嶋田忠一氏秋田県立博物館副館長に就任

秋田県立博物館主任専門員の嶋田忠一氏（当研究会会員）は四月一日の秋田県教育委員会の人事異動により、副館長に就任しました。ますますのご活躍祈念いたします。

なお、博物館館長には沢井範夫氏（県教育委員会生涯学習課長）が就任しました。ご指導よろしくお願いいたします。

「手這坂」は真澄からのプレゼント

嶋津宣美

一、桃源郷の手這坂

八峰町（秋田県山本郡）はこの春にハタハタの八森町とタヌキの峰浜村が合併してできた、農業と漁業の町である。海あり白神山地ありの自然豊かなこの町にも数多くの菅江真澄の足跡が残る。

手這坂には真澄が足を運んでいる。彼は満開の桃の花を見て、中国武陵の桃源のようだと記録していることから、「桃源郷の手這坂」として今日に伝えられている。国道一〇一号の道の駅「みねはま」から約二キロメートル程北上して、和梨の店頭販売の集落を過ぎた所で右手の山側に入る。水沢の集落を通って紀行文『おがらの滝』に登場するコウモリ淵、板碑の岩子、「山本郡名所往来」の中で鮭で知られた大久保岱集落を過ぎると杉木立に入る。その杉林の薄暗さが急に

桃源郷手這坂の案内板

開けたと思うと道は坂のテッペンで右に曲がる。その下に見える集落が手這坂である。国道から約六キロメートル程の距離にあり、集落は萱葺き民家四戸で構成されている。いまどき集落全体が萱葺き民家というのは秋田県内でも数えるだけであり、昔懐かしい農村風景を残してくれている。

真澄は文化四年（一八〇七）三月に手這坂を訪れた。手這坂は水沢川の川岸にあり、周囲が山に囲まれた谷底のような地形にある。昔の道は手で這うような急な坂道であったことから手這坂（てはいざか）の名が付けられたという。

以前、藤里町（秋田県）の全国菅江真澄研究集会で、福司満氏（藤里町菅江真澄研究会会長）から真澄は鉱山の実態確認のために白神山地を回ったのではないかとの説を聞いたことがあった。実は手這坂の奥にも「金山」があったそうで、当時は閉山中であったことから、その確認に来たのではないか。そう考えると幕府の隠密説も面白く、手這坂を訪れたのち数日間の病気による足止めも理解できそうだ。

「手這坂」《おがらの滝》

真澄は手這坂で住民の勧めたドブロクを飲み、次のような和歌と、桃の花が咲く図絵を残している。今から二百年も前のことである。

ここに誰れ世々さく桃にかくろひておくゆかしげに栖るひと村

（《おがらの滝》本文）

手這坂　水沢川をさかのぼり、家四、五ばかりの村をてはひさかといふ　犬の声、鶏の声　幽に聞こえ、たきちなかる、山川のさま　さらに　武陵桃源のものかたりに似たり。　（図絵説明文）

こんな山里の桃源郷手這坂も冬の大雪と萱葺き屋根の維持費が大変なことから、平成十二年の春には最後の住人が里に移り、無人集落となった。

桃の花咲く手這坂（八峰町）

二、手這坂の更生

平成五年に白神山地が世界遺産に登録されたことで、手這坂を巡る状況も変わってきた。前々から手這坂の脇を流れる水沢川には渓

流釣りの人たちが、関東方面などの遠方からも訪れていた。手這坂の奥のブナの森公園での散策や近くの村有林でのブナの植林にも多くの都会人が駆けつけるようになっていた。こんな状況下の手這坂を何とかしようと、村に活用を提案したが、個人財産を理由に断られ、やむなく民間活動での更生の道を選択した。

秋田県立農業短大の教授や学生たちが家周りの草刈や建物の整理を始めると地元に変化が出てきた。これを受け、平成十三年の夏に、民家を更生して都市と農村の交流に役立てようと地主や有志でつくる任意団体「手這坂活用研究会」を立ち上げた。この活動の発端は桃源郷が菅江真澄からのプレゼントであるとの一種の使命感からであった。もし、『おがらの滝』の中に桃の絵がなかったら今の活動はなかったろう。

学生たちの活動が起爆剤となり、家主が動き、同調した地元の大工さんたちがボランティアとして動いた。屋根の修理から始まったボランティア活動は、周りの草刈りや遊休農地の活用も手掛けた。真澄の図絵の風景を再現するために桃を植え、減反の田んぼに再び田植えし、里山の景観を維持している。

こうした活動の中で手這坂の隠れた宝をいくつか発見することができた。春は図絵の再現のために植えた桃の花、夏は放棄地や水路の更生で増えたホタル、秋は紅葉の季節の更生民家での大衆演芸、冬は真っ白の雪原での雪灯籠。それに集落の周辺にある滝や小川のイワナ・セリ、間伐のできる森、ジュンサイ摘みのできる池などがある。

三、地域通貨「桃源」

更生した民家では会員が仲間を引き連れて宿泊する機会が多くなり、ホタルを観察したり、世界遺産の白神山地を散策した後の宿泊などにも利用されている。今は民家の利用は活動協力者に限っているが、将来は誰でも気軽に利用できる「民宿」にしたいと考えている。

手這坂にはここだけで通用する通貨がある。地域通貨「桃源」である。会が主催する更生活動にボランティア活動として参加すると対価として支給される。一日で千桃源で、日本の通貨「円」の千円の価値がある。利用は手這坂の好きな民家での宿泊（三千桃源）や昼食（千桃源）などに利用できる。村内の公共施設での入浴やソフトクリーム、野菜との交換ができるが、会の財政事情上、「対外レート」を適用して、三分の一の価値軽減規制をしている。地域通貨の導入は秋田県内で初めてであり、村では公認の通貨である。

毎年、民家の更生が完了した秋に「桃源郷まつり」と称して、更生民家の一般公開も行っている。民家を使ってのそば打ち体験や民家での昔懐かしい大衆演芸を見て、昼食は手這坂名物の「だまこもち」が定番となっている。この時にこの「桃源」が効力を発揮する。

そば打ち体験に千桃源、お昼に千桃源、大衆演芸に千桃源という具合に使われるのである。たとえ会長であっても、この通貨なしではだまこもちも食べられないし、挨拶もできないのである。反対にがんばった人には手這坂で大いに威張ってもらい、楽しんでもらおうというご利益がある。そうなると活動に参加しないわけにはいかず、どうしても桃源を確保する必要があり、どうにか必要量のボランティアの確保を維持している。これが桃源郷マジックである。

四、ひらかれる手這坂

今は一生懸命民家を修復し、周りの草ボウボウの耕作放棄地を元に戻す作業を続けている。更生後の農地には菜の花やれんげ草を蒔き、花が見られるようにしている。

田んぼでの米作りはアマチュアカメラマンたちのカメラアングルの注文で始めた。ところが意外にも、非農家でも自分で作った米を食べてみたいという希望が多く、無農薬無肥料栽培を始めて四年になる。手這坂の米は沢水を使っているので収量は少ないが実に美味しい。

更生活動は今年で六年目となる。萱葺き民家は屋根が生命線で、十年以上も葺き替えのない民家は雨漏りも進んでいる。全面葺き替えは資金面で無理があることから、「刺し茅」という方法で対応している。雨漏り箇所を補修で補うというものである。経費は企業な

どの社会貢献事業などの支援を受けて実施している。主な経費としてはかや手さん（萱葺き職人）の労賃や、機械の購入費や木材代、イベント経費などである。労力は登録会員に会報で知らせてボランティアで行っているが、最近はまとまった労力を地元の大学の協力で確保している。昨年は国際教養大学の学生が夏休みにインターンシップ制度として活動に参加し、民家に寝泊まりして、民家の更生活動を行っている。ありがたい事である。その代わりに、彼らにはご褒美として「むらづくり」を会員の一人として味わってもらっている。

無人集落となって人口がゼロであったものを、桃源郷まつりには行列ができ、民家から人が溢れるようになった。春には大型バスが横付けされることもある。手這坂の有史以来初の出来事であるが、目指すは観光ではない。萱葺き民家の民宿である。昨年五月には「菅江真澄研究会の真澄の足跡を探訪する会」七十五人が三台のマイクロバスで来訪、民家での食事、学習の後、こちらの案内で、真澄の記した「強坂の阿弥陀さま」「杉沢の熊野神社」を案内させていただいた。次回はぜひ民宿していただき、二つの研究会が、夜をてっして「真澄談義」をしたいものである。

ウグイスが鳴き、川のせせらぎが聞こえる田んぼや林のあるのどかな風景の小さな集落で萱葺き民家に寝泊まりして、豊かな自然を満喫し、農業体験や渓流釣りをしたり、ドラム缶風呂を薪で沸かして入り、郷土料理を食べて英気を養ってもらう場とすることだ。そうすることで民家の維持資金を確保するというものである。

五、功労者山崎光博教授

昨年の春に手這坂更生の仕掛け人である明治大学の山崎光博教授が病気で亡くなった。手這坂が大好きで、よっぽど手這坂に引かれたらしく、友人などにも秋田に桃源郷を見つけたとの連絡を入れたという。闘病中の病室にはいつも手這坂の写真が貼ってあったそうで、亡くなった時奥さんはきっと魂が手這坂に飛んだのだろうと言っていたことが印象的だった。本人の遺言で手這坂に少量である

が散骨された。秋の桃源郷まつりには恩人の記念碑を建立した。今の私どもの活動は菅江真澄の活動が原点にあるが、活動の展開につなげた山崎教授は第二の手這坂恩人である。更生活動でも彼が何を目指して手這坂に関心を寄せたかを考え、彼ならきっとこうしただろうと思う方向で更生を進めている。あとは早く更生を完了させて、具体的な利用をしなくてはならないが、これはもう少し時間がかかりそうだ。ボランティアでできる範囲のことは早めに終えて、次の段階である活用が目下の課題である。

真澄からのプレゼントを大事にして、それで若者たちが活動できる場を創れればと思っている。ここ何度か手這坂更生の活動に対して、いろいろなところから表彰をいただいたが、これも真澄からのプレゼントなのかも知れない。活動の場を提供してくれた彼に感謝している。

（八峰町・手這坂活用研究会事務局長）

真澄短信②

◇「国境を守った人々」　福岡龍太郎氏

北秋田市在住の福岡龍太郎氏は標題の冊子を発行した。

真澄の著作日記『すすきの出湯』、随筆集『筆のまにまに』一巻「まつかげのすずり」に紹介されている小又川の奥地、森吉山麓の集落「砂子又」（北秋田市・旧森吉町）について、真澄の著作や他の記録、かって集落に住んでいた人々を尋ねてまとめた労作です。真澄はこの集落について、「稗を栽培し、畠を耕し、山菜やキノコを採ることを生業としている」と記しているが、この地は南部藩との国境であり、藩当局から扶持米を支給される拠人の村であったことを述べている。

砂子沢には江戸時代から十戸ほどの家があったが、昭和二十八年、人造湖（ダム）「太平湖」ができ、湖底に沈んだ。ダムには春から秋にかけて遊覧船が運行し、秘境小又峡に渡ることができる。

真澄の秋田領入部と吉川五明

石田冲秋

真澄がその旅立ちにあたり、「ふるきかんみやしろををがみめぐり、ぬさたいまつらばや」と述べているが、長い旅の生涯に亙って書き記した日記、所謂『真澄遊覧記』を繙けばだれもが首肯できるものでないことが判然するであろう。その旅の動機は、彼の出自とともに柳田国男を始め多くの人々、特にその研究に心血を注いだ内田武志をしても依然判明されずにいる。しかし、それ故に彼を纏う神秘さと不思議さをもたらし、却って大きな魅力とさえなっている。

そうした真澄の旅の端緒といえる天明四年（一七八四）の最初の秋田領入部について日頃疑問に思っていることなどを整理し、紙幅の許される範囲で述べてみたい。

西馬音内でなにを待っていたのか

真澄の秋田領入部の経路は、『秋田のかりね』の通り、小砂川から象潟を経由して本荘に至り、そのまま海岸沿いに北国街道を北上することなく、どうしたことか子吉川沿いに進路を変え鳥海山麓の矢島から伏見に辿り着き、果敢にも八木山越えをして秋田領の田茂ノ沢に入ったのは、天明四年十月十日のことであった。そして翌十一日にはそこから軽井沢の峠越えして最初の目的地と思われる西馬音内に到着した。伏見から田茂ノ沢には、現在車道となっている道でも、真澄の記している通り沢越えの険峻な山道に変わりないうえ、真澄が通った十月十日は新暦では、一ケ月遅れの十一月十日頃にあたり、折柄の大雪に見舞われにも拘わらずその雪を衝いての強行軍であった。また、道に迷った彼を救ったのは、たまたま出会った富山の二人の薬売りであった。

雪の出羽丘陵越えをして西馬音内に辿り着いた真澄は、その市の様子などを記しながら、どこからか届く連絡を待つかのように所在のないまま八日間滞在している。そして突如として然したる理由を明らかにしないまま杉の宮の三輪神社に参拝したあと、雄物川を渡り、その川辺の村の柳田に入り草彅某という一人暮らしの老人を訪ね「雪の消えるまで過しなさい」という親切な言葉に従い約半年に亙って止宿している。

真澄と山田家との関わり

親切にも長い滞在を許した草彅某については、郷土史家の斎藤実徳氏が現地調査を行い「ドヤジサ」（鋳掛屋の爺様）といわれた草彅重吉であることを明らかにしている。[1] 真澄はこの草彅家を拠点として近在の人々と交流しまた、丹念に冬の風物詩を記した『小野のふるさと』を遺している。その中で特に注目されるのが、湯沢市柳町の山田家との関わりである。真澄は柳田に滞在する中で山田家に幾度となく訪れているが、それから三十八年後の『笹ノ屋日記』の文政六年（一八二三）正月の件りで、祖神と思われる菅大臣ノ御神、白井太夫ノ御神や三河の親族、旅の生涯で忘れることの出来ない親しき人々の霊祀りを行ったことを記しているが、その中で秋田では唯一「雄勝郡山田家」を挙げている。真澄はこの山田家のことを「山田なにがし」とのみ記しているが、文政五年の『久保田のおち穂』の中で、久保田（秋田市）の谷地町に住む「雄勝ノ郡湯沢の駅の産」の山田貞弘という刀鍛冶を取り上げ、その家に伊勢の刀工安倍小弥太（井ノ口源治）が止宿した折、彼から「鍛工（カヌチ）の式法（ノリ）」を学び、その後、山形の米沢赤湯の刀工川辺正秀に弟子入りしたと記している。この貞弘について、田口昌樹氏は『佐竹南家日記』から柳町の商人山田家吉兵衛の弟であることを明らかにしている。[2] とすると伊勢の刀工が訪ねた山田家は湯沢の貞弘の生家であり、その家は鍛冶屋であったが故に若き日の貞弘が伊勢出身の旅の刀工より刀鍛冶を学んだことが容易に類推される。

真澄が半年に亙って滞在した柳田の草彅重吉は鋳掛屋であり、柳町の山田家吉兵衛が鍛冶屋であったが故に両者は職業的な繋り所謂「出入り」の関係であることが分り、真澄が突如として八日間滞在した西馬音内を後にして柳田の草彅家を訪ね、経済的に然程ゆとり

があったとは思われない同家に半年に亙って止宿した訳が理解できよう。真澄が七十歳の正月を迎え、何故に一族等の諸霊と一緒に山田家の人々の霊を祀ったかは未だ詳らかではないが、その陰には秋田領入部にあたって山田家が担った役割が大きかったことが推察される。

真澄が出会った北溟という人

真澄は四月九日に山田家を訪れ久保田城下からきていた真崎北溟という人と会い、酒を酌み交し歌をつくっている。翌日、北溟が帰るにあたり、次の漢詩を真澄に贈っている。

相遇暫時復相別
離筵握手酒盃清
梅花枝上残花雪
君似東西南北行

その終りの件りの「君は東西南北を行くが似し」には、真澄の旅先の平安を祈念する思いが滲み出ている。北溟は、同年七月に真澄が訪ねた久保田の俳人吉川五明の門葉の一人であったと思われまた、真澄研究で知られる真崎勇助へ列なる人と思料される。真崎家の代々の知行は、秋田藩初代藩主佐竹義宣の致役した兵庫介が掘ったと伝えられている「真崎堰」が貫通する一日市、大川、夜叉袋など南秋田郡の六ケ村であった。その夜叉袋（昼寝の里）の俳人で五明門の素大、樗木、野了の三者が寛政六年（一七九四）に松尾芭蕉百回忌にあたって、同地の一向堂境内（現在の諏訪神社）に芭蕉の句〝月いづこ鐘は沈める海の底〟の句碑を建立、それを記念して五明の序文を得て献句と雑詠を集めた『月以都古』[3]を編集刊行している。その入集者六十八名の中に亡人と注記された北溟が記されている。北溟と号した人物に藩財政を担当した本方奉行を務めた滑川長蔵（一七五五～一七八七）もいるが、長蔵は漢詩人として知られている[4]が俳人ではなかった。とすれば素大等が『月以都古』を上梓するにあたって、既に故人となってはいたものの同じ五明門人であり、村の地頭でもあった真崎北溟の句を入集させた可能性が極めて大きいものと考えられる。真澄は、北溟と会した約百日後に久保田城下の五明の許を訪ねているが、北溟は湯沢の山田家で五明からのなんらかのメッセージを真澄に伝えたのではないかと思われてならない。

真澄と五明

五明は、与謝蕪村らと共に「芭蕉に還れ」という中興俳諧運動の担い手として全国的にも著名な俳人であり、その五明の許に七月二十二日に真澄が訪れていたことは、藤原弘氏が発見した「五明住所録」によって判明している。更に藤原氏は、その後の真澄の旅は、東北地方の各地に及ぶ五明門葉との深い繋りの上でなされたことに言及されている[5]。真澄は歌人としては夙に知られているが、『真澄遊覧記』を丹念に読んでゆくと数は少いながら発句や付句が見られて、真澄自身俳諧を嗜んでいたことが分かる。また、その「まなびの祖（おや）」である三河吉田（豊橋市）の植田義方は俳号を古帆と称した東海道では著名な俳人であり、更にその師の京都岡崎の釈蝶夢は芭蕉の『おくの細道』を再刊したやはり中興俳諧運動の大立物であった[6]。正しく真澄の旅は、中興俳諧運動の全国的ネットワーク上に展開されていた[7]といっても過言ではなかろう。

五明が亡くなった享和三年（一八〇三）十月二十六日には、真澄は大館周辺を旅していたことから、当然その死も知らずまた、葬儀にも参列していなかった。しかしながら五明門で絵師でもあった五十嵐嵐児が、人物絵を描くことが不得意であった真澄に代って馬場目の盆踊りなどの絵を二葉描いている文化六年（一八〇九）の『ひなの遊び』の中に、前述の『月以都古』を取り上げ、五明の序文を詳しく記述している。また翌年の『牡鹿の嶋風』には、「五明老人も紀行あり」と記していて、真澄が五明を尊崇していたことが分かる。

真澄は、久保田城下に定住するようになった晩年には、先の嵐児を始め工藤野松や土肥渭虹ら五明門の人々とも交流を深めていて、野松の遺した句帳に

真木立杣夜[9]ますこし三日の月　　並墓

の一句があるが、その句には「常冠ますみ」という付箋が張ってあって、並墓が真澄の俳号の一つであった[8]ことが分かる。また、渭

虹が文政三年（一八二〇）に五明十七回忌にあたって編集刊行した追悼句集『佐夜の月』[9]に

暦より四五日はやき寒さかな　　真寿身

の一句を献じている。

雪の出羽丘陵を越え秋田領に入り西馬音内に遣ってきた若き日の真澄は、何処からかの連絡を待つかのように八日間西馬音内に溜まり、突如として見ず知らずの柳田村の草彅重吉の許を訪ね一冬を過した。また、湯沢の柳町の山田家を往来して、雪消えを待ったように同家で五明門とおぼしき北溟と会った後に久保田に五明を訪れている。『秋田のかりね』と『小野のふるさと』の二つの日記にそれとなく記されている人々と俳人五明との間に繋がるルートの究明について、これからも努めていきたいと考えている。

註

（1）斎藤実徳「秋田のかりねについて」「出羽路」第二十七号　秋田県文化財保護協会　昭和四十年

（2）田口昌樹「菅江真澄と秋田の旅―天明五年の空白を考える―」「出羽路」第九十四号　同右　昭和六十三年

（3）藤原弘編『秋田俳書大系　近世中期編』　秋田俳文学の会　昭和五十七年

（4）『秋田人名大事典』　秋田魁新報社　昭和四十九年

（5）藤原弘「真澄の旅と吉川五明」『菅江真澄と秋田』　加賀谷書店　昭和五十三年

（6）近藤恒次『賀茂真淵と菅江真澄』　橋良文庫　昭和五十年

（7）拙稿「菅江真澄の俳諧について」「菅江真澄研究」　第七号　昭和六十年

（8）藤原弘「五明と北奥羽俳壇」『秋田俳諧考説』　秋田俳文学の会　昭和六十二年

（9）藤原弘編『秋田俳書大系　近世後期編』　秋田俳文学の会　昭和五十八年

（当研究会常任理事・秋田市）

菅江真澄が記録した雪形

小笹鉄文

一、菅江真澄の旅と雪

天明三年（一七八三）、旅に出た菅江真澄は、十月二十一日に信濃で三ノ宮の御柱の神事を見た。翌日、大雪に遭い、

かれがれにあるかなきかのみち芝の色もかくろふ今朝のはつ雪

と詠んで、雪で行き先が見えなくなり、道に迷いそうであると記した（『伊那の中路』）。これが旅日記での雪との出会いの始まりである。

翌年、象潟から秋田に入った真澄は、伏見村から雪の山越えをして西馬音内にたどり着いた。『秋田のかりね』には、高く積もった雪やかんじき、そり、かまくらなど、雪国の生活が新鮮な驚きの目で生き生きと描写されている。

その後、東北・北海道の各地で冬を過ごし、雪に関して膨大な記録を残した。これを読み解くことは、今後の大きな課題になるだろうと思っている。ここでは、特記すべき次のことを記すにとどめる。

『浦の笛滝』（文化元年＝一八〇四）に「雪の六花」という図絵がある。この図絵には、雪の結晶のスケッチと説明文が書かれている。北秋田市川井（旧合川町）から能代、そして八峰町の笛滝を訪れた時の日記であるが、本文には雪の観察の記述はない。図絵説明文に、寒中から寒過ぎまで観察を続け、結晶の形の違いを見つけたことを記している。

日本における雪の観察は、古河城主であった土井利位が顕微鏡で雪を観察し、天保三年（一八三二）と同十一年に出版した『正続・雪華図説』が有名である。そして越後塩沢の鈴木牧之が天保六年（一八三五）に出版した『北越雪譜』の中で「雪の形」として雪の結晶図を広めた。

しかし、菅江真澄は土井利位や鈴木牧之より三十年も前に雪の結

晶を科学的に観察し、記録していたのである（「秋田雪の会」機関紙『雪輪』第三〇号〈平成十六年十二月〉小笹鉄文）。

二、真澄が記録した雪形

春、山に積もった雪が消えていき、次第に現れていく山肌や残雪が人々の暮らしになじみ深い形を作ることがある。代掻きや種蒔きなど農作業の時期を告げる目安として古くから親しまれてきた。これを「雪形」という。

菅江真澄の著作をよく読むと、雪形の記録があちこちに書かれている。駒ヶ岳と名のつく由来を説明し、八甲田山、岩木山については図絵で詳しく表現している。雪形研究の先駆者といえる。寛政四年（一七九二）、松前から下北に渡った真澄は、二年半の後、津軽に移動して岩木山、八甲田山に登り、雪形を図絵に記録している。岩木山に「白狗」「斑犬」「長鍬」「股鍬」「植女」等（『錦木雑葉集』）、八甲田山には「種まき翁」「蟹のはさみ」「牛の頭」の三つの雪形を認めている（『すみかの山』）。これらの雪形については、青森市在住の室谷洋司氏が研究し、インターネットで公開している。

享和元年（一八〇一）に深浦から秋田に入って落ち着いてからは、藤里駒ヶ岳、白神山地、太平山の雪形について記している。

享和二年（一八〇二）、藤琴から太良鉱山を訪ねた真澄は、藤里駒ヶ岳の手前まで分け行っている（『しげき山本』）が、この山のことは書いていない。後に、随筆『花の真清水』で、

粕毛の嶽に雪消る時、その雪にて駒形のあらはる也

と記している。なお、筆者が調べたところ、秋田県公文書館に所蔵されている享保十年（一七二五）の「山本郡絵図」には「カセ内岳」と記されていることがわかり、この山は後に真澄が記したように駒形があるために駒ヶ岳と言われるようになったものと考えられる。

文化四年（一八〇七）「岩館（八森町）から始まる『おがらのたき』の中に、

出て遠かたをむかへば、正子（マネ）にあたりて見ゆるは船が沢の兎雪、亥の方に見へたる上の字が嶽は、消え残る雪の形の上文字をなせば、

かれをもて白上（神）山の名におふことにや。これをためしに早苗とるころとて、田うちの心いそぎし。浦の海士は、はや鰯の来べきころほひと漁のまふけをせり。

と白神の由来を書いている。また、富士山の布雪、農男、下北の釜臥山の牡丹、岩木山ののぼり竜、くだり竜、八甲田山の蟹子のはさみ、種蒔法師にも言及している。

八峰町の嶋津宣美氏（手這坂活用研究会事務局長）が白神山地の雪形の研究を行っている。「ウサギの形」の山「船が沢」とともに、「白神」の雪形の観察を続けており、「上」の字は確認されていないが、ひらがなの文字がたくさん見えるといっておられた。昨年（二〇〇五）、室谷洋司氏は嶋津宣美氏の協力を得て観察し、ついに「上」の雪形を発見してインターネットで発表した。世界遺産として国際的に知られるようになった白神山地について、真澄の記録が重要な意味を持つことの証である。

太平山には文化九年（一八一二）に登り、図絵も含めた克明な記録を残した。この山の雪形については後述する。

三、雪形の研究

「雪形」という語を初めて使ったのは、岩科小一郎で、『山の民俗』（一九六八年・岩崎美術社刊）に「雪形考」と題して、発表している（駒ヶ岳ファンクラブ会長田口圭介氏の御教示による）。

そして、この「雪形」を普及したのは、信州安曇野の山岳写真家である田淵行男（一九〇五～一九八九）である。昨年（二〇〇五）は田淵行男の生誕百年にあたり、これを記念して展示会や雪形探訪などの催しが行われた。

長野県安曇郡豊科町のＪＲ大糸線柏矢町駅に降りて東に二十分ほど歩いた所に山小屋風の田淵行男記念館がある。

田淵行男は、鳥取県生まれで東京高等師範学校を出た教師であったが、山に魅せられて、常念岳が正面に見えるこの地で、山岳写真家として活躍し、また、高山蝶をはじめとする昆虫生態研究や雪形

研究の分野で大きな仕事をした人である。

日本各地の雪形写真を集成した『山の紋章雪形』は雪形研究の礎を築いたとされる。五龍岳の「武田菱」、常念岳の「常念坊」、鹿島槍ケ岳の「ツル」などが有名であるが、その由来や美しくながめられる位置などを写真とともに流麗な文章でつづっている。

日本雪氷学会でも近年、雪形研究グループが活動しており、各地域の人々といっしょに観察会を催したり、雪形の変化の研究を進めている。昔からの雪形が残っている山は、自然環境が保たれていることを示しており、雪形が崩れたり、変化して判別できない山は災害や植生の変化、人為的影響などが考えられるという。

四、太平山の鶴ガ岳の鶴の雪形

太平山の鶴ガ岳に鶴の雪形が現れることについて菅江真澄が自身の登山記『月のおろちね』で、

この嶺の雪もけち行ころは、鶴の姿のあらはれける、それをもて鶴箇峯とはいふとなん。

と記している。また、富士の布雪・耕夫、栗駒山の馬形、岩木山の竜像、釜臥山の牡丹、八甲田山の蟹の鋏のことも記している。

私は、三年前から太平山鶴ガ岳の雪形を探し始めた。鶴ガ岳は見る位置でその姿が著しく異なる峰である。秋田市からだと中岳の奥になり山頂部しか見えない。野田集落からは荒々しい侵食地形の急峻な屏風のように見える。四月中・下旬ころの週末、秋田市太平地区に車を走らせながら観察を続けたが分からない。山に詳しい人たちにもたずねたが、知っている人はいなかった。

昨年（二〇〇五）四月十六日（土）、野田集落から眺めたがやはり分からない。四月二十四日（日）夕方、イワウチワの咲く太平山前岳を下山しての帰途、車で雪形を探しながら県道を行くと、鶴ガ岳の山頂に残雪が乗っているのが見えた。太平地区のＪＡ倉庫前に駐車してよく見るとツルが見えてきた。ほそい嘴を中岳に向けた横から見たツルである。夕日に輝くツルを見て、一人感激に浸った瞬間であった。

太平山鶴ヶ岳の雪形　平成17年4月24日撮影（小笹）

五、真澄に学ぶ雪形研究の今後

雪形は春先の限られた短い期間しか観察できない。長い期間を要する研究である。私は、菅江真澄の記録を手がかりに、各地の雪形について観察し、調べていきたいと考えている。興味を持つ人とネットワークを作っていくことにより、新しい発見が生まれるだろうと思っている。

（当研究会常任理事・秋田市）

参考文献

『菅江真澄全集』内田武志・宮本常一編、未来社
『ふるさと雪形探訪』室谷洋司（二〇〇五年ホームページ）
『山の民俗』岩科小一郎著（一九六八年・岩崎美術社）
『山の紋章雪形』田淵行男著（一九八一年・学習研究社）

菅江真澄が出会った山内

瀬田川　芳子

Ⅰ、はじめに

本校の近くにある鶴ケ池公園には、「菅江真澄の道」という標柱が立っています。大変大きく立派な標柱なのですが。生徒の多くは「菅江真澄」がどのような人なのか、山内村とはどんな関わりを持っているのかを知らずに見過ごしてしまっています。今年度、山内で全国菅江真澄研究集会が開催されるという機会に、生徒と共に「菅江真澄の目を通して、当時の山内の様子を調べてみよう」と思いました。そこで、「菅江真澄の出会った山内」というテーマで、菅江真澄が「山内」でどんなところに魅力を感じたのかを調査してみました。

Ⅱ、山内村との関わり…大松川地区を中心に

一、真澄が「山内」の調査に訪れた時期

『雪の出羽路平鹿郡』を作成したのが、一八二四年（文政七年）～二六年（文政九年）ころで真澄が七一歳から七三歳ころのことでした。おそらく、山内に来たのは、七二歳頃だと考えられています。

二、真澄が記述した「山内」九カ村について

九カ村の記述を見ると、内容・文章量に違いがはっきり感じられます。たとえば、南郷、三又、黒沢、小松川についての記述は、非常に内容があっさりしていて文章量も少量です。しかし、筏、大松川になれば、ぐっと記述は詳しく文章量も多くなっています。そこで、真澄自身、現地を踏査せずに、肝煎などの村役人から情報を聞き出した地区もあるということがわかりました。

三、真澄が記述した「大松川郷」について

大松川地区の記述は、現地に足を運んで、細かく見聞した人しか書けないような具体性が感じられました。そのことから、真澄は大松川地区に滞在していたことが読みとれます。郷土史家の佐々木先生のお話や資料、そして菅江真澄の『雪の出羽路平鹿郡』から、「黒沢勘重郎」に注目しました。

「黒沢勘重郎」とは、福万に住み、代々藩境（萱峠）の監察と山林の管理にあたっていました。真澄が訪れた時は、山内九カ村の「纏肝煎」でした。そのため、藩命を受けて、真澄を接待したのだと思われます。村史を見ると、黒沢家には一七三七年（元文二年）～一八五一年（嘉永四年）の間に、南部領、大松川、そして村外（三本柳や田村など）から、土地の永代渡し・借銭証文五三点があったことがわかりました。村外や南部領の人に、お金を貸して、そのかわりの抵当として土地を引き取るだけの財力があったのだということも推測できます。真澄の記録にも「この黒沢勘重郎が家は、いといと間広く作りなしたり」とあり、県内では珍しく大きな住宅だったようです。同じように、多くのお金を貸しているのが、外山の三梨左膳家です。御嶽山塩湯彦神社の神官を務めて地主的存在になり、経済的に外山の上位にあり、知識人として尊敬されていた人物でした。真澄は、御嶽山頂（七四四㍍）に鎮座する御嶽山塩湯彦神社にも足を運んでいます。

山内の内でも経済力のある人物が、この大松川地区に二人もいるということは、注目に値すると思います。藩境で、人と物資の出入りを監察して役銭を徴収していた黒沢家、式内社の神官となり、藩から米や銭（または銀）の十分な支給があった三梨左膳家。もしかして、この福万から外山までの地域は、山間部の村の中でも、「豊か」だったのではないだろうかと考えられます。その理由として、次の四点が考えられます。

（一）交通の要点

現在の主要道路が、この地区を大きくはずれているために、「奥にある」感じがしますが、真澄が訪れたころは、南部藩の「左草」側から大松川側に一年を通して（勿論、冬は通行困難になるが）千人以上の人やさまざまな生活物資が多く入ってきたようです。する

と、入ってくる役銭や物資、情報などに豊かさがあったと考えられます。

（二）地名に見る金の産出地

現在の地形図にも残っている「金堀沢」という地名。外山の赤倉の山中にある「大台」に残る伝説「黒沼の伝説…福万長者」などから、産金地だったことが考えられます。江戸時代末期の「秋田領内金山箇所年数帳」には、村内各地に金山があることが記載されています。大松川地区が交通の要地だとすれば、当然「黄金の道」となっていたと考えられます。

（三）新田開発地

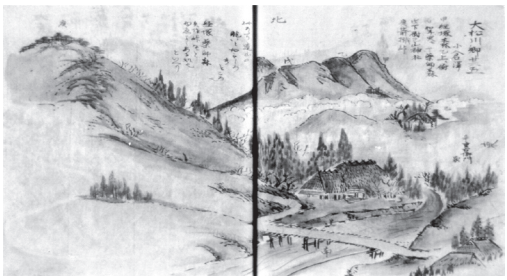
『久保田領郡邑記』は『六郡郡邑記』（一七三〇年＝享保十五年）の後で作成された地誌で、十八世紀末の秋田県内の記録をまとめています。この中に記載されているデータを見ると、米の人口一人当たりの石高が、九カ村の中では、大松川地区が比較的高いことがわかりました。

十八世紀から一九世紀にかけては、天候不順による大凶作や飢饉が相次いでいました。そんな中にあって、福万の黒沢勘重郎が新田を開発したという記述を残しています。『雪の出羽路平鹿郡』十四巻には、福万には「田・畑ある山里」で大城林（ダイジョウヤシ）に「よき寒水（しみず）があり、「この清水をもって、黒沢勘重郎、文化元年（一八〇四）をはじめに百刈ばかり水田をひらきぬ。」と記しています。山深い土地ではありますが、代々、水田や畑の開墾を勧めていたと考えられます。

（四）宗教的に重要な土地

大松川地区には、三つしかない式内社の内の一つ「塩湯彦神社」があります。この「塩湯彦神社」は横手盆地きっての古社であり、およそ千二百年前の創建と考えられています。

また、白滝観音は、御嶽山塩湯彦神社の奥の院。六七二年（天武一年）に開かれた滝で、十一世紀前半に満徳長者（後の保昌坊）が、有名な仏師「定朝」に依頼して観音仏三十三体を刻ませて、藩内初の三十三番札所を定めました。その第一番札所は、御滝山の奥の院である「白滝観音」でした。



真澄の描いた大松川地区
（『雪の出羽路　平鹿郡』）

現在の大松川地区

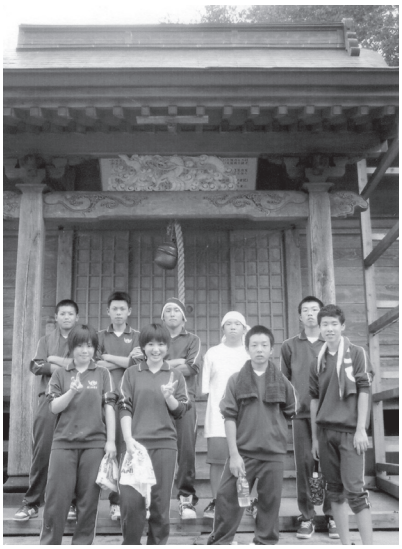
私たちは、夏休みに御嶽山塩湯彦神社と白滝観音にフィールドワークしました。夏の厳しい暑さの中で急斜面を山登りするのはとても大変な日でした。でも道路が舗装されており、目的地に近い所まで車で行くことができるので、随分楽をしたと思います。真澄が登った頃は、車も舗装道路もなく、道も今ほど整備されていなかったでしょう。車でも長かった険しい道のりを、真澄は足で歩いたと思うと、頭が下がる思いになりました。

特に白滝観音は、急勾配できつい登りでしたが、目的地に着いたときは、緑豊かで水の流れる音が疲れた私たちを癒してくれました。きっとここを訪れた人は同じような思いを受けたと思います。かつて観音仏を安置した満徳長者もきっとこの場所に安らぎと神聖な思いを感じたと思います。

以上、「交通の要地」、「金の産出地」、「新田開発地」、「宗教上の要地」という四つの観点から、「大松川郷」は山内九カ村の中でも「豊か」

で「魅力」のある地域だったのではないでしょうか。

実際に、菅江真澄も『雪の出羽路平鹿郡』十二巻の「羽根山」のところで、長者の話にふれ、「また、山内の奥にも地福長者、万福長者、福満長者なんどの旧跡をはじめ、なに長者、くれ長者とて、長者の名どもいといと多し、なおゆえよしある地ならむ、たづぬべし。」と書いています。



御嶽山塩湯彦神社に参拝した生徒たち

Ⅲ、まとめ

秋田には、古くは、平安時代の一一七四年（承安四年）に、歌人「西行法師」が訪れ、江戸時代の一六八九年（元禄二年）には「松尾芭蕉」が秋田を訪れています。しかし、彼らは、「象潟」など一部を旅しただけで、長くとどまっていたわけではありません。その点、「菅江真澄」は二九年間の間、秋田で生活し、庶民の生活を観察し、文章や絵で表現し、多くの歌も詠んでいます。私たちの住んでいる地域でも、

しら雲かなみかあらぬか遠方を四方にみたけのいや高くして

きしべなる松の緑も影さして千代もすむらし鶴の池水

と詠んでいます。山深いこの地域に七二歳の真澄が足を運び、さらに奥地の外山地区まで進み、険しい山を登っています。きっとこの福万～外山地区は、他地区との交流もあり物質的・精神的にも豊かな地だったのでしょう。

予想では、真澄が訪ねたころの山内は、街道から離れていて山深く、外との交流が少ない、閉ざされた集落の集まりだったと考えていました。しかし、調査してみると、南部藩との「交通の要地」で、式内社が祭られている「宗教上の要地」でもあり、「金の産出」や「新田開発」の記録もあったので、予想とは全く異なった山内が浮き彫りになりました。今では、大松川ダムができたために、ダムの底に沈んでしまい、民家もなく、当時のにぎわいを感じることができないのはとても寂しいことだと思います。

Ⅳ、感想

研究中、県立博物館の菅江真澄資料センターに行ったり、様々な文献を調査したりしました。菅江真澄という人は「とても人望の厚い人物だった」というエピソードを知る事が出来ました。また、学校周辺や白滝観音、塩湯彦神社と菅江真澄に関する箇所を訪れていくうちに、山内村に残る素晴らしい歴史を「目で見て」「時代を越えて共有する」ことができたような気がしました。

さらに、真澄の絵は、鳥瞰図的な描き方をしているため、実際の風景とは少し違うところがありますが、当時描いた風景と、現在の風景がとてもよく似ているところを発見した時は、とても感動しました。

この調査を通して、ふるさと「山内」の、いにしえの人々の息づかいが感じられました。菅江真澄のおかげで、後世に生きる私たちは、地域の歴史を身近に感じ、また、そこから新たな地域の魅力を知ることができました。この点について、二月上旬に開催されました秋田県教育研究発表会において、発表させてもらう機会がありました。そうしたところ他校でも、「菅江真澄」について調査したいという動きがあることが分かりました。「菅江真澄」を教材化して、生徒たちの学習に結びつけるような取り組みが広がったら、どんなに素晴らしいことでしょう。菅江真澄の遺産には、社会科、国語科、

理科、美術科などの授業に結びつくものが豊富にあると思います。より多くの生徒たちに親しんでもらえるよう、私自身も教材化の継続に努力したいと思います。

最後になりましたが、本校の生徒が、第一八回全国菅江真澄研究集会での発表の機会をいただいたうえに、たくさんのご厚意をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。また、貴研究会がますますご発展されますことを、心からお祈り申し上げます。

全国菅江真澄研究集会における発表

（横手市立山内中学校勤務）

山内中学校三年の有志九名はは昨年九月、山内村でに開催された第十九回全国菅江真澄研究集会で「菅江真澄の歩いた山内」と題して発表を行い、参加者に大きな感動を与えていただきました。瀬田川芳子先生のご指導によるものです。その後、横手市の社会科研究発表会では最優秀賞を収めました。

なお、山内村は昨年十月一日に横手市、平鹿郡内の全町村が合併し、新しい横手市になりました。

祭り・行事における子どもの姿

―真澄の見た七夕行事を中心に―

水木孝子

はじめに

菅江真澄は《委寧能中路》《くめじのはし》などで七夕祭りを記録している。これまで私は祭り・年中行事に参加する子どもの姿を真澄の日記に求めてきた。たとえば、祭りの尸童（《かすむこまがた》、《はしわの若葉》における七歳男子とか）、あるいは伝承者としての子どもの姿を考察し、子どもの役割を主に小正月行事を通して論じてきた。今回は冬の小正月行事と一年を二分すると思われる夏に行われる「タナバタ」や「盆」行事について真澄がどのように記録しているか調べてみることにした。

七夕風景
（「松本市立博物館ニュース」一三二号より）

私が「タナバタ」行事に興味を持ったのは、真澄の日記に出てくる「たなばたにんぎょう」図の舞台が、私自身の亡き父の生まれ育った信州であり、また、このたなばた人形が、信州出身の熊谷元一作の絵本『たなばたまつり』（福音館書店）に描かれて現在にも伝わっていることに気づかされたことにもよっている。

星　合

真澄は次のように七夕の星祭の様子を《委寧能中路》に「星に手向けの文」として記している。

秋風やゝふいて、けふは、ふん月七日にぞなりぬ。われも此里にたびごろもきなれて、あひ見ぬ星合の空をあふがんことは、銀河に通ふ、うき木の亀にもたちへつべう。あくるを待て、うなひらちいさきかたしろのかしらに糸つけて軒にひきはへ、くれ行空をまつに、身のけそう、きよらによそひたちて、めのわらは、あまたむれつどひ、さゝらすりもてうたひごちねこよひや、ほそをいさめ奉るならん。ねぐらにかへる、むらがらすも声うちそへて、くれ行空にはねをならべて、橋をやつくる、とく〳〵といそぎわたりぬ。遠かたの高峰の、余波なう暮初て、星ひとつ見ゆるやとおもふを、山口に、あまの河波いまやたちわたりなん。もみぢのはしのかゝるうれしさと、世中のおもひにたとへて、あまつ空までおもひやりぬ。こよひやこゝら安河の、浪しづかの立かよひ、へだてぬなかや淵ならん。五百機のをり〳〵のあらぬ逢瀬は神代のむかしにや、つらくも契りおきけん、せちなるためしためしにこそあらめ。これや手酬の琴の音つれだに、ゆるしたまはぬ一とせのつらさ、ぬる夜の数やすくなかるらんなど、あまたゝびじして人々空のみあふぎ、こよひの手向にとて、から歌、やまとうたのこゝろつくして、此月のけふこよひのいまや、世中の人、をそりみかしこみ、ふたつ星ををがみたいまつるならはしと、あまの河なみ、ひんがしにたちながるゝ空まで、まどゐしたり。

また《委寧能中路》の異文二《科野路旅寝濃記》に、

ある家の軒にぬれたるを見れば、七日のゆふべ、星に手向しくさ〴〵のものなり、けたなる木をきだみ、目はなこしらへ、男女のかたしろのやうに作りて、かしらより糸つけてかけたり。としのためしにやありけん。

《くめじのはし》の七日の日記には、

女童、竹のさえだに糸引はへて、さゝやかなる男女のかたしろをつくりて、いくらともなうかけならべたるに、秋風、さと吹なびかいてけり。

なゆたけの葉風に男女郎花なびくやけふの手酬なるらん

このこと、さきの日記にもせしかど、ふたゝび其かたを左にあらはす。あひあひて、こよひ庚申にあたれば、

まれに逢夜もぬることは楢の葉のうらみて明ん星合の空

たなばたおどり（『委寧能中路』）

真澄はこれらの記録において、中国の星の伝説や乞巧奠の風俗を取り入れている。大人の風流遊び（旅先の人々と多くの七夕詩歌を

詠み交わしている）や子どもがたなばた人形飾りやたなばた踊りの遊びなど（筆者による傍線の部分）である。当時の都、鄙での七夕祭りの伝説・習俗であったと思われる。最近翻刻した池田東籬亭作、菱川清春画『銀河草紙』と照らし合わせてみると重なる部分が多く、東籬亭も『銀河草紙』の「笹ながしの篠」で描いている以下の一節と似ていることからもわかる。

今の世にならひに。七月五日又は六日に五色の染紙を色紙たにざくの形に切て。詩歌をかき。長き竹に結び付童ら市中をさゝげ歩行て遊戯をなし。六日の夕又は七日の朝。河流に投ずる事は、いはゆる星の手向に七尺の竹竿に願絲をかくるといへる本文にちかし。（中略）扨また三都および鄙にても手習ををしゆる家々には。此日門人をむかへ。手向の詩哥をかゝしめ、夕には花灯をともしつらねて踊を催ふす。これを七夕おどりといふ。そも〳〵筆道は諸術万芸のもとにして、衣食住もこの道なくてやはあるべき。また縫裁ををしゆる女師の家にても。同しく門人の女児をまねき。いろ〳〵の模様をを画きたる紙にて小かなる男女の衣服を縫て手向たてまつる。これも女子たらんもの、高きいやしき縫裁のわざ。巧ならずしては身を治る事かたし。

『日本伝奇伝説大事典』から「タナバタ」について真澄の描いた事象に関する項を引用すると、

中国伝説のたなばたは、牽牛・織女二星の夫婦星のうち、織女星が有楽にふけって、機織りのわざを怠ったため、天帝の怒りをうけ、牽牛星とひき離されてしまったが、のち許されて、年に一度七月七日の夜逢うことができるようになったとするものである。（中略）

『万葉集』では大伴氏一族などこの日の晩酒宴を催し、天の川をはさんで輝く夫婦星を眺めながら和歌を詠み合い、また平安朝では清少納言も、「七月七日は、曇りくらして、夕方は晴れたる空に、月いと明く星の数も見えたる」と『枕草子』に書きしるしている。これらから万葉びとや、王朝貴族たちの七夕の祭りは、中国伝来の「乞巧奠」（裁縫や染色などの手わざを巧といい、その上達を祈る祭り）という星祭りの伝説に倣うものものであったことがうかがわれる。

真澄も子どもたちの七夕祭りに興味を持って描き楽しんでいる様子が見てとれる。

たなばた人形・たなばたおどり

先に紹介した《委寧能中路》《科野路旅寝記》や《くめじのはし》の傍線の文章で、女童はかたしろを作って、何を願って星に手向けているのであろうか。かたしろを飾るのは、都から伝わる習俗として、裁縫や染色などの手わざが巧みになるように、衣装もちになれるようにと願っていたのではないか。

『古事類苑』歳時部十七［塩尻］の信濃松本に同様な記述があった。

亦語らく初秋七夕町々縄を以て家と家との軒にかけ路を横切てこれをはり、夫に木にて人形をいとおろそかに作り紙衣きせいくつとなく彼縄につりおく事城下皆おなしと、是亦何なる故にや国々節序の風俗いとめずらしき事多し。

真澄の描写は「塩尻」などの記述と一致しているように思う。『日本古典文学大辞典』によると、『塩尻』は天野信景によって、元禄十年（一六九七）から享保十八年（一七三三）頃までに執筆され、同時代および後世の学会に大きな影響を与えたとある。この書は真澄も承知していたように思うが、真澄が実際に見て、挿絵を描いていることで今に続いて松本などの人形飾りの伝承がわかるという点で評価できるのではないか。

しかし真澄はこの「かたしろ」や「たなばた踊り」を星への手向けとだけ記述し、「流す」行為については示唆していない。

けふも小雨そぼふるに、あまづゝみして出たつ。みちのかたはらの家の軒に、男女のかたしろ風にふかれたるは、七月の星に手向しを、そのまゝに、とりおさめざりけり。

なぜであろうか。

先に紹介した『銀河草紙』にも「縫裁をしゆる女師の家にても。同しく門人の女児をまねき。いろ〳〵の模様を画きたる紙にて小かなる男女の衣服を縫て手向たてまつる。」と記している。「乞巧奠」の織縫が巧みになるようにという七夕の星に願い、星に手向けるという行為が「流す」という行為に結びついたのであろうか、真澄はここでは描写はしていないが、この夏から秋にかけて行われる行事には穢れ・疫病などを何らかの方法で流すということを、七夕祭りとして記録しているのではないかと思われるので次で少し述べてみたい。

もう一つの七夕祭り・ねぶ流し

真澄は七夕祭り・盆行事・収穫の祈りとの習合したものを描いている。

《まきのあさつゆ》に子どもが参加している様子を拾い出してみると、

いまだくれはてぬに、わらは、むさかなゝさか（六尺、七尺）、あるは丈斗の棹のうれにいろ画かいたる、けたなる火ともしに七夕祭りとしるして、そが上に小笹薄などさしつかね手ごとにさげ持て、「ねぶたもながれよ、豆の葉もとゞまれ、芋がら〳〵」とはやし、つゞみ、笛に声どよむ斗ありくは、いでは（出羽）の国秋田の山賤のわらはは、麻苧のからをおのれ〳〵がとしの数に折て、藤豆といふ、野にはふ、かづらに巻ゆひにゆひて、この拠る一夜枕としてふし、あくる七日のあした、河にうちながすよりことおこりていへど、同じ国ながら久保田（秋田）の里などには、唯燈たかくさゝげありけど、さるをこなひもせざりけり。飽（秋）田郡にては、ねぶりながしといへども、こゝにては、ねぶたながしながしといふめる。はた、ねぶたにやあらんか、ねむたとかけるにやと人のあらがひ語るに、「をがら〳〵」とはやしもて行を蘆のすだれごしに見つつ、ねむたということをかくして

あすは又まれの一夜にふたりねむたなばたつめやうれしかるらん…

こよひも、火ともしかたかやかにふりかざして童のゝしりありけど、過し夜よりは、ひのかげおとりたり。此灯火のかげ、寺々のたか燈籠の松杉のうれにかゞやき、軒毎には、なぬか盆とて灯をかけたるに、蛍のひかり、夕月のおかしさとめでて小夜中までありて、戯れうたに、「ねぶたながし」てふことを…

《えぞのてぶり》続や《夷舎奴安装婢》（第一部）などにも記述がある。

このように真澄は「タナバタ」を牽牛・織姫の星祭と記し、「流し」の行事を盆踊りとし習合したものとして記録していることがわかる。「タナバタ」と「ねぶた流し」の関連については、「鹿島流し」（大曲市＝現大仙市で小学四年生を中心とした子どもたちがカシマさまを作り、川に流す）もあわせて考えなくてはいけないが次ぎの機会にゆずりたい。

前述『日本伝奇伝説大事典』には、盆踊りとの関連を次のように解説している。

一方我が国の民間における七夕の祭りは、中国式の七夕伝説とは異なり、必ずしも星祭りとか、手わざの上達を祈るばかりの行事ではなかった。（中略）わらで作った「七夕人形」や、あるいは七夕竹を立て、提灯を吊るし、注連縄を張った飾り物を乗せた「七夕舟」を川や海へ流す。それも前日の夜に立てて、七日の早朝に流す所も多く、東北の「ねぶた流し」等は特に有名である。これを要するに、わが国本来のたなばた祭りとは、夏と秋との季

節の行く合う時期に行われる季節祭なのであり、その上季節祭としての性格上、七月七日に先行する六月晦の「夏越しの祓え」の神事とも習合して、半年の罪穢れや疫病神（牛頭天王という）等を流し、退散させるための「行き合い祭り」としての性格が強い。すなわち夏が終わって秋が始まろうとする季節の交差期に、禊ぎをして身についた罪穢れを洗い流して新しい生活に入ろうとする信仰に基づいており、（中略）七夕の場合は盆という大きな祖霊祭を控えての、重要な禊ぎ祓えの行事であって、それも上弦の月の出る七日の夕べは、望月十五夜の祖霊祭の行われる潔斎の最初の日であったわけである。また七夕の祭りの竹は、穢れを流すための神聖な容器と信じられたからであり（後略）〔乗岡憲正〕

折口信夫が「たなばたと盆踊りと」項で「この二つの接近した年中行事については、かかねばならぬ事の多すぎる感がある」と前書きしてわが国固有のたなばた論をつぎのように展開している。

七月七日と禊ぎの日とが、意味一つに考へられてゐるやうである。又一般に、川海へ笹を流すのは、星祭りの条件のやうに考へられてゐるが、どんなものであろうか。又七日を中心として、流す物が色々ある。。七夕の風流、その代表物の様に思はれて居た梶の葉の歌なども、実は一種の撫で物で、之を以て身をこすって、穢れを移した訣であろう。（中略）つまり祓への人形と同じ意味のものである。梶の葉が、一方に色紙・短冊になって行く理由は訣る。あれは人形の変化したものなのだ。（中略）又、笹には、霊迎へ霊送りの用途があった。（中略）「柳田国男先生は、夙くから邑落生活に忌まれた睡魔を流し棄てるの事だ、と言ふ考へを持って居られる。（中略）此は、動かない説である。甚、推測がましい考えですまないが、ねむり（甜）と言う語には、撫で物のなでと対句的の意義が古くからあるので、どうも、草木の葉などが、人の身の穢れを吸収する事を言ふのではないか。と言ふ考へ方である。つまり睡魔を払ふと言ふ、何時の程からか、最も、大きな地方生活の戒心事になって行った今一つ以前に、何かありさうな気がする事である。

とこれまで、真澄が《まきのあさつゆ》で記録していることを受けて、柳田国男は「ねむた流し考」の何で眠気（睡魔）流しという一説を論じている考え方は一般的であるが、折口信夫の「撫でる」という説も捨てがたい。この観点から真澄の日記を今後さらに読み解いてみたい。

おわりに

子どもが行事に参加するのは、楽しく遊ぶという行為の中で社会の一員になっていくためのものであり、行事に参加する資格という点で論じることはできなかったが、小正月での子どもの姿と同時に、笹飾りや踊り、歌って歩くことに依代的な意義があると考えることができる材料は与えられたと思う。

（当研究会会員・箕面市）

引用・参考文献

一、『菅江真澄全集』第一巻、第二巻（未来社　一九七二）
二、『銀河草紙』池田東籬亭作、菱川清春画（天保六年）
三、「上方絵本『銀河草紙』の七夕習俗について―翻刻を中心に―」拙著（鼓・伝承児童文学・近代以前日本児童文学　研究と資料」第二号　梅花女子大学大学院　二〇〇六）
四、『日本伝奇伝説大事典』乾克巳ほか編（角川書店　一九八六）
五、『古事類苑』第一巻歳時部［塩尻］神社本庁編（吉川弘文館　第四版　一九六七）
六、『塩尻』（『日本随筆大成』第三期十巻吉川弘文館　一九三〇）
七、『折口信夫全集』第十巻（中央公論社　一九六六）
八、『日本古典文学大辞典』第二巻（岩波書店　一九八九）

男鹿五風に記された男鹿の植物

高橋一夫

一、男鹿五風

菅江真澄は文化元年（一八〇四）、中秋の名月を八竜湖（八郎潟）の湖上で眺めようと、八月十四日に久保田を発ち男鹿に向かった。十五夜には東湖八坂神社の神官鎌田利高と小舟で湖上に漕ぎ出し、夜を徹して月見を楽しんだ。その後、寒風山周辺や半島の南磯を巡り、一カ月余にわたり訪ね歩いた見聞を『男鹿の秋風』に著している。以後、真澄は男鹿の風物に魅せられるように、文化七年（一八一〇）から八年にかけて、男鹿の四季に身を置き、半島の自然や人々の暮らしを、『男鹿の春風』『男鹿の鈴風』『男鹿の島風』『男鹿の寒風』と男鹿のシリーズものを書き上げている。男鹿五風と呼ばれている著作の完成である。

『恩荷奴金風』—七二丁・三八図—文化元年七月～九月
　久保田より天王・船越をへて門前日積寺を訪れる。
『雄鹿の春風』—五五丁・三八図—文化七年三月～五月
　五城目谷地中より八郎潟沿いに能代を経て、浜づたいに男鹿半島の北磯に入り、真山・本山に至り北浦周辺を巡る。
『小鹿の鈴風』—三四丁・二七図—文化七年五月～六月
　畠（入道崎）よりエグリ舟（丸木舟）で水島にわたり、海草やアワビ・サザエなどの漁を見る。戸賀の遊女の話を聞く。
『牡鹿の嶋風』—四三丁・三〇図—文化七年七月十三日～十七日
　塩戸から丸木舟で、加茂・青砂を訪ね西海岸の島々を巡り、門前に上陸、日積寺に参り寺宝を見る。
『牡鹿の寒かぜ』—二七丁・一五図—文化七年七月～文化八年二月
　八月二五日島田で男鹿地震に遭う。宮沢で正月を迎え、なまはげなどの正月行事を見る。

前記の日記には面白い工夫がなされている。まず日記の名称が男鹿半島を象徴する〝風〟という文字で統一され、それぞれの季語が使われている。また男鹿の呼称も各日記の記述内容に応じて—恩荷、牡鹿、雄鹿、小鹿—と使い分けたり、万葉風の仮名を取り込んで金風をアキカゼと読ませる等洒落た試みがなされている。更に日記の構成も、序文、本文、図絵に相乗効果を期している。序文では、本文の読み所を簡記し、次号の予告をのせ（春風、鈴風、島風）、図絵では本丁の半数以上もの図絵を挿入し、読む者の視覚に訴えている。

勿論、これらの日記は、男鹿の古代の伝承から始まり、寺社の縁起や宝物、土着の人々の風俗習慣、暮らしぶり、半島の自然の佇まいなど、貴重な記録がなされている。

二、男鹿半島の植物

真澄は男鹿半島の植物について、男鹿五風に五十種程記している。その中で当時日本でも三カ所しか見られなかったといわれた、岩倉の八英の梅（『男鹿の秋風』）、男鹿独自の品種ゴゲサ（オガフウロ）（『男鹿の島風』）、脇本の細葉の椿（『男鹿の秋風』）黒崎の白蕨（『男鹿の鈴風』）、南磯のヤブツバキの群生（『男鹿の秋風』）など、植物

ごぐさ（オガフウロ）

学的に貴重な植物を記録している。

この半島での植物の種類の多さと生態の多様さは、半島が暖流と寒流の交差する日本海に突き出ている特種な地理的条件によるものであることは確かである。

故工藤茂美（元菅江真澄研究会理事）は『男鹿半島の花』の中で次のように述べられている。

・地質上の特質

半島には、海岸地帯・砂丘地・草原・山地など狭い面積の中に色々の地質があり、その地に適した植生が育つ。

・植物の特性

①対馬海流（暖流）とリマン海流（寒流）による、暖地性植物の北上と寒地性植物の南下による両性植物の混成。

②年中強風に晒される半島西海岸（入道崎草原・男鹿三山西斜面）の植物に、矮小化や奇形化が見られる一方、風当たりの少ない山懐や内陸部には大形の植生も見られる。

③塩水系と淡水系の植物が見られる。

菅江真澄は、今より自然環境の整った時代に男鹿の四季を楽しんでいる。

男鹿五風から、どんな植物相が見られるだろうか探ってみたい。

三、男鹿の桜がり

男鹿五風には、〝月見・花見・山登り〟の楽しみがしばしば登場する。『男鹿の春風』にも行く先々で、桜花を狩り暮らした記述が見られる。今ではあまり桜が見られなくなったが、当時は春の野山が桜の花で賑わった印象を受ける。

（1）浜辺の桜

文化七年三月真澄は能代から男鹿に入った。途中橋本、高屋、琴河などの桜を見、浜間口に至り、桜・桃・梨・杏の花が咲き競う美しい風景に出会う。浜には色々な貝や海草が多くあって、美しい桜貝やホンダワラやツルモなどに混じって見られるのも面白いとその様を歌に託している。

波の花ちりしくあとにさくら貝春の色見る浦のたのしさ

（2）里や山の桜

男鹿半島に入り真澄は宿にあっては、近くの里の桜を見、真山や本山に登っては、眼下に広がる桜を眺めた。真山の麓では落ちる滝の飛沫の中に見る花の佇まいが絶妙である。「真山よりおつ大滝といふあり。ふりあふぎ見れば、石梁の虹のごとくによこたふなかより落かかるさま、世にたとへつべうもあらぬあやしう面白の滝の、弓手馬手には、白き桜の八重も一重も、やや青葉さす木々の中に咲きまじりたり」と記している。

四、薬草類

本業である薬草類の記述は、『男鹿の春風』に数行あるのみである。『小野のふるさと』に記された様な薬草への関心は見られない。津軽藩での出来事の後遺症であったのだろうか。真山の帰り道に支連（オウレン）、甘墜（ナットウダイ）、少辛（ウスバサイシン）などを見つけたと記録している。

・支連（黄連・オウレン）

キンポウゲ科の多年草。日本の山地林下に自生。高さ約三〇㌢。早春、白色星形の萼が目立つ小花を開く。根は黄色の染料。また、根を干したものは健胃剤。近縁のシナオウレン、ミツバオウレンなどと同様薬用に栽培。（『広辞苑』）

・甘墜（夏灯台・ナットウダイ）

トウダイソウ科の多年草。山野に自生、茎の高さ三〇㌢。六月頃に褐紫色の花をつける。有害植物。根は利尿剤として用いる。

・少辛（ウスバサイシン）

ウマノスズグサ科の多年草。山地に自生。根や根茎を乾燥させて生薬。特有の辛味と芳香があり、咳・発汗・胸の痛みなどに用いる。

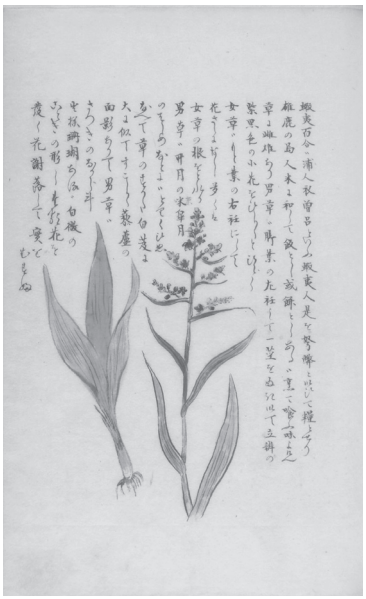
五、救荒植物

男鹿でも食用にする野草が見られる。雪国では貯蔵した食べ物を

食べつくし、春先が食料の欠乏期でもある。食用になる野草や山菜は大切な食料源となる。また何時襲って来るかも知れない。凶作・飢饉への保存食も蓄えねばならない。

救荒植物について、『男鹿の春風』に次のように紹介している。「野山には金帯花（別名がざ、タニウツギ・ハコネウツギ）というものをこぎとり、あるいは手折ってきて、一年の糧としている。（中略）またみな山に生える蝦夷百合（オオシュロソウ・アオヤギソウ）というものを掘ってきて、この根を餅にし、あるいは梗米の粉をまぜて蒸し、蝦夷百合飯（エゾロメシ）という」と記している。

この救荒植物については、後年、石川理紀之助により『庵の手鍋』『備荒適用』に、採集栽培、貯蔵法、食用法など研究成果が集大成されている。



蝦夷百合（『男鹿の鈴風』）

六、稲

稲田の少ない男鹿半島の堅田で稲作する北磯地区、引き水と鹿の害で苦闘しながら僅かの米を収穫する。そんな土地にも植えられる稲の種類の多さに驚かされる。『男鹿の鈴風』に「このあたりで中昔、つくった稲の名には、大迫（オオバサ）・総助・吉見稲（キチミシネ）・大黒・母躰（モタイ）などの種類があったが、近頃は近江早生・青柄・葉広・孫惣・善松・豊後・牛豊後・雑穀・短・徳稲（トクシネ）、（中略）もち稲には石割・黒髭・五三連（ゴザレ）（中略）などがある。」と多くの稲が男鹿にも伝えられた事が記されている。

米は当時貴重な食料で、祝祭日や盆・正月に飯や餅として供え、食された。真澄は文化八年の正月を宮沢で迎え、正月料理や神仏へのお供えなどについて『男鹿の寒風』に記している。

一月二日　神霊の飯（握り飯に箸を差したものに大根・滑菜をそえたものを箕の中に並べ仏前に捧げる。）と沓形の餅を供える。

三日　本山・真山のあぶら餅の神事に人々が出掛ける。

七日　たらの木の芽・海羅（フクロノリ）などを入れた味噌粥を食う。

十一日　朝早く起きて若餅をつき、舟霊祭（フナタママツリ）を祝う。

十四日　早朝また餅をつく。

十五日　汁種は、うち豆と蕨、さかなは鰰・ぶりこ・あえもの・塩かき鰯・小蝦のすし・またかんなぎのすしなど様々のものがある。夜、なまはげが入ってくる。

十六日　早朝白粥を食べる。去年からひしひし（醤味噌）のようなものを作っておいて、これをあぶった餅につけて食べている。

二月一日　昨日ついた餅を神仏に供える。

※十五日の正月料理については、男鹿温泉郷の雄山閣（当研究会会員山本次夫氏経営）で二〇〇年前と同じメニューで賞味できる。ただし事前に予約必要。

七、海草類

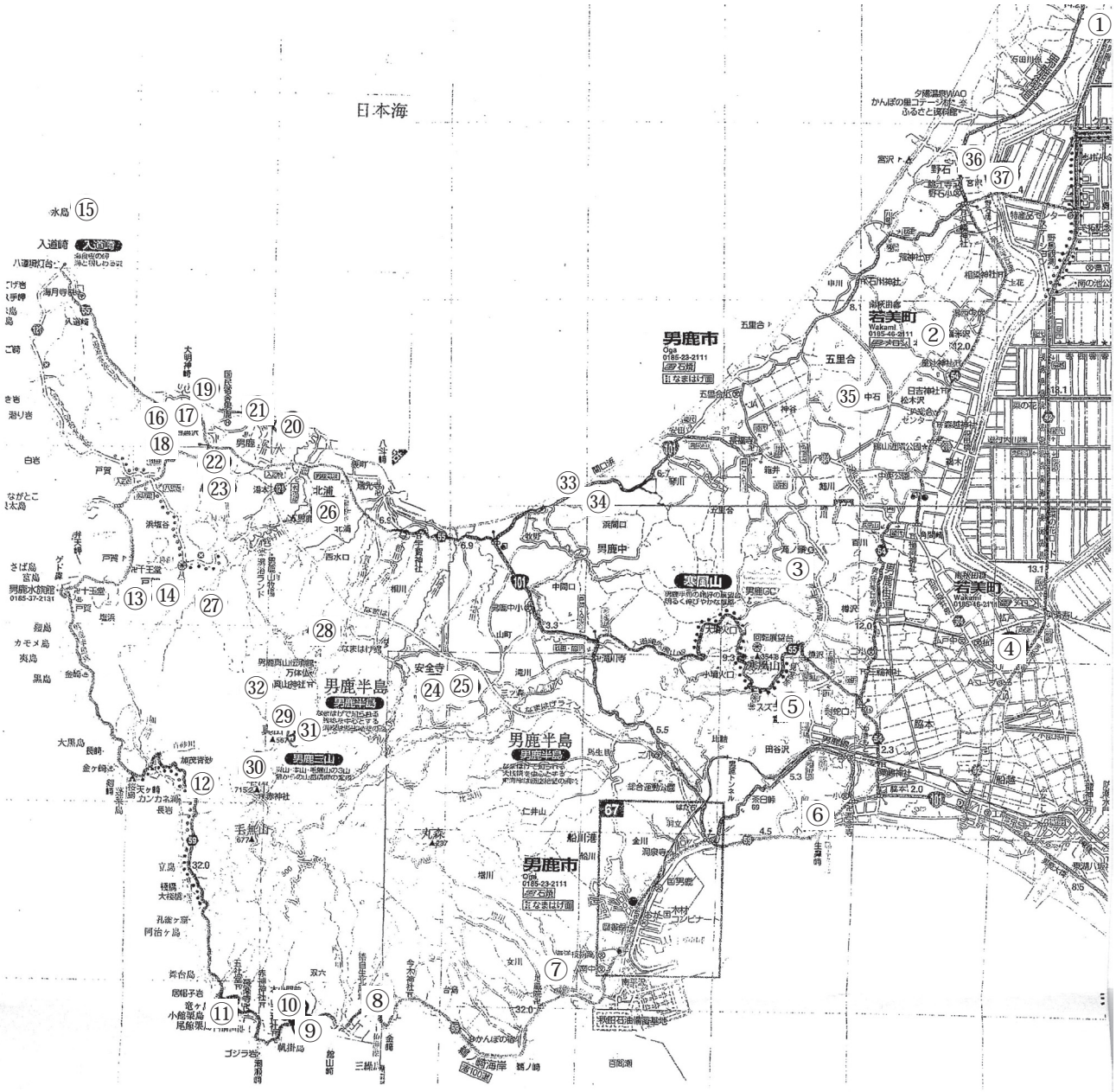
菅江真澄は男鹿半島の海草について、海浜の宿でふるまわれる汁の実や、女子供たちが海草を採る様子、案内人が話す海草のことなどを日記や図絵に記録している。

（1）黒紫菜（クロノリ・岩のり）　『男鹿の秋風』『男鹿の島風』

真澄は『男鹿の秋風』の中で、南磯の双六で御幣島のクロノリが

菅江真澄が記録した男鹿半島の植物地図

（次頁の番号で照合してください）



当地の名産として村長の手をへて藩主に献上した事を記し、『男鹿の島風』の中では門前近くの御幣島の図絵を描き、女の帯のような長い岩のりが採れるので帯島という名があり、訛って「おんべい島」（御幣島）と呼んでいると説明している。この岩のりは、採取の時期により寒のり（厳寒期）・くろのり（寒過ぎ）・あとのり（三月）と呼ばれている。

（2）蔓藻（ツルモ）と衣祗（イギス）　『男鹿の秋風』

真澄が南磯小浜の浦の村長の佐藤儀右衛門（藤原魚名卿の子孫と言われる）宅でもてなしを受けた味噌汁の具に入っていた。真澄は感謝の気持ちを二つの海草を折り込んだ和歌を詠んでいる。ツルモは別名アシカラマゲとも呼ばれ、細い紐状で中空、一～二メートル、主として味噌汁の具とされる。イギスはエゲスとも呼ばれ、夏場の海草同様、味噌汁の具のほかに塩漬や乾燥して保存する。

（3）莫名菜（ナノリソウ・ホンダワラ）　『男鹿の春風』

真澄は春爛漫の浜間口の海岸で村人が海草を採っているのを眺めた。ホンダワラはギバサとも呼ばれ、熱湯をとうして酢や醤油などで食べる春の海草である。

（4）擬海菜（コルモ・天草）　『男鹿の鈴風』

入道崎からえぐり舟で水島に渡った真澄は、島の岸部で多くの女たちが海草を採ったり、男たちが鮑やサザエなどを漁しているのを見学した。天草は夏場の海岸で比較的浅い所に生えている。真水や海草に入れ天日で干す。これを海草が白くなるまで繰り返す。

※（1）から（4）までの説明の資料は『男鹿半島』（男鹿市教育委員会編）による。　（当研究会会員・秋田市）

①ウツギ（五明光・秋風）
②桜（本内・秋風）
③藤・山吹・山葡萄・アケビ（滝の頭・秋風）
④杉の埋もれ木（払戸・秋風）
⑤八英の梅（岩倉・秋風）
⑥細葉の椿・松・杉・梅・桜（生鼻崎・秋風・寒風）
⑦榎（増川・秋風）
⑧ヤブツバキの群落（椿・秋風）
⑨クロノリ（小浜・秋風）
⑩松（門前・秋風）
⑪クロノリ（御幣島・島風）
⑫小豆・山ふき（加茂・島風）
⑬ゴグサ（オガフウロ）（塩戸・島風）
⑭コルモ・山葡萄・コンブ・ハマナス（塩戸・島風）
⑮ウミソーメン・テングサ（水島・鈴風）
⑯イタヤカエデ・榎・桜（北磯・鈴風）
⑰卯の花・笹竹・千島竹・竹の子（北磯・鈴風）
⑱稲（北磯・鈴風）
⑲白ワラビ（黒崎・鈴風）
⑳ウバユリ・蝦夷百合（野村・鈴風）
㉑萩・ススキ（湯の尻・鈴風）
㉒がざ（タニウツギ）・蝦夷百合（湯本・春風）
㉓ツクバネ・オオズミ（湯本・春風）
㉔桜・杉（安全寺・春風）
㉕駒つなぎの松（安全寺・寒風）
㉖桜・藤（北浦・春風）
㉗旭桜（大滝・春風）
㉘トウガラス・イバラ（真山・春風）
㉙オオレン・ナツトウダイ・ウスバサイシン（真山・春風）
㉚桜・笹竹（本山・春風）
㉛ムラサキヤシオツツジ（真山・春風）
㉜けやき（実は榧）（真山・春風）
㉝ナノリソ・ツルモ（浜間口・春風）
㉞桃・梨・杏・桜（浜間口・春風）
㉟山茶花（中石・寒風）㊱塩釜桜（宮沢・寒風）
㊲コルモ・フクロノリ・たらの芽（宮沢・寒風）
※（　）内の上部は地名、下部は五風を表す。

菅江真澄の記録した石碑

―多賀城碑と中別所の板碑群―

佐藤宗久

真澄が旅の中で、その著作に記録した石造物に、歴史上興味をひく人物名が散見されるが、その中から多賀城碑（多賀城市）と中別所（弘前市）の板碑群を取上げ、関連事項を検討してみた。

一、多賀城碑　重要文化財

平成十年（一九九八）六月指定

所在地　宮城県多賀城市浮島字宮前

日記仮題『はしわの若葉　続』に「浮島邑のさかひに、ちまたの仏の御堂見たらんがごとに、かわらふきたるあつまやに、こうしたてゝ、鎖ざせり」という記事があり、堂の中にある石碑の碑文を記録している。

『去京一千五百里、去蝦夷国界一百二十里、去常陸国界四百十二里、去下野国界二百七十四里、去靺鞨国界三千里、此城神亀元年歳次甲子按察使兼鎮守将軍従四位上、勲四等大野朝臣東人之置所也、天平宝宇六年歳次壬寅参議東海東山道節度使、四位上仁部省卿、兼按察使鎮守府将軍藤原恵美朝臣朝獦（アサカリ）修造也、天平宝字六年十一月一日』うえなるところには西といふ文字をすへて多賀城と書きたり。（『菅江真澄全集』十二巻六十一頁）

この碑文は次ぎにのせる多賀城碑の拓本との相違点は

①三行目「置所」は「所置」が正しい。

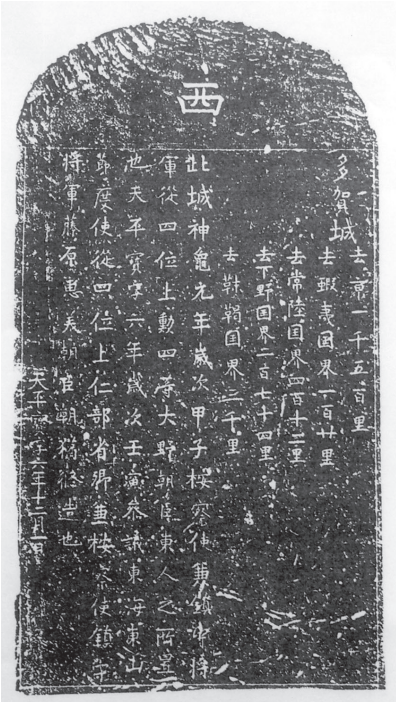
②四行目「天平宝宇」は「天平宝字」が正しい。

③五行目「鎮守府」は「鎮守」が正しい。碑文そのものの間違いか。

④六行目「六年十一月」は「六年十二月」が正しい。

の四カ所である。格子越えに書いたものではなく、知人である塩釜神社の神官藤塚知明から聞いたものであろう。知明は多賀城碑研究の権威であった。真澄が多賀城碑を記録した、七日後の八月二十五日、知明は別れにあたり真澄に「多賀城の瓦のやぶりたるを家づと」にと持たせたと記している。

多賀城碑覆堂



多賀城碑拓本

多賀城碑は、多賀城が神亀元年（七二四）に大野東人によって創建され、それを藤原朝獦が天平宝字六年（七六二）修造したことを朝獦自身が碑に刻んだものと解釈するのが一般的である。また、東人を顕彰した碑とも言われる。日本に現存するただ一つの円首碑であり、日本三古碑の一つでもある。

一方この碑は「壷の碑」（つぼのいしぶみ）とも呼ばれていた。十二世紀中頃の歌人西行の歌に「みちのくの奥床しくぞ思ほゆる壷のいしぶみそとの浜風」と詠み、おなじく藤原清輔は「いしぶみやつがろのをちにありときくえぞ世の中を思ひはなれぬ」とある。歌枕に詠まれた「壷の碑」と擬せられていたのである。江戸時代後期、仙台藩と南部藩の間で歌枕「壷の碑・末の松山・野田の玉川」などの所在地についての論争があったという。前記三カ所の歌枕の地は現在も岩手県と宮城県にそれぞれ現存する。

多賀城碑は新井白石の『同文通考』によると、万治・寛文（一六五八～一六七二）のころに宮城郡内から発見されたという。平安時代の記録『残篇風土記』に多賀城碑が多賀城内に埋まっているとの記録があることから、この発見は江戸時代の文人たちが、この地を訪れるきっかけとなった。

真澄がこの地を訪れたのは天明六年（一七八六）の夏である。仮題『はしわの若葉続』には前述の通り、碑文を克明に残しているが、碑文に残された大野東人、恵美朝獦という二人の人物、靺鞨国については後でふれる。

真澄は後年の地誌『月の出羽路仙北郡』七巻の中に旧大曲市西南部に坪立という地があり、壷の碑があるという話を聞いた。しかし、天明六年に壷の碑を見た体験から、「かの神亀元年（七二四）のゑりいし、陸奥国宮城郡に在る坪の碑は此地に在り。このあたりを坪街道といふといへり。此説（ものがたり）あれども諾（うけ）かたき事也」と即座に否定している。

真澄が訪れた九十七年前、元禄二年（一六八九）松尾芭蕉は門人曽良を連れ奥の細道の行脚の途中、この地を訪れ、『おくのほそ道』の一節に、

むかしよりよみ置ける哥枕、おほく語傳ふといへども、山崩川流て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び羇旅の労をわすれて泪も落るばかり也。

と記し、感動の極みだったようである。同じ年に井原西鶴があらわした『一目玉鉾』には壷の碑の絵が描かれている。

芭蕉が訪ねた二年後の元禄四年（一六九一）、水戸光圀は家臣丸山可澄を『大日本史』編纂事業のため、陸奥・出羽両国へ派遣した。名所、旧跡、寺社および在家の旧記を探し求めるためである。可澄はこの旅の途中壷の碑を訪ね、光圀に報告した。数年後光圀は仙台藩四代藩主伊達綱村に親書を送り、また佐々宗淳介三郎（水戸黄門漫遊記の助さんのモデル）を派遣して、この碑に覆屋を立てる計画を指導している。

碑文の靺鞨国は正しくは渤海国のこであり、旧高句麗人や靺鞨人によって建国され、当初震国（振国）と称した。西暦七一三年に渤海国となった。建国六九八～滅亡九二六年。渤海国からは神亀四年（七二七）を第一回とし延暦二十二年（九二二）まで三十四回の使節が来ている。

日記『男鹿の秋風』に「養老のとしの始しはす丁巳のとし（七二七）、渤海国の人、鐵利国の人、なべて一千百あまりも（中略）出羽の国に置て衣糧をたうばりて還し給ふとなん」（『菅江真澄全集』四巻三十一頁）と書き、『男鹿の寒風』には「元正天皇の御世養老のとし（七一七～七二四）ならむ、渤海国の人、鐵利のくにうどなンど…」とも記している。これは真澄の記憶違いである。『続日本紀』には「天平十八年（七四六）、是年渤海人及鐵利惣て一千一百余人、化を慕いて来朝す、出羽国に安置して衣粮を給して放還す」とある。このときの渤海、鐵利の人たちの来朝は、渤海の国王の国書を持参したものでなく、一般人の来航であったので、衣食を与えて送り返したものであろう。

天平宝字二年（七五八）、日本からの第三回目の遣渤海使、小野

朝臣田守の一行が渤海使二十三人を伴って帰国した。そのおり、多賀城碑を建立した恵美朝獦の父、藤原仲麻呂は権勢の絶頂期にあり、渤海使を田村第（自宅）に招き宴を開いている。

「大野東人」生年不明、天平十四年（七四二）没

律令国家の下、陸奥守・按察使・鎮守府将軍として、現在の東北地方の経営にあたった。在任期間、神亀元年～天平十一年（七二四～七三九）と考えられる。二代目陸奥守。神亀元年（七二四）蝦夷征伐で勲功をあげる。同年多賀城を創建したことが多賀城の碑文によって確認できる。天平五年（七三三）出羽柵を庄内平野から秋田村高清水の岡に移転したと思われる。天平九年多賀城と出羽柵（秋田城）を結ぶ道路開削を奏言して、自ら兵を率いて開発に尽力した。天平十一年（七三九）参議となる。翌年藤原広嗣の乱に際し大将軍となり、九州でこれを平定した。

秋田市寺内に蛭根山（現在の表記）という小高い岡がある。『寺内町誌』によると、聖武天皇の神亀四年（七二七）、勅使大野東人は秋田地方を巡撫することになり、この岡で休憩し、長旅の疲労のため睡気におさわれて仮眠した。然るところ夢ともなく、現れるともなく、衣冠の貴人が現れ「高清水の岡に城を移すべし、我は大彦命なり」と仰せられ、失せ給わった。この地の伝承であるが、天平五年（七三三）の事績と関連あるものと推定される。

「藤原恵美朝獦」生年不明天平宝字八年（七六四）没

藤原仲麻呂（藤原恵美押勝）の第三子。九代目陸奥守・按察使・鎮守府将軍を歴任し、天平宝字二年（七五八）雄勝城、桃生城の創建、天平宝字六年（七六二）多賀城の修造など奥羽政策に貢献する。同年参議となる。多賀城の碑を建立した日付が天平宝字六年十二月一日、参議に就任した日である。

父、太政大臣藤原仲麻呂が僧道鏡が孝謙天皇に重用されるのを除こうとして挙兵した藤原仲麻呂の乱に加担して斬殺された。

「藤原恵美押勝」慶雲三年（七〇六）～天平宝字八年（七六四）

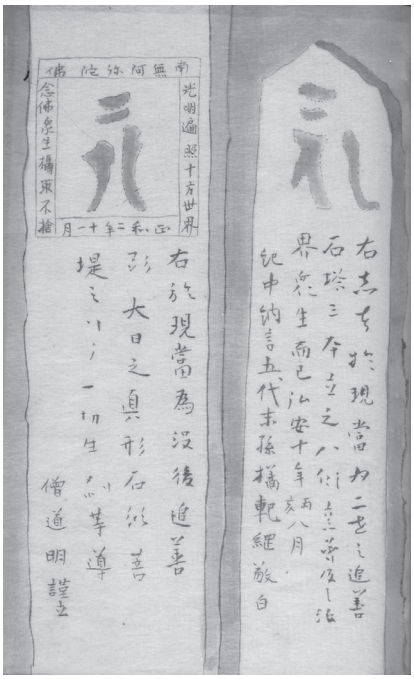
藤原鎌足の曾孫、藤原仲麻呂のこと。奈良時代の政治家。大仏造立の推進で政治的地位を高め、天平勝宝元年（七四九）大納言となる。天平宝字元年（七五七）、女婿の大炊王を淳仁天皇として即位させ、右大臣となる。ついで恵美押勝の氏名を賜り、太政大臣・正一位に進んだ。しかし、僧道鏡が孝謙上皇に重用されるのを除こうとして計画したが、それが漏れ、妻子とともに斬殺された。「藤原仲麻呂の乱」と呼ぶ。

二、中別所の板碑群（無指定）

所在地　青森県弘前市中別所葛野

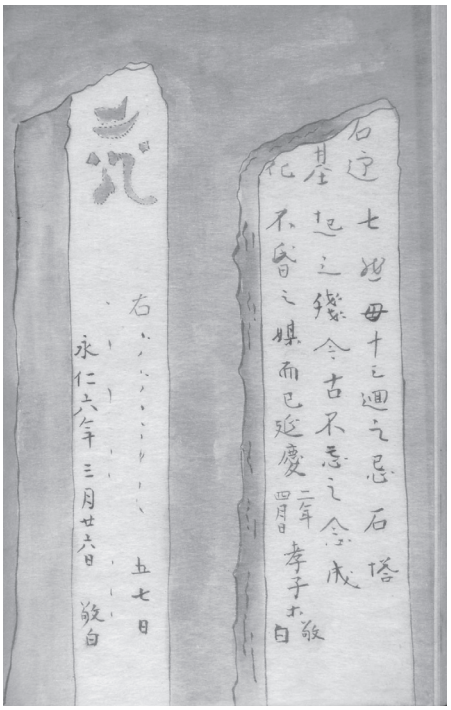
日記『津軽のおち』に中別所の板碑群の記述と図絵がみられる。

この中別所と宮館といふやかたありけるあはひに、五百とせのむかしにや、やごとなき人のこもりおはしたりしとおぼえて、館のあと、あるは、ふるき石ぶみありと聞て見まほしく至れば、石仏ケとといふ田のあぜ、畑中、木の下、草の中などに、石塔婆のこゝらたち、あるは、ふしまろび苺（苔）に埋れ、すれやれて文



宮館の古碑（『津軽のおち』）

字のすがたもやゝ見やらるゝは、いかなる君のこゝに栄えし、なきみあとならんと、そのつかしたる処に行て、「岩畦古碑空緑苔」と、すゝろになみだおちて、しらぬ弘安、正和、延慶、永仁、元応はよみもときたり。（『菅江真澄全集』三巻二三〇頁）



中別所の古碑（『津軽のおち』）

この記録は寛政九年（一七九七）五月に記されたものである。現在は俗に「公卿塚」と呼ばれている、対馬光春家横に十四基、その向い側のリンゴ園の中に俗称「石仏」に三十五基の板碑が集められている。真澄は図絵二枚に元応を除く弘安、正和、延慶、永仁の板碑を描いている。

正和二年（一三一三）の碑には源右氏、元応三年（一三二一）の碑には源祐氏、源泰氏の名が刻まれ、泰氏は「高梠郷主」ともあり、この一族は高杉村周辺に勢力をもった豪族と考えられる。公卿塚の紀年のわかるものは弘安十年（一二八七）、延慶二年（一三〇九）他二基であるが、弘安十年の碑には「紀中納言五代末孫、橘範綱が死後浄土に行くことを祈願した、逆修碑と思われる。範綱は秋田県の男鹿半島や秋田市内一円の地頭職だった橘公業と関連する人物との説もある・

石仏地区で注目されるのは、正応元年（一二八八）と記された碑

正応元年の碑（弘前市中別所）

である。この板碑（国指定重要美術品）は、真澄が訪ねたとき、埋もれていたものであろうか、真澄は記録することはなかった。源光氏という人が亡父の故西円禅師を弔うため、その三十五日忌に供養塔として建立したものである。その他の碑の大部分には種字のみを刻んだものが多く、金剛界大日如来をあらわす「バン」が圧倒的に多い。源光氏という名が藩主の菩提寺長勝寺の梵鐘にも刻まれている。

同じ日記『津軽のおち』五月二十日の項に、津軽藩藩主の菩提寺太平山長勝寺に詣でた記事があり、「嘉元の鐘」と呼ばれている梵鐘の銘文を次ぎのように記している。

「禅寺かまへとて、三十あまり三の寺軒をつらねたる。そのをさなる太平山長勝寺にまうでて、楼門のおほがねを見れば、「施銭檀那見阿弥陀仏沙弥道暁沙弥行也平高直安倍季盛少弥道性沙弥行心丹治宗員平経広源光氏僧證厳沙弥道法藤原宗直藤原宗氏沙弥覚性。勧進都寺僧良秀。大工大夫入道。皇帝万歳重臣千秋風調雨順

国泰民安嘉元三年丙午八月十五日大檀那相模州菩薩戒弟子崇演当寺住持伝法沙門徳熙謹書」とぞありける

とある。真澄は嘉元三年と記しているが誤記である。嘉元四年が正しい。三年は乙巳であり、嘉元四年は丙午、鐘にもその通り刻まれている。西暦では一三〇六年、鎌倉時代後期、執権北条師時の時代である。「大檀那…崇演」は元執権北条貞時の法名である。当時、津軽は北条氏の直轄地であった。貞時とこの地方の豪族がこの梵鐘を寄進したものであろう。

この中に「源光氏」の名が見えるが、この人物は前記石仏にある中別所の正応元年銘の板碑に刻まれた「源光氏」と同一人と推定される。なお、北条貞時は正安三年（一三〇一）に鎌倉円覚寺（臨済宗円覚寺派大本山）にも洪鐘を寄進しているが、銘文「皇帝万歳重臣千秋風調雨順国泰民安」が同じである。なお、円覚寺のそれは国宝、長勝寺（臨済宗）のそれは国・重要文化財である。因に嘉元の鐘は総高一〇三・五センチ口径七六・五センチ、円覚寺の洪鐘は総高二五九・〇センチ、口径一四二・〇センである。

（当研究会監事・秋田市）

嘉元の鐘（弘前市長勝寺）

参考文献

『青森県の歴史散歩』　山川出版社
『岩波日本史辞典』　岩波書店
『おくのほそ道』　杉浦正一郎校注　岩波書店
『鎌倉の寺小辞典』　かまくら春秋社
『菅江真澄全集』三・七・十二巻　内田武志編著　未来社
『対外関係史総合年表』　吉川弘文館
『多賀城碑その謎を解く』　雄山閣
『寺内町誌』　寺内史談会
『日本人名事典』　むさし書房
『日本史広辞典』　山川出版社
『日本渤海関係史の研究』　吉川弘文館
『日本渤海交渉史』　彩流社

真澄短信③

◇「真澄の足跡」　つちざき朝日

秋田市内の土崎・寺内・将軍野・飯島・外旭川地区に『朝日新聞』などを宅配しているASA土崎では毎週金曜日に『つちざき朝日』を発行しているが、標記記事を連載している。前記の地区内の真澄の足跡を取り上げているもので「さよむしろ稲荷」「香炉木橋」「湊城跡」が取り上げられた。亀井宥三会長、田口副会長が協力しているものです。

『久米路の橋』をたどる旅（三）

田村国竹

毎年続けている菅江真澄（白井秀雄）の足跡をたどる旅は、今回も日記『久米路の橋』の中に記されている「善光寺・戸隠の旅」を取り上げた。

平成十七年六月十九日、梅雨入りの心配をよそに、さわやかに晴れわたった青空のもと、会員二十名は塩尻市のバスを借りて長興寺（塩尻市洗馬元町）を出発した。

菅江真澄は、天明四年（一七八四）六月三十日、住み慣れた洗馬釜井庵を後に、みちのく・いでわへの旅に出た。松本から大町、松代そして長野へと向い、丹波島（長野市）に来て犀川を渡り、善光寺へと向かっている。

丹波島に来て犀川を渉れば（中略）政子の前の守り仏、刈萱堂になど、拝み過ぎて芋井の里になりて（中略）二十四日御堂に詣でぬ。（『久米路の橋』以下同じ）

私達は中央道長野ＩＣ高速道を下り、一路刈萱堂へと向かう。長野市の中心街でもあり、旧北國街道でもある北石堂町は、善光寺の門前町でもある。この北石堂町に建てられている刈萱堂は、大勢の参拝者でにぎわっていた。

この刈萱堂は、刈萱山西光寺ともいわれ刈萱上人石堂丸の旧跡でもある。本尊は鎌倉時代の親子地蔵で、境内には刈萱上人石堂丸の塚がある。真澄はこの寺を訪れた後、医師山本晴慎を訪ねて、語り合い次の日善光寺に参拝する。

ここは水内郡柳原庄芋井郷。善光寺は天智天皇三年甲子に建て、本堂に四つの名あり。定額山善光寺、南命山無量寺（中略）。しばし隈々、拝みめぐれば、来迎の松というあり。ここに刈萱道心の庵して（中略）行える処という。

西光寺よりバスで十分、善光寺は参拝客であふれていた。山門には真澄の云う「善光寺」という額が現在でも掲げられ、真澄はここで、「昨日施餓鬼があって、凶作の年、飢え死にした者の霊をとむらい、仮屋を建てて食べ物をふるまい、飢えた者の数は二千余人もおり、暑さに耐えず死んでいく者は六十人余もあった。」と当時の悲残な様子を書き記している。尚現在はこの境内には、来迎の松や刈萱堂は敷地内には無く、善光寺の西五百㍍程の山裾に、道心開山の菩提寺往生寺が建てられていた。

戸隠山に登りてんとて、善光寺の後よりわけて、野行山路に入て、御歳宮（八幡宮）を右に見て湯福の社といふに鳥居あり。（中略）荒安（長野市）といふ処に休らひて、四方やもを見れば、遠のやま〳〵波か鱗とかさなれり。大窪という処の館に水こひて飲みていと良けんといえば、家の主も童も口をそろえて、この山は水いとよし（中略）またも飲みねとすすむ。

バスの車窓から、善光寺の西側にある八幡宮、湯福神社を右に見て、道巾の狭い幾重にも折れ曲がったバードライン、七曲りへと進む。道は急で、時おり行き交うバスに肝を冷やしながら、昔はもっとひどかったであろう悪路を思い浮かべながら峠へと進む。

景色は急に開けて、はるか前方に雪をかぶった北アルプスの山々が幾重にも重なり合っている。こゝが荒安であり、真澄は「遠い山々が、波か鱗のように重なって見えた。」と記していて、今も昔も変わらない自然の美しさに驚かされる。

バスは荒安からおよそ十分、谷間の日当たりのよい大窪に出る。食堂らしき建物が二軒ほど建てられていて、戸隠へと向かう客が休憩していた。「主人も子どもも口をそろえて勧めてくれた。」と云う

清水は、現在も沢から涌き出ていて、飲料水として利用されているようでもあった。

日の御子のふた桜とて二本ある桜あり。この樹、春ごとに花咲かねど、年ふり名ある木也とて、人のあないして教ゆ。

バスは大窪から約十五分、戸隠集落へと入る。坂道の両側に商店や宿坊らしき建物が並ぶ中を、坂の上に宝光社の社が見えて来る。そこを過ぎ、真澄が次の日訪れたという日の御子社にバスを止める。日の御子社は、天鈿女命を祀ってあり、古びた社殿は訪れる人もなく閑散としていた。この社の東側に「春ごとに花は咲かないが、名木であると教えてもらった。」という桜の木の二世「西行桜」が植えられており、昔の面影を偲ばせてくれていた。

中院に詣でぬ。ここにあがめて思兼命を祀る。

日の御子社よりバスで五分、中院（戸隠神社中社）は、境内、石段の下にほぼ正三角形に杉が植えられ、樹齢およそ八百年の威風を残し、参拝者は、熱心にその一つ一つに見入っていた。祭神は八意思兼命である。

この御前を左にのぼれば、比丘尼石、観音ぼさちの堂あり。麓より女、この堂を限りに詣でてぞ、みないにける。宝永の頃、長明という出家の入にし火定の跡とて、石ぶみに彫りたる。児塚といえるところも過ぎて、奥院に詣でんとて、御坂のぼる。

中社から徒歩で五分「麓からのぼって来た女達は、この堂を限りに皆帰って行った。」という女人堂跡は、今も石碑が残されていて、真澄もこの道を歩いたと思われる旧道をのぼると「こゝから無理に奥へ入ろうとした女が石になった。」という比丘尼石が、今も残されていた。

更にそこよりバスで五分、平安時代に釈長明という勇猛熱烈な行者が兜率天に昇ると称して、みずから身を火中に投じて入定した跡という石碑が建てられており、その北下りの道を少し行くと、右側に三つの石塔がひっそりと建ち、中央の板碑には「児」の文字がしっかりと刻まれていた。

奥院にまうでんとて御坂のぼれば、いや高きいはほに大なる御社を造そえて、ひろ前に清らをつくしたるは、かしこくも手力雄命のおましますに、亀のすがたの文のある玉だれの（中略）ぬかづき奉る。

真澄の訪れたという奥の院は、戸隠山の大岸壁の直下にあり、稚児の碑よりおよそ四キロメートルも奥に入ったところに建てられており、バスは大鳥居より進入禁止とされている。私達は奥社まで行くことを断念し、大鳥居前で参拝した。真澄は奥社まで足をのばし、戸隠山の高峰を振りあおぎながら、荒倉山に伝わる「紅葉と妖鬼」の伝説を日記にくわしく記している。

此裏山に涌の池というありて、其ほとりにたちてわくわくと呼ば、朽木の水底にしずみあるが、うごもち（土鼠）ゆらゆらと涌出る処もあり、あない（案内）といきね。

大鳥居より念仏池へとバスを進める。バスでおよそ五分、道より十メートルほど入った草原の中に、直径十二、三メートルの念仏池があった。池の底は浅く、何カ所からか湧水が涌き出ていて、真澄が云う「わくわく」と云う表現がぴったりするように底砂に小さな円形を描きながら涌き出していた。

バスは、真澄が「宝光院の社には表晴命を祀る。」とだけ記してある宝光社へと向い、急な石段の下から高い社を見上げながら詣でて戸隠を後にした。

上松という処の山中に到れば、石悩油（クサウズ）の涌づるをくむ井、川をへだてて二までならびたり。このあぶらは、越後路の臭水（石油）に凡似たりけるよしをいへり。かた岨のいと高き処に、不落堂として斐陀（飛騨）のたくみらが一夜のまに柱一もとにて建てたるに、薬師ぶちをおき奉るといふ。

戸隠神社での記念撮影

真澄がわざわざ山中を訪ねて見たという「石悩油（クサウズ）」を汲み取った場所は浅川（長野市）の川辺より二百メートル程上がった東斜面に、その址を残していた。復元された小さな小屋の中には、戦前まで使われていたと思われる掘削用のモーターが保存されていた。そして、そこから見上げると、すぐ西山頂付近に飛騨のたくみ達が一夜にして建てたという薬師堂が木々の間からその姿を見せていて、断崖の壁に添うようにどっしりとした柱が建てられていた。

バスはここを最後に一路帰途へと向かう。

真澄が旅の中でひたすら描写し続けたその土地、その場所での故事来歴、風物、ありのままの生活の様子、そして観察の鋭さに、その足跡をたどってみて、改めて驚き、考えさせられた旅でもあった。

（当研究会会員・釜井庵と菅江真澄研究会会長・塩尻市）

漂泊の旅人菅江真澄の実像

―その青春時代を中心に―

佐藤尚武

一、学びのはじめ

真澄は三河国吉田（愛知県豊橋市）に住み、十代前半から向学心が強く、「学びの親」と呼んだ吉田の国学者植田義方から国学と和歌のてほどきをうけた。少年の頃の早い時期に乙見（愛知県岡崎市）に移っていたため、後年には、勉学に励んだ乙見を故郷と認識していたようである。真澄の本名は「白井英二」とされるが、この頃は、知之、秀超、白超などと名乗っていた。

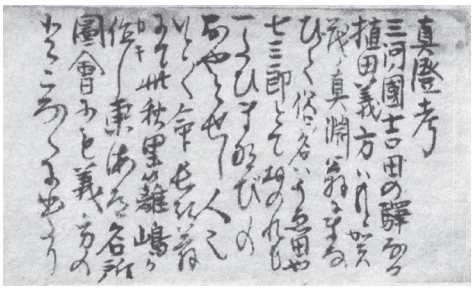
義方は江戸時代中期の国学者賀茂真淵（一六九七～一七六九）に学んでいる。義方は真淵の親戚でもあり、真澄は間接的ではあるが、真淵の影響を受けたわけである。義方の子孫である植田哲郎家には真淵の著書『国風俗』の書写本が残されている。当時の名乗り「白井秀超」が写本したものである。この冊子の末尾には秀超によって、次の書き込みがされている。

右東遊風俗は先師賀茂県主所蔵自筆書入之本也課男健蔵
書写之校合畢
安永五年丙申七月三日　本居　宣長
同六年酉七月廿二日　田中道麻呂
同七年戊戌八月十八日　白井　秀超

そして貼紙があり、別人の筆により「白井幾代二ノ書也国風俗」と記されている。白井幾代二という人物は真澄の伯父であろうなどとの説があったが、幾代二も真澄の別名であることが『内山真龍日記』によって確認されてる。

真淵の自筆本を宣長の長男健蔵が写し、それを著名な国学者田中道麻呂が写本し、それをさらに二十四歳の真澄が写本したのである。真淵は明和六年（一七六九）に死去している、真澄十六歳の時であった。真澄と真淵の直接の出会いがあったであろうか。

文化二年（一八〇五）三月ころに発行された秋里籬嶋作の『木曽路名所図絵』がある。この三巻「寝覚の床」の条に植田義方の漢詩が記されており、その欄外に、真澄の書き入れがあった。これは昭和十年ころに能代市で発見されたものである。



真澄考（白坂淳太郎旧蔵）

真澄考

三河国吉田の駅なる植田義方は、もと賀茂真淵翁にまなびて俗名はうゑ田や七三郎とておのれも一たびまなびのおやとせし人也。いといと命長き翁にて、此秋里籬嶋が作し東海道名所図絵にも義方のところどころに出たり。

『雪の出羽路平鹿郡』二巻に面白い記事がある。「沼館ノ名産」として「新町の彦兵衛か蕎麦素は阿仁の銀山の産に似て、木曽の寝覚の床の味にやゝ似たり」と記している。真澄と義方は二人で木曽路を歩き、蕎麦を食したことがあったのだろうか。

真淵の学問は、古代日本の文献を考証し、古代にさかのぼって万葉風の自然と真実を尊ぶという「古道古意」の国学の追及を目的としたものであったといわれている。

旅行記『旅のなぐさ』（『西帰』ともいう）の中から自然の魅力と、そこに育まれた古くからの文化を求めた癒しの旅をしている。主たる処は山科と比叡山（京都市）、近江の草津（滋賀県）、美濃路（岐阜県）、伊勢（三重県）、また『岡部日記』（『東帰』ともいう）には、伊豆と遠江（静岡県）、富士川（山梨・静岡県）を歩いているが、沿岸の屏風岩の景勝地を楽しんだのか、あるいは駿河賀島の辺で富士川をはさんでの源平両軍の激戦を偲んだのではと推測される。

一方、万葉集の研究にあたって、万葉評論史上不滅の位置を占めたといわれる『万葉集考』（一七六〇）にみられるといわれる。また万葉調歌人として知られている。本誌第五十五号巻頭論文「菅江真澄と万葉集」があるが、森山弘毅氏はこの論文の中に、真澄は自分の和歌の中にも万葉集を重ね、あるいは万葉語を潜ませて楽しんでいるかに見える、そして万葉集の中から一三〇首の歌を引用しているとしている。

二、薬草園時代

真澄は童の頃の学びに加え、尾張を中心に旅を続けていたようである。十七歳になった明和七年（一七七〇）には三河の家族から離れて名古屋に出ている。真澄の若き日の姿を追ってみよう。随筆集『筆のまにまに』六巻「さきぎぬ」の項に、「おのれ童のむかし、尾張ノ国に在りて名古屋の橘町という処の古物商にいた」と記している。真澄は尾張藩駿河町（名古屋市）にある尾張藩薬草園で、藩のご殿医浅井図南の門に入り、本草学と医学の修得に努めていた。天明五年（一七八五）七月、真澄は秋田の俳人吉川五明を訪問した際、「尾張駿河町の医師」と名乗っている。

本草学について述べてみよう。我が国では古くから中国から医学を移入していた。本草学もこの時期に移入したものであった。奈良時代には中国で作られた『新修本草』が読まれていて、本文二十一巻の内、十巻が正倉院に所蔵されているといわれる。中国・南蛮との貿易が盛んになるにつれ、産物と薬種の知識が必要となって、研究が盛んになった。

各地に薬草園ができたが、尾張藩の薬草園は我が国の最高水準を誇っていたといわれる。真澄はこの薬草園で薬効の実証実験をしていたと思われる。そして薬草と木石を求めて大和（奈良県）・近江（滋賀県）・駿河（静岡県）・甲斐（山梨県）などを巡り、旅と山登りを

楽しんでいる。二十歳の安永二年（一七七三）七月には信濃を訪ね、姨捨山（長野県更埴市）に登って、月見をしている。二度目の登山が十年後の天明三年（一七八三）八月、本洗馬（長野県塩尻市）に滞在していた時である。日記『わがこころ』には十五日の朝の内に登山し、夕刻には再度登り名月を眺めて歌を詠んだことを記している。

このほか、伊勢（三重県）・美濃（岐阜県）・若狭（福井県）・河内（大阪府）などを歩いている。富士山に登ったことが『えぞのてぶり』に、吉野山の桜を見て、大峰山に登って修験道を学んだことが日記『筆の山口』に見える。

二十七歳になった真澄は安永九年（一七八〇）五月、真澄は漢学者・画人であり、本草に才のあった丹羽嘉言とともに伊吹山（滋賀県・岐阜県）に登って薬草を採取している。嘉言の著作『伊吹遊草』『湖東遊記』の中には「白超」という人物が同行しているが、この人物が真澄であろう。真澄の随筆集『ふでのまにまに』九巻「柏原が太刀」にも伊吹山登山のことが記されている。

明和七年（一七七〇）から安永九年（一七八〇）までの十年は薬草園での修行と山野を巡り実地に薬草を求める作業に携わり、本草学の奥義を深めた学びの期間であった。

後年の日記『筆の山口』の中に「真澄考ふに、おのれ三河ノ国人ながら、いといとわかかりしころは尾張ノ国にのみ在りて、おのが国の事はうとけれど、をさなきより聞なれて知る事多し」と記しており、この間の事情を語っている。

三、信濃からの旅

国学、和歌、本草の知識を身につけた真澄は、天明三年（一七八三）二月末、故郷三河を出発し、信濃の下伊那郡に入った。真澄三十歳、この時から白井秀雄を名乗ることになる。日記『伊那の中路』の中に飯田（長野県飯田市）の風越山が桜の名所であることを知り桜を眺め、

風越の山は名のみぞをさまれる御代の春とて花の静けさ

の歌をそえている。季節は桜から「春もみじ」の心安らぐ風景の変わろうとしていた。この時期の三河と信濃の社会情勢は、前年春以降の洪水による農作物の被害に加え、七月七日の浅間山の大噴火の影響から凶作となって飢饉が始まっていた。農民の生活を圧迫する天災に加え、苛酷な年貢取り立てがはじまり、それに耐え切れない農民は、北信濃と上上野（群馬県）で打ちこわしとなって、大規模な農民一揆となっていた。

真澄の旅の目的は何であったのか。まず真澄の人物像について考えて見たい。真澄の私生活はまことに質素であった。付き合いでは相手を自分の上におく、食物には不平をいわないで感謝する。

色気には無関心であったと語るむきもあるが、日記の中からは歌を詠む才女からは魅力のある男性として慕われていた。好意を示されている一例をあげる。後年、松前藩の福山に滞在中には藩関係者と歌会がしばしばもたれている。真澄はこの歌会通じて、八代藩主資広の側室松前文子と親密な関係にあったことが知られている。文

文子が真澄に贈ったリテンギ
《えみしのさえき》

子は真澄にアイヌが作ったリテンギ（コダシ）を贈り、蝦夷地への旅の出発には餞別の歌を贈っている。文政六年（一八二三）元旦の「御霊祀り」には「蠣崎家文子御方神霊」と『笹ノ屋春の日記』に記し、ありし日を偲んでいる。文子の方は生涯忘れ難い女性であったと思われる。

真澄は生涯妻を娶らず、また家庭を構えることもなかった。真澄の旅の目的としては悲恋説や家出説が語られている。最初の旅日記『伊那の中路』には「いそのかみ、ふるきかんみやしろををがみめぐり…」と神社参拝と記しているが、真の目的は少年の頃に育まれた「古代を探求する」という賀茂真淵と植田義方の教えを実行する旅であったと思われる。他からの干渉を受けることなく自由に未知の国の美しい自然の魅力と、そこに育まれた風俗と文化、人間のいとなみをとらえ、それを旅日記に寄せる、これが生涯にわたる漂泊の旅ではなかったかと思われる。

文政十二年（一八二九）、真澄は生涯最後の元旦を野田（秋田県大仙市豊川）で迎え、

いつ万代も筆の命も長らへて書きながさばや水茎のあと

と詠んでいる。真澄の気迫と旅日記に寄せる執念がうかがわれる。

四、本洗馬の釜井庵

天明三年（一七八三）三月、真澄が最初に足を止めたのが、本洗馬（長野県塩尻市）であった。ここを中心に翌年六月までほぼ一年四か月間を過ごすことになる。真澄は十年前の安永二年（一七七三）にもこの地を訪れており、友人知人が多かった。そして親交のあった長興寺（曹洞宗）の洞月和尚から和歌の指導を受けるという目的があった。そしてこの地の医師可児永通と知り合うことになる。永通は美濃の人であるが、熊谷家の婿養子となり、一代かぎり可児姓を名乗ったといわれる。熊谷家は代々医者として今に続いている。

真澄が宿としたのは、釜井山の麓にある釜井庵であった。近くには墓地があり、夜には山の木立が風に鳴って淋しい土地であった。夜には故郷の父母を思ったことが、熊谷家に残された遺稿から発見されたが、次の歌からも真澄の心情を知ることができる。

あけにけりいまたか宿もとりがなく吾妻より来る春のひかりに

たえすたた袖こそぬるれ恋艸の露のなさけも人はしらすて

と詠んでいる。

七夕の釜井庵《伊那の中路》

真澄が本洗馬に一年有余滞在したおりに綴られた著作の中に『雄甫詠草』がある。その中に初めて自分の身の上を歌に託したものがある。

すゑいかに身の行ひのあだなれやおもひと思ひせしとせしこと

過去の出来ごとや行動の反省がこめられている。

五月二十五日、長興寺に歌人洞月和尚を訪ねて、十年ぶりの再会を喜び歌の応答をしている。洞月和尚の紹介により、医師可児永通や手習師匠三溝政員らとの親交が始まった。

日記『伊那の中路』には七月十三日夜の盆踊りが記されている。手ごとに松明を持って門火を焚いていた。真澄は家に入って御霊祀りをした。今は世にない母と弟の面影が浮かび、涙を流したと記している。

本洗馬の盆踊り《伊那の中路》

五、さらなる北への旅立ち

天明四年（一七八四）六月三十日、真澄は一年有余を暮らした本洗馬を旅立とうとした時、洞月和尚から『和歌秘伝書』を譲り受けた。遠い見知らぬ土地の旅を少しでも楽にしようという洞月和尚の気遣いであった。真澄は親しくしてくれた多くの人たちに送られて北をめざして旅立ったのである。

真澄は童の頃から青年期にかけて「冷泉流」の和歌を学んでいた。譲り受けた和歌秘伝書は「二条流」のもので、江戸初期の歌人烏丸光広（一五七九～一六三八）に始まるものであった。真澄が学んだ和歌の知識が後年の旅の中で生かされている。天明五年（一七八五）八月の日記『外が浜風』の中には、津軽（青森県）に入り、鰺ヶ沢から床前の野原に来ると餓死者の白骨が道の傍らに積み重なれているのを見て、集落には立ち入られないと思っていたが、弘前では土地の歌人から歓待されたことを記している。

また、この年十月には前沢（岩手県前沢町）の鈴木常雄を訪ねている。日記『けふのせばのの』は十月一日で終わっているが、鈴木常雄が記した『楽山亭日記』には、二人が意気投合し、歌を詠みあったことが記されている。真澄と常雄がのちのちまでゆかしい交友を続けることができ、鈴木家の雅客として厚遇されるのも歌の力であったといえる。

親交を深めた三溝政員は信濃路を三日間にわたって同行し見送ってくれた。日記『くめじの橋』には六月三十日、本洗馬を出発し越後路を経て奥羽志すと記している。

この時期の旅の跡をみてみよう。七月四日、松本に滞在して七夕を見る、二十日、久米路の橋を渡る、二十四日、善光寺に参詣、三十日には越後（新潟県）に入り、新井（新井市）の宿に宿泊したと記している。

真澄の一人旅は、一カ月余かけて越後を縦断し、九月十日には出羽路鼠が関（山形県鶴岡市）に入った。鶴岡、酒田を経て、三崎峠を越えて秋田に入り、小砂川（にかほ市象潟）に入ったのは九月二十五日であった。その後、本荘、矢島（以上由利本荘市）、西馬音内（羽後町）を経て柳田（湯沢市）で越年した。『秋田のかりね』の旅である。

翌天明五年（一七八五）には蝦夷地へ渡るべく津軽（青森県）の青森湊までいったがはたせず南下し、大館に入った。『外が浜風』の旅である。真澄はさらに南下し、平泉の近く前沢の鈴木家を根拠地とし、現在の岩手、宮城、福島の三県をほぼ三年間にわたって旅を重ね、天明八年（一七八八）七月には津軽半島の宇鉄の浜から、未知の世界蝦夷地に渡った。四年後の寛政四年（一七九二）十月には福山（北海道松前町）から当時南部藩領であった下北半島奥戸（青森県大間町）に渡り、寛政七年（一七九五）三月には津軽藩領内に移り、寛政九年（一七九七）七月以降、二年間に渡り、弘前藩の採薬に携わり、享和元年（一八〇一）十一月には深浦（青森県深浦町）から秋田領土崎湊に到着した。真澄は四十八歳になっていた。

文政十二年（一八二九）七月十九日、真澄は取材途中、仙北の地

で七十六歳で帰らぬ人となった。故郷三河を出て延四十七年間の旅であった。秋田領内の旅も延二十九年におよんでいた。

この間、真澄は日記・地誌・随筆・図絵など二百冊以上にもおよぶ著作を残した。その内、藩校明徳館に献納されたいわゆる明徳館本七十七冊十二帖は重要文化財に指定されている。

六、夢枕の父母

真澄が若い頃から父母を慕い、兄弟思いであったことは、旅日記の中からも知る事ができる。その中から過ぎ去りし日の思い出を載せているのでその事例をあげてみよう。

日記『くめじの橋』の中に本洗馬を出発するおり、三溝政員の年老いた母に「また尋ねます」と別れの挨拶をした。老母は涙を流しながら「私は年をとって夕べの命も頼みにならない。今日が最後のお別れかもしれない…長い旅を早く終わって父や母にお会いになってほしい、ご両親もさぞ心配しているでしょう」とわが子を思うようにいうので、「わがははの袖もち撫て我からに哭しこゝろをわすれえぬかも」と詠み、いよいよ親の住む国が恋しく、どのような運命で、このような人の親のこころは、子を深く思うのであろうか、と記している。

天明六年（一七八六）四月、胆沢村（岩手県胆沢町）に滞在していたとき、学びの親と呼んだ植田義方から返信が届いた。日記『はしわの若葉』の中に、

よんべより雨いたく降りぬ。蓑笠着たる人こはづくり、やをらふみもて来るを見れば、この春平泉の毛越寺の衆徒皇都に登りけるに、あが父母の国吉田ノうまやなる植田義方のもとへ文通あつらへしかば、その書の返事来るをくり返しまき返し見て、

うれしさに袖こそぬらせ事なしとむすひて送る露の玉づさ

と記し、その喜びと親を慕う気持ちがよくあらわれている。

寛政五年（一七九三）十一月、下北半島田名部（青森県むつ市）から砂小又（東通村）までの道中で、春に泊まったことのある家に再び宿を求めた。この宿の老婆が真澄を諭した。日記『おぶちの牧』の記録、

お前には親があるのか、もし親があらば早くその国に帰るがよい、自分にもたくさん子供があるが、山に入って木こりをしている者は、寒い日には朝夕どうしているだろうかと気がかりなことだ、そなたの親たちもさぞ待っていることだろうに…、

と言われて、真澄は勝手な自分の行動をひどく恥入って答える言葉もなかった。

父母はなきかとぞとふ世にまさば遠くあそばぬをしへおもへど

と詠んでいる。

寛政六年（一七九四）の正月を田名部で迎えた。日記『奥のてぶり』の中に二月十六日の夜、京都のどこかの家で、長旅から帰った自分が、久しぶりに父母と対面した夢を見た。鳥の声に夢がやぶれ、鴉のもろごえと、軒ばの雀の声のみが残った、と記し、

なれもさぞしたふやすゞめむらがらすこは父となきこは母となく

と詠んでいる。

真澄は長い旅の中で、つきることのない故郷の父母を慕い続けた熱い心が伝わってくる。

（当研究会会員・秋田市）

参考文献

『秋田人名大事典』　秋田魁新報社
『伊頭園茶話』　石井忠行著（『新秋田叢書』八）　歴史図書社
『国書人名辞典』　国書人名辞典編集委員　岩波書店
『菅江真澄全集』　内田武志編著
一・二・三・四・五・十・十一巻・別巻一　未来社
『菅江真澄読本』一～五　田口昌樹著　無明舎出版
『世界大百科事典』六・二十六・二十九巻　平凡社
『謎多き人物菅江真澄考』　伊奈繁弍著　キラ印刷
『日本古典全集賀茂真淵集』　日本古典全集刊行会
『真澄紀行』　秋田県立博物館

霜月神楽

―菅江真澄の記録の中から―

赤川　與之助

保呂羽山波宇志別神社の「霜月神楽」は昭和五十二年に国指定の「重要無形民俗文化財」に指定された。

昔、旧暦十一月七日には、遠く仙北、平鹿、由利などから多くの参詣者が来られたことを、今も語り継がれている。

文政七年（一八二四）、八沢木の大友家を訪れた菅江真澄は、大友家の古記録を書写し、「霜月神楽」を『雪の出羽路平鹿郡』第四巻の中で取り上げている。それが昭和五年には秋田叢書刊行會（代表深澤多市）により、『秋田叢書』第五巻に活字本として取り上げられた。また、昭和五十一年には未来社の『菅江真澄全集』第六巻に『雪の出羽路平鹿郡』全十四巻が収容されている。

昭和八年、本田安次は霜月神楽の研究のため、木ノ根坂（横手市大森町八沢木）の大友家を訪れ、保呂羽山波宇志別神社の年中行事について次のように記している。

年中行事を誌したものは三本あって、今大友氏の手許に保存されている。即ち天正十八年（一五九〇）のもの、享保九年（一七二四）のもの、文化十年（一八一三）のものであるが、前の二者は、菅江真澄が既に、そのまま書写、後者は前に詳細でない部分を抄出して、譲ることゝし、ここには後者をそのまゝ紹介することゝする。

尚、翁は、このお山に文政七年（一八二四）十月二十日より同年十二月二十三日まで主として滞在し、この間、大友、守屋の両氏旧記を丹念に書写し、霜月神楽を見ている。

両者の書写した記録を現在継承している霜月神楽を照らし合わせて考察してみたい。

『雪の出羽路平鹿郡』第四巻には「保呂羽山年中行事」という項目があり、霜月神楽については「十一月七日神楽之次第」として次のように記している。（『秋田叢書』第五巻三四九頁）

○十一月七日神楽之次第
○大拍手。太鼓、笛、銅拍手ヲ合奏ス
○次舞台清メ、大盞二ツヲ膳二膳ニ載セ、舞台ニ備ヘ加持ス
○次祓修行　膳十五膳に米、小餅二品ヲ入舞台ニ備ヘ、膳毎ニ大盃ヲ戴酒ヲツギ、紙ヲヒネリテ盃中ニ入レ、楽器ヲ調テ祓ヲ修ス。湯釜ノ前ニ座シテ幣帛ヲ振リ修持シ、其時謡フ歌ニ○霜月ハ霜ヲ戴ク八少女ノ心モスメルアサクラの声。
○次ケンザン　○次湯清浄　○次五調子
○次湯加持　神楽役湯箒木ヲ持テ四方ヲ拝シ舞フ
○次神子舞　○次湯加持　○次神子舞　○次湯加持　○次湯加持
○次神子舞
○次中倉　鶏兜ヲ冠リ帷子ノ上ニ浄衣着シ、仮ニ脚半ヲシ腰ニ（三十六童子ノ形ト桂男ノ形トヲ紙ニ裁テ桃ノ枝ニ付ル）指テ湯箒ヲ取リ舞フ。次ニ幣帛二本ヲ左右ノ手ニ持テ舞フ。次ニ器物ニ小餅ヲ入レテ舞フ。次ニ榊ヲ持テ舞フ
○次湯加持　○次神子舞
○次継湯一之釜　諸社へ御湯を献シ参詣ノ者へ灌イデ戴シム
○次湯加持　○次神子舞　○次継湯二之釜　一之釜ニ準ズ
○次湯加持　○次神子舞　○次継三之釜　二之釜ニ準ズ
○次神子舞　六郡ノ古戦場数ケ城へ御湯ヲ捧グ
○次剣舞、神子両人立テ宝剣を抜テ舞フ。
此時諷フ歌ニ
○東方ヨリ今ゾヨリマス長浜ノアシゲノ駒ニ手綱ヨリカケ。
○寄リマサバハヤヨリマセヤサハラギノサハラノ山ニサハルクマナク。
○ヲシ鳥ノ行モカヘルモ知ラズシテ何トテ波路ワスレザルモノ。
○侍ノ飼フベキモノハ庭ノ鳥カケヨ〳〵トウタフナルモノ。
○侍ノユトノニ立シシユラノ声シユラノ八重雲タフトナルモノ。

○暁ノヒヲ鳥コヱニ目ガサメテヨロヒヲタゝミテ袖ヲ枕ニ。」云々と見えたり。予、こたひ文政七年甲申ノ霜零月ノ七日、幸に八沢木の大友の家に在りてけふの御神楽に会ひ奉りて　　菅江真澄

霜八度おく八沢城の笹の葉をたくさにとりてはらふ八少女

しかよみてさゝぐ。

このように、和歌を添え、自署していることから、真澄は霜月神楽を確かに見学している。

霜月神楽でもっとも注目されるのは「中倉」（山の神舞）とされているが、筆者は「御釜の湯立式」と「剣舞」ではないかと思う。

「御神楽」について『俳句歳時記』では

上古におこった代表的な神事芸能で天の岩戸開きの時に始まるといわれ、神遊びともいい、もっぱら「鎮魂」のためであった。

とある。湯立式を終えると、直ちに剣舞に入る。神子二人が立ち、宝剣を抜いて舞い、この時に神楽歌を六番まで歌う。

剣　舞

御神御釜場前

この当たりを、真澄の記録では、湯立式も剣舞同様、古戦場へ御湯を捧げるように解かれている。上古はそうであったかも知れない。

湯立式について本田安次は次のように述べている。

湯加持・一之釜・湯立式

神楽次第には、継湯一之釜「諸社へ御湯を献じ参詣ノ者ノ頭へ潅イデ戴シム。」とあるが継湯といふのはかく湯を注ぐことであると解されているが、これについては、由利郡側の伝承が正しいらしい。即ち一社について、釜一つ宛立てるのが正式なのであるが、これを簡略して、同じ一つの釜で数社分の湯立を行うことがある。即ち一定の湯立が済んだ後、他の立願者等が新たに一柄杓の水をその釜に継ぎ足し「式を新たにして」夫れ夫れこの立願の社に対する湯立をしてもらふ、これが継ぎ湯であるといふ。ともあれ一つの釜の継湯は、この略式の湯立の第一のものである。

今も執り行う様式は同じで、実際その湯を見ると意味を解くことが出来ると思う。

御神前御釜場

御釜の御湯立は壱の釜から参の釜まで諸々の神々へ御湯を献上している。そのことを「諸へ」と記録されているが次の通りである。（一部省略）

○壱之釜　伊勢両柱大神、八幡、春日、太田、大物忌、薬師、水神、福岡、聖徳、文殊、浅草、金華山、木ノ宮、古峯山、織姫、不動、琴平、馬頭、恵比寿、熊野山、長坂、伊豆山、豊受、白山、青乃稲荷、八坂、唐松、伏見稲荷、日吉　以上

○弐之釜　保呂羽山、高岡（岳）山、御嶽山、勝軍山、勝平山、下居、勢至、稲荷、秋葉山、保食、旭岡、金山彦、白旗、虚空蔵、塞之神、妙見、大威徳、千手観音、弁財天、善知鳥坂、東川稲荷、五郎兵衛、大蔵山、子安観音、三峯山、雷神、首塚、仁王、杉乃宮、真山、淡嶋、　以上

○参之釜　西ノ宮、太平山、鹿嶋祇園、諏訪、真昼山、山ノ神、金毘羅、日吉、伐隊、龍神、東鳥海山、釣瓶、三森、大国主、猿田彦、築森、中山、天満宮、瀧ノ宮、二十一番観音、真角、八尾、

長太郎明神　　以上

同じ社の名が、一之釜から参之釜まで二重に記載されていたので除いたが、古記録を書写したとき、立願した人が、適宜に書き留めたことと思われる。山号のついているお宮を上の文字だけ記したものも見える。例を上げると「釣瓶」とあるが、「釣瓶山八幡宮」のことである。このお宮には、真澄が文政八年（一八二五）春に山に登り、図絵を残し、神社の歴史を記している。

霜月神楽にはさまざまな供物が奉納される。昔の住民たちの心の中からは、自然に生まれ育ったものに対し、感謝の念が厚く、民俗信仰の姿が滲みでている。昔の時代と現代では大きく変わってきているものの、日常心掛ける気持ちは、どこかで共通しているような気がする。百姓たちの自力で生産した作物、暮らしの中で大切な物を神前へ献上する心は、長年歳を重ね生活して初めて理解できるようである。

本田の文章は続く、

「だ　し」

これより先、神楽座の隣、十畳間の中央の、参詣者に退いてもらい、米俵を二列に並べ、この上に「だし」と称する二尺幅一間程の低い縁のついた台の幾つかに参拝者たちの奉納した供物には一々奉納者の住所名前を書いた名札がつけられている。米・餅・魚・野菜・神酒・果物等がその主なるものであるが、これが全部積み重ねられた様は壮観である。この時、大蝋燭を灯し、丁度神前では御饌祝詞が始まる頃、こちらではそれにかまわず、これらの奉納者の氏名を一々読み上げる。

昔は、すべてローソクの灯す明かりの下で、一層神秘的な雰囲気を醸しだしていた様子が想像される。保呂羽山波宇志別神社の霜月神楽は、我国の代表的な神楽と伝えられている。中世から近世、近代までその祭式を崩さず継承されているのが特徴とされる。

昭和八年十一月七日の式順を記す。

御神楽（みかぐら）

式順序

修祓式

神降

招神祝詞

次天津祝詞

次大麻行事

次塩湯行事

次送神祝詞（これは祓の神を送るのである）

次花入ノ式

次打鳴

次大祓一同

次けんざん湯清浄

次五調子

次湯加持

次天道舞

次湯加持

次伊勢舞

次湯加持

次湯加持

次保呂羽山舞

次湯加持　　此間

次御嶽山舞　　御饌祝詞

次湯加持　　斎主

次御岳山舞

次山之神舞

次神入舞

次湯加持

次辺津神舞

次湯加持

次壱之釜湯立式

次湯加持

次弐之釜湯立式

次湯加持

次参之釜湯立式

次剣舞

次祝詞　　斎主

次奉幣式舞

次神送

次恵比寿　　以上

（最後に打身がある）

一夜続いた神楽も朝方六時四十分頃、珍しい恵比寿の行事が行われる。

「恵　比　寿」

烏帽子、直面、白張、袴の恵比寿が、先に麻をつけ麻糸にした七、八尺の竹竿を持って出る。腰にはかこべ（籠）をつける。次に神楽主と神子が出て舞台に座る。この時、膳に供えた鰯を釣り上げると、「あゝ釣れた〳〵」と歓声が起る。古記録によると、この際「鰯の焼魚」とあるが、「生の鰯」を供えた意味が込められている。

神楽次第の恵比寿の項には「白張ヲ着シ、釣竿ヲ持、神楽座ニ進ム、舞台ニ膳ヲ備ヘ、神楽後修持シ終テ膳ニアル魚ヲ釣ルナリ」と記している。

八日朝、七時頃、神楽は終了する。箕に切り落とした注連縄を入れ、恵比寿は左手に竿を持ち、右手に手杵を持って、その杵で箕を押して行く。次に神楽主、神子と続き、東の入口で拝礼し、神楽は終る。昔は午前十時頃二階の間で「打身」の行事が行われたが、今は引き続き内座で打身の行事がある。

以上、秋田叢書第五巻の内『雪の出羽路平鹿郡』第四巻（秋田叢書刊行會編）、本田安次著作集『霜月神楽之研究』を参考としながら霜月神楽を紹介させていただいた。

山之神舞

神子舞

恵比寿

神楽の朝　波宇志別神社

（当研究会会員・横手市大森町）

菅江真澄の採薬事情（二）

―津軽藩国日記からの推理―

七戸元成

（四）

少し急ぎすぎたので、もう少し細部にふれてみる。

天明三年（一七八三）の凶作、時疫の流行、餓死者、倒死者については、『藩日記』には各郡奉行所からその数だけ書かれており、その対策や江戸藩邸に全く連絡していない。

深浦湊の僧が藩主に訴えるべく、江戸に向かったが、藩主の病気のため面会できず、その長男津軽信明に会うことができ、その惨状を訴えたのである。初めて知った藩内の惨状に驚き、直ちに幕府に救援米一万五千俵を仰ぎ、許可を得て帰国し、つぶさに惨状を知ることができたのである。

因みにこの荘厳寺の僧は駆け込み訴えの罪により、領内追放となり、秋田能代の草庵で生涯を終えたという。

『平山日記』によれば、天明七年（一七八七）以降は平年作や豊作であり、この状態は寛政二年（一七九〇）まで継続する。

第七代藩主津軽信寧は前回記したように改革に着手したが上級家士たちは意のまゝにならず、遅々として進ままかった。天明六年（一七八六）には節倹令を布告し、思いきった断行をした。

寛政五年（一七九三）、二百石以下の藩士を帰農させ、荒廃した田畑を再興させることにした。

この中にたった一人の藩医がいる。いわゆる津軽の秘薬といわれた「一粒金丹」の製造元和田家である。五人の藩医に伝授を命じられ、終わると藤崎村に帰農させられた。

和田家では患家によって選別し、多額の金銭を要求し、馬や駕籠を用意させたという。しかし土着先の藤崎村でも近所の農民を小作として使役し、自ら手を汚すことはなかったという。和田家ばかりではなく、大なれ、小なれ帰農した武士も同じであったという。

（五）

藩医小山内玄貞には三カ所あった薬草園の整備を命じ、大阪伊香屋からの薬草購入を少しでも減じようとした。この時期に自宅内に薬草園のあったのは、いずれも在医であった。

後に医学頭取となった手塚医師と山崎清朴父子であり、特に山崎家からは薬草を購入しており、倍の納入を依頼したが手持ち量がなく断られている。

前年の四年には幕命により松前に藩士二百名、医師二名を派遣しているが、この年の十月二十七日に菅江真澄は松前の福山から、下北半島の奥戸（オコッペ）に到着している。松前でのあわたゞしさをを逃れるためか、急いで松前を去った感じである。しかも南部藩の流刑地といわれた場所である。確かに津軽半島は派遣兵やら幕府の高官等で雑然としていたのかも知れない。寛政六年（一七九四）冬、二年滞在した下北半島を去るべく出発したが、悪天候のため尾駮村で引き返して田名部（むつ市）で越年しているが、何故冬にという疑問が残る。

翌七年（一七九五）三月、夏泊半島を周遊していた真澄は小山内玄貞と浅虫で会い、採薬を依頼される。この二年間に小山内玄貞は幕府高官の随伴やら、娘が江戸藩邸の奥女中になり、江戸との往復でなかなか出発できずにいたのであるが、自信がなかったのかも知れない。

また、八代藩主信明が寛政三年（一七九一）に三十歳の若さで死亡、支藩黒石から寧親を迎えてと、ゴタゴタがあったことも否めない。

さいわい、九代藩主はそのまゝ改革を引き継ぎ、一層の改革を断行した。しかし、菅江真澄の本草学に疑問を持つ者がおり、これが小野蘭山の薬草鑑定になるのだが。

（六）

採薬行には一回目を除いて同行したのは、山崎清朴である。

藩医不足もあり、また山野を歩きまわり、採薬に同行しようとした医師は一人もなかった。

山崎清朴は在医であり、父顕貞の勧めもあり、薬草の勉強にもなることから、自宅の薬草園を質量ともに拡大するのに良いチャンスであり、藩医手塚氏を通じて希望した。

以降、藩との連絡、金銭の出し入れ、採集した薬草の処理等は凡て清朴があたり、小者一～二名を連れて「山という山」を歩いた事になる。『国日記』には「菅江真澄が採薬係であった」とは一行も書かれていない。他の資料を散見しても全く見当たらない。むしろ山崎清朴が藩の採薬係ではなかろうか。

二人が採薬している間に、松前派兵の出費が膨張し、また藩兵不足のため、二百石以下の藩士の土着令が解除になり、稽古館、医学館の費用も大幅に減じられる。

さらに寛政十一年（一七九九）には浦河・サワラ・クスリ迄の出兵命令が幕府から出て、出兵人数も五百人となる。

帰農していた和田家も弘前に戻り、五人の一粒金丹を伝授された医師の製造禁止となり、和田家の独占製造販売となる。

和田家では早速ビラを配布している。その中には五人の製造した一粒金丹には薬効がないとある。

以前五人藩医が製造した一粒金丹を一般にも販売するため、郡奉行所に置いたが、さっぱり売れず、郡奉行所からは、一粒金丹が解け出しても薬効は変わらないのでそのまま売り出せと指示している。

その後、『国日記』に一粒金丹の記事は全くなくなる。解け出した一粒金丹がどうなったのかも全く不明である。ある医師は菅江真澄に相談したというが、不明である。

（七）

断簡『津軽のつと』や『錦の浜』によれば、寛政十年（一七九八）には浅虫近村、翌十一年には弘前、五所川原在にいたことがわかる。

蝦夷地に出兵した兵士と藩の連絡は、宇鉄港で行われた。幕府は三厩に仮本陣を構える予定であり、藩では独自に宇鉄港におく事にした。しかし、政変により、この北国郡代の設置は中止になる。しかし藩では宇鉄港に連絡所を設置、同港の元アイヌ三郎四郎の一族を伝令として使い、多い日には日に二度、少ない時でも二～三日に一度は松前や函館から連絡を受けている。

宝暦年（一七五一～一七六四）、時の家老乳井氏がアイヌを津軽人として扱う事にし、年貢の免除と夫役を与えたが、それがここで生かされている。この伝令には報償として米が与えられている。

しかし、藩内にアイヌ事情に請しく、片言ながらアイヌ語がわかる藩士がいたとも思われない。もちろん連絡は文書であろうが、時によっては口頭の場合もあったであろう。

それもアイヌの目線まで下がり、彼等の生活を熟知した者でなければならない。

蝦夷地出兵の記録は多く残されているが、この連絡調整にあたった人の名はない。

寛政十二年（一八〇〇）には測量のため、伊能忠敬が松前へ渡り、派遣警備兵は一年交替となる。

三厩港は相変わらず、渡道する人々で混雑している。

何れにしても菅江真澄が津軽にいた頃には、藩主の交代、出兵による財政難、風説や武士の帰農、津軽藩としても大きく揺れ動いていた時代であるが、紀行文には勿論それらの事は一行もない。

（未完）

（当研究会会員・弘前市）

短歌　菅江真澄の道

山下　恭

さりげなく真澄の生涯語りいる講師の眼ざし深く澄みたり

克明に書き記されし我が秋田「真澄遊覧記」に遠き日思いぬ

わが秋田親しみ訪ね記せしや行事・文化に触れる喜び

数多き文筆と絵図・地誌など真澄の業績偉大さ思う

辿りゆく「真澄の道」に草萌えて師の在りし日の春よふたたび

貧しきにも同じく匂うと桜の句詠みし人あり「燈蓋桜」に

一月余（ひとつきよ）真澄師泊りし大戸の宿種蒔き桜あえかに咲けり

何語る対面なりしや藩学者と卯の花月夜のおぼろに迷うと

宝塔寺の藤咲く下に酒交わすと記しあれども今風渡るのみ

師の書きし「水の面影」ゆかりの地寺内地区に欅そよげり

青葉影小暗き林にうつぎ咲き師も歩きしか道標の如

寺内の青葉の小径に五輪塔師も触れたるや陽にぬくもりて

その昔師の読みませる刻字溶け五輪の塔の由来も読めず

登り来し白幡の社に遠く偲ぶ奉納相撲に師も興じませりや

八森の海辺の美観に声もなく真澄訪ねし「雄島紀行」聞く

命終えし神明社の巡りさまよえば夏草そよぎ遠き日顕つがに

碑に刻む鳥屋長（ながき）秋の挽歌木洩れ日の光（かげ）に浮き立つ師のみ墓辺に

丘に建つ師のみ墓辺にむらさきの花咲き群れて浄土のごとし

真澄師の業績伝うと斯く迄も熱意と深念の人等尊とし

師を慕う篤き思いの込められて和歌したためし標柱あまた

（歌誌「寒流」「かりん」所属・秋田市）

短歌

菅江真澄の辿った南外村

今野隆栄

真澄生まれし宝暦四年甲戌三河二百五十二年経ぬる
天明の飢饉の世にや何思い古里出でし三十の歳に
三河路に生れし真澄は越後こえ秋田あがたに天命なりや
北国のつましき暮らしに絆されていよよ北の旅路の人に
降りにふる雪を漕ぎわけ戻りたる文政九年矢向峠を
明けあけし文政十年後六月二十二日に外小友村へ
字坊村肝煎り屋号藤兵エに立ち寄りたりしや文書に遺る
若木明神の穴あき石の輝きて幾代祀り来し戸左エ門家は
寛政十二年神かかりとう御教を守り遷せし二百六年前に
御嶽絵図壬と記す霹靂松夏季なれども枯木の態に
講中ら寄りて建てたる鳥居なり梅のみやしろ木緜襷の和歌を
佐藤家に残る二巻「避雷詠」「三社託宣」なみかぜもなく
条幅を信じ続けて百八十年八沢木川の面静かに動く

幾代をおろがみきたりし遺墨なり子から孫への貴きものを
桐箱にしっとり収まる二巻の書跡しるき真澄の文字は
字鎌田牟呂祢の泉に立ち残る辛夷の花の水面ゆらせり
米俵の大きさに似る猿コ石万右エ門農民との慈愛の塔よ
田神塔の弘化二年の裏の文字彫師は誰や龕濠彫りに
御改正ともども扶けし田神塔に稔りし秋日注連張り祀る
子ら担ぐ御輿は塔の前に寄りひときわ高き歓声のわく
岩倉の湯風呂の巡り今の世も岩魂あらわに過ぎ去りの佇つ
真澄翁岩倉の湯を好みしや湯治人らをいとつばらかに
真澄絵図薬師御社書きありて鮮やかに残る鳥居の姿
めすおすの二つの岩を村人ら「みよと岩」とて座して語らう
この奥処保呂羽に近き「ざんざら滝」を水の落ちくる音を
名に言う
痢病に効くとう山の果物「しらくち」に過ぎ去りの佇つ
見ず知らず奥処の村の宮居など案内せしは如可なる人や
大小手の館跡あたり美わしく里正高橋与右衛門なりやも
「とし波も氷る瀬波」の和歌を詠み神宮寺村に齢重ぬる

上見坊泉の郷を見わたせるこの泉はも遠き世のまま
藤の花垂り咲く下に郷人らこれの水神今も尊ぶ
平家という古代の柵のありし丘見下ろす村のありて寄り合う
このあたり古き瀬戸焼く釜跡を何故か真澄の文書にあらぬ
字高野八幡神社の出羽三山八沢木川を挟み苔むす
文化八年坊田の酒舎いつきたる辛未百九十四年前なり
長根村大山咋神社の生田坊六百石をの黒沢川に
みやしろの片辺金毘羅大神の時の流れに哀れ臥すがに
この社地の目蔭す広場に平成五年建て戴きし和歌の標柱
堤土村常泉寺あたり愛宕山に永楽通寶拾いしところ
堤土橋八沢木川に架れるを常泉寺参りの人らを臆う
添川に近き栖岡平形のみ深き山に悲恋の文書

（南外語りべ会会長・大仙市）

※　南外語りべ会では『月の出羽路南外村』（A四版七十七頁）を出版しました。価格千円（郵便小為替）送料二四〇円（切手）を封書にて郵送して下さい。
〒〇一九―一九二二
大仙市南外字丸木橋一〇五　今野隆栄　様
☎〇一八七―七四―二六二八

菅江真澄と三つの古鏡

―佐竹義和の美術品収集癖との関連―

田口昌樹

真澄の著作を読むと、いろいろな文化財を記録していることに気づく筈である。その代表的なものの一つに「古鏡」がある。その中から三つの古鏡を中心に真澄の記述とその後の鏡の行方を辿ってみた。真澄の記録を追っていくうちに真澄が記録した文化財の行方が、当時の秋田藩九代藩主佐竹義和の美術品収集趣味に影響されたと判断しざるを得ないということに気づいた。以下三つの古鏡と密教の法具三鈷鐃の行方を検証してみたい。

一、線刻中台八葉院曼荼羅鏡像

『雪の出羽路平鹿郡』二巻沼館村の中に「鏡ノ社」という項目がある。真澄の文章を現代語訳して、次ぎに掲げる。

この社は新町というところの、鈴木市郎左衛門という大工の家の庭に祭られている。また大日堂とも呼ばれている。その由来は近い年の文化二年（一八〇五）三月のなかば、市郎左衛門が田起こしのため田に出て、千刈田という田の弘法佃というところから鏡を掘り出し、その鏡を神として祀っているのである。その鏡は亘四寸八分の花菱鏡の鏡である。その鏡の面に九柱の仏の形を彫っている。その形は蓮の開いた花びらの内に、上に薬師如来、中に大日如来、下に無量寿如来、その左右に冠師菩薩、釈迦如来、文殊如来、観音菩薩、弥勒菩薩、普賢菩薩、みな花びらの内に座っている。仏、菩薩の高さは二寸ばかりである。その裏の方には風鳥二羽を鋳像し、その回りにたいそう細い文字で「永延三年八月三日幸以奉始八茎九尊壱院願主傔丈伴守光女具主伴希子願也。仏師天台僧蓮如」と彫った文字が小さく、読み解きがたいが、そのままを記したものである。（以

下略）

真澄がこの古鏡の実物を見たのであろうか。なぜか真澄はこの古鏡の図絵を描いていない。真澄が沼館を訪ねた文政七年（一八二四）には、この古鏡は沼館にはなかった。佐竹義和は、古鏡を献納させた代償として、古鏡を描かせた「鏡の図」を鈴木家に与え、鈴木家はそれを鏡社に祀っていたものと推察される。しかし、真澄は掛け軸を見たとは一言もふれていない。あくまでも実物を見たように記している。この掛軸は現在、雄物川歴史民俗資料館に常設展示されている。

線刻中台八葉院曼荼羅鏡像掛図
（雄物川町郷土資料館蔵）

結論を述べる。真澄はこの古鏡の実物を見ていたのである。と筆者は推定する。真澄がこの古鏡を見る機会は二回はあったと推察される。

真澄は文化八年（一八一一）七月の末に久保田城を訪ね、高階貞房の案内で、城内の納戸で佐竹家所蔵の三鈷鐃（さんこどう）を見たことは貞房が真澄の著作を模写した『鈴の図』に記している。このとき真澄は古鏡を見てスケッチしていたとも考えられる。

また、文政三年（一八二〇）五月、六郷（美郷町）の古城跡で「大小の甕と紫銅の観音像、古鏡」が発見され、これが佐竹家に献上された。真澄はこれを久保田城で拝観、スケッチし『新古祝甕品類之図』に記している。六郷の出土品を見たことが『新古祝甕品類之図』著作のきっかけとなったものである。あるいはこのとき沼館の古鏡を見ていたのかもしれない。

真澄はこの鏡が発見されたのは文化二年と明記している。真澄が沼館を訪ねた文政八年（一八二五）の二十年前のことである。この古鏡が佐竹家にあったことを証明する文書がある。松平定信（一七五八～一八二九）が編纂した美術カタログ『集古十種』に掲載されているのである。この鏡と後に紹介する上鶯野（大仙市中仙町）出土の「瑞花文円鏡」とともに久保田城納戸の収納されていたのである。

この『集古十種』の序文には寛政十二年（一八〇〇）の序文が付されている。この鏡が発見される前に序文が記されたことになる。この矛盾は、序文が『集古十種』編纂開始にあたって記されたものと考えることで解消される。

真澄は鏡に刻まれた碑文は「小さく、読み解きがたい」と記し、前記のように記しているが元雄物川町歴史民俗資料館館長高橋眞氏（当研究会員）は現段階ではとしながらも、

永延三年八月三日辛亥奉始八茎九尊壹院願
主傔杖伴守光女旦主伴希子願也佛師天台僧
蓮如

と書き、

仏師天台僧蓮如が、永延三年八月三日辛亥の日から中台八葉院曼荼羅鏡の製作を開始した。傔杖伴守光が願主となり、妻の伴希子が施主としてその費用を提供した。

と理解したい、と結んでいる。

永延三年は西暦九八九年にあたり、平安時代中期、一条天皇の時世、紫式部や清少納言が活躍した時代である。

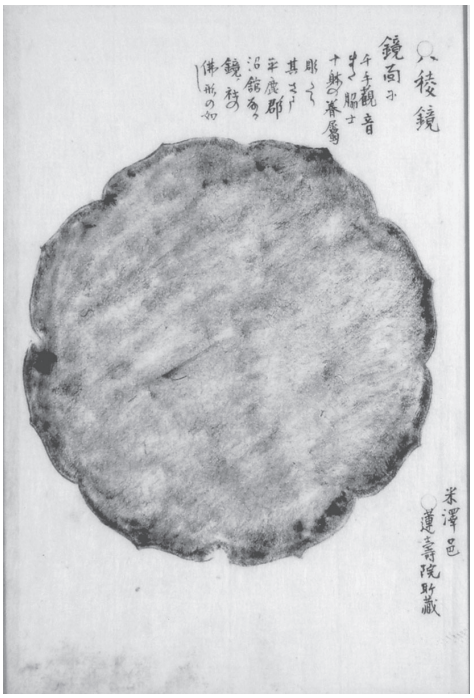
古鏡としては国宝に指定されている永延二年の「線刻阿弥陀五仏佛鏡像（広島県）がある。とすればいわゆる沼館鏡も当然国宝いうのはおおかたの見解であろう。

残念ながらこの古鏡は現在行方不明である。佐竹家から誰かに委譲されたと推定されるが、誰の手に渡ったか一切不明であるという。

二、「線刻千手観音等鏡像」

この鏡が秋田県唯一の国宝に指定されている鏡である。真澄は『月の出羽路仙北郡』二十二巻には概要次のように記している。

上花園村の草彌理左衛門が開田を強くのぞんでいたがかなわず、役所に願いでて、米沢・国見のあたりを開墾してその願いがかなった。その中で延宝五年（一六七七）四月十三日、野中村の内三采女谷地というところに三十刈の新田を開いたとき、井堰の五尺ほどの深さの底から、直径七寸ほどの八稜形の古鏡一面を掘り出した。この鏡の面には蓮を彫り、その上に千手観音菩薩を刻み、脇士として十体の仏像を髪の毛のような細い線で刻んでいる。またこの鏡の中に「崇紀、仏師僧、大趣具主、延暦僧、仁裕女、具主、藤原安女子」と彫っている。延暦（七八二～八〇六）は年号であろう。さすれば延暦は桓武天皇ご即位の年であり、延宝の年まで八百七十年を経ている。また今年文政十一年（一八二八）までおよそ千三十五年を経ている。延暦の年に作られた霊鏡を延宝の年に掘り出されたのは、二つの年号の文字の上の文字が同じなのも不思議な因縁が感じられる。この鏡を理右衛門の子伝吉が久保田へ持参し、御代官根本左治衛門殿のお取次ぎをもって郡奉行中川宮内殿、黒沢甚兵衛殿へ差し上げたところ、宇右ヱ門殿、茂右ヱ門殿、是は堰よの掘り出した御鏡であるので堰神として祀るべきであると告げられた。さいわい古い草葺きの堂があったのでまずこれに安置し、祭礼の費用として三石の米をいただいた。その後あらたに社を建立し、入仏供養の導師は角館の弥勒院の宥元法印に依頼し開眼できた。（中略）なお、つばらかな事は正徳四年（一七一四）八月二十一日付けの北浦の荘米沢村観音堂の別当蓮寿院家の古記録に見える。



「古鏡」（《月の出羽路　仙北郡』二二）

また、鏡面の表裏をスケッチし、次のように説明している。

○八稜鏡米沢邑蓮寿院所蔵

鏡面に千手観音、また脇士十躰の眷属を彫たり。其さま平鹿郡沼館なる鏡ノ社の仏形の如し。

裡書に「崇紀仏師僧大趣具主延暦僧仁祐女具主藤原安子」と毫髪の如く彫たり。壮年の人たりとも、眼力及かたく、天眼鏡、あるは刀剣の瑕眼鏡ならではいとやすくよみときがたし。蝙蝠雲形の如くありて、唐鏡の如し。（原文のまま）

この鏡は水神社（大仙市中仙豊川字観音堂五十七）の御神体として秘蔵されている。『秋田県の文化財』（秋田県教育委員会編）では「縦径十四・〇センチ、横径十三・五センチ、縁の厚さ〇・七四センチ」「十一世紀の優作」と紹介している。八月十六日に一般公開される。中仙公民館でレプリカを見ることができる。

この古鏡は佐竹家に献納されることもなく、現在も水神社のご神体として秘蔵されている。昭和二十八年（一九五三）に国宝に指定された。

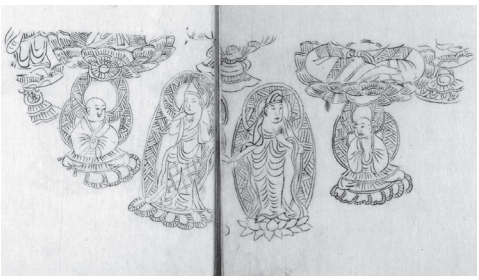
国宝「線刻千手観音鏡像」水神社蔵

三、「瑞花文円鏡」

この鏡について、真澄は『月の出羽路仙北郡』二十三巻の「上鶯野村」の項に「鏡社」として次のように記している。

○鏡社斎主里長富岡喜左ヱ門

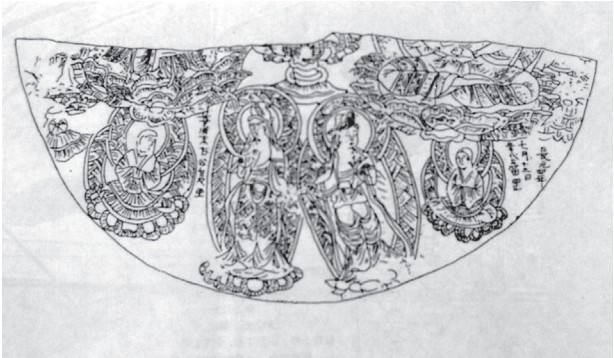
この破鏡の半片は元禄のある年の二月十二日、富岡氏の住む土地の古館というところの小溝からおもいがけなく掘り出されたと伝えられている。享和二年（一八〇一）八月のある日、天樹院公（九代藩主佐竹義和）がご巡覧のとき献納した鏡である。その後、鏡という文字にご自分のお名前を書き添え、その下部に絵師（狩野）秀水にその破鏡の図を描かせた掛軸を賜り、それを神として祀っている。鏡の面には仏像が数体彫られている。髪の毛のように細く薄く見ることができる。その傍らに長元四年（一〇三一）七月十三日豊太富岡の文字が仄かにみられる。仏像の中にも文字があるが読み取ることができない。



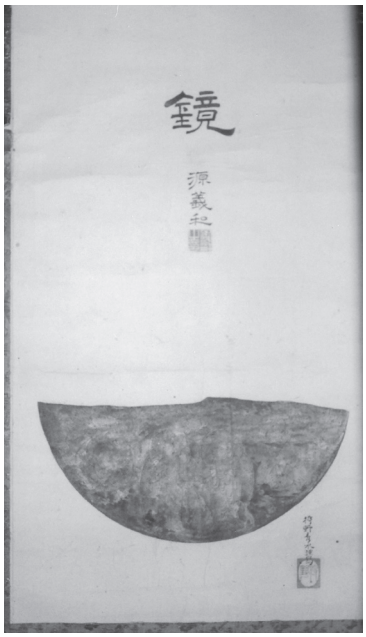
富岡家破鏡（『月の出羽路　仙北郡』二三）

真澄が富岡家を訪ねたのは文政十二年（一八二九）の春であった。亡くなる半年前のことである。破鏡は享和二年（一八〇二）に献納されていたので、真澄も見ることは出来なかったが、義和からいただいた掛軸があり、真澄はそれをスケッチしている。真澄はこの掛軸を上中下と三分割して三枚の図絵としているが、実物は一枚である。

ところで、現在富岡家にはこの破鏡が現存している。享和二年、富岡家では破鏡を献納するにあたり、当家では親から子へ財産を引き継ぐ儀式のおり、この鏡を飾って執り行ってきたので、その儀式を行うときには鏡を里帰りさせてほしいと願い出て許されていた。慶応（一八六五～六八）の末、破鏡は里帰りをしていたが、慶応五年の戊辰戦争の騒動から廃藩置県などが続き、返還する機会がなく、富岡家の手元に残されたとのことである。



「瑞花文円鏡」（富岡家蔵）



佐竹義和書「鏡の図」（富岡家蔵）

なお、この破鏡は白河楽翁（松平定信）編の『集古十種』にも掲載されている。久保田城で写生されたものであろうか。『秋田県の文化財』ではこの鏡を次のように紹介している。

昭和三十一年五月二十四日
仙北郡中仙町上鴬野古館七十三　富岡善芳所有
径二十二・八センチ、縁高〇・六センチ、重量七五〇グラム
白銅製、鏡面に九尊像並びに次ぎの銘を毛彫りする。
長元四年七月十三日
具主代公富岡
女具主須末古夏虫

鏡背は唐花文の唐草を巡らし、紐座八葉蓮弁で、唐時代の代表的図紋である。奈良時代より転々伝来したこの鏡を藤原期の長元四年（一〇三一）に具主たるこの男女が埋蔵供養して祈願したものであろう。残念なことに半ばを欠いている。

この古鏡は富岡家にあり、佐竹義和の書いた「鏡」の軸とともに秘蔵されている。なお、レプリカが中仙公民館で公開されている。

四、「三鈷鐃」（サンコドウ）

鏡ではないが、重要文化財に指定されている「三鈷鐃」（国立東京博物館所蔵）がある。この仏具も偶然に発見され、藩主佐竹義和に望まれて佐竹家の所蔵となって、明治以降に国立博物館蔵となったものである。その経緯を紹介する。

享和三年（一八〇三）の日記『にえのしがらみ』の中に松峰（大館市）の修験伝寿院（現松峰神社）に宿泊した記事がみえる。

（六月十八日・前略）こうして日もかたむいたので、この伝寿院に一夜の宿を頼み、泊まった。主人が「私の先祖は、神主・祝のようなものであったらしい。家は佐々木といい、善左衛門、久作などという人がいたそうだが、名に似合わず、代々修験道の修行をしてきた。みな長命で、金蔵院の翁は九十三歳で亡くなった。その翁の時代は明応（一四九二―一五〇一）の頃であったか、南谷の崩れたところから駅路の鐸が掘り出された。これは古いものだと、翁は喜んで家のさだめ、私の代まで八代持ち伝えてきたが、

近年、藩主（九代藩主佐竹義和）がこの鈴を召されたので奉った」と語った。

その鈴の図だといって、人が描いたのを見たが、大きさは七、八寸ばかりもあろうか、たいそう珍しいものであった。常陸の国の正等院にあるというものとまったく似ていない。私はこのようなものをたくさん見ているが、どれも形の同じものはない。思うに、これは天安元年（八五七）に大地震があって、堂などがすっかり崩壊したときに埋もれた御鈴であって、鐸・すりでというものであろう。変わった鈴を見れば、なんでも駅路の鈴だろうとばかり、私も人も言ってきたが、昔は、弓にも鏡にも刀にも鈴をつけ、何の行いにも鈴をふるならわしがあるので、あながちすべてが駅路の鈴というのではなく、さなぎ・すりでも多かったろう。私も、今まで見たさまざまな鈴の形を写した図録を持っている。

真澄が「鈴の形を写した図録」と記したのは『鈴の図』であろう。『鈴の図』は未発見本であるが、真澄と交際のあった高階貞房が写した写本が残されている。わずか八図より収められていない粗末なものであるが、その中にこの「松峰鐸」が載っているのが面白い。その冊子の中には「文化八年（一八一一）七月つこもりのころ高階広主うつし」「御納戸にありて真澄に拝見被仰付下」とあるので、真澄は文化八年七月末、高階貞房に連れられて久保田城の御納戸で松峰鐸を見たことになる。松峰鐸は佐竹義和に献納されていたのである。

真澄はこの松峰鐸を仮題『錦木雑葉集』にもこの収録している。その説明文は次のように記されている。

松峰鐸
出羽国秋田郡　松峰鐸
傳曰小野良實□
甲長八寸　乙三寸　丙二寸　□形□
丁周回八寸　真搨

「駅路の鐸」《錦木雑葉集》
（大館市立中央図書館蔵）

松峰鐸は仮題『錦木雑葉集』（『菅江真澄全集』十二巻・大館市立中央図書館蔵）に収録されているものであるが、『菅江真澄全集』では九巻『鈴の図』の部分に収録されている。

この松峰鐸を真澄は「駅路の鐸」としているが、密教の法具である三鈷鏡とされ、平安初期の製作と推定されている。

五、佐竹義和の美術品収集癖

佐竹義和が鏡や仏具のみならず、絵画にも興味を示して、収集したという記事も見られる。日記『かすむ月星』、文化三年（一八〇六）四月十二日の記録、真澄は山本町下岩川長面の近藤家に滞在していた。「長面になりて、相知りたる近藤氏のもとにつきたり。三とせのむかし見し、明の高玉堂がうつしなしたるしげ山の絵のありつるをくにのかみの入らせ給ふのをりしも、奉りしなど人のかたれり」と記されている。

「三とせのむかし」とは、文化元年（一八〇一）、この地を訪れ、日記『小町の寒水』を記したことを指している。この日記は明徳館本であるが未発見本である。明徳館本で所在不明なものはこの日記一冊のみである。

義和は、このように絵画も献納させたといたのである。いつの時

代か不明であるが、真澄の日記《男鹿の春風》には真山の畑山利平という人（畠山重忠の子孫との伝承のある人）が「鞍を公に献納した」という話を載せている。

先日、当研究会会員大石淳、貴志子夫妻（仙北市）と雄物川町郷土資料館を訪ね、花菱鏡の条幅を見学したおり、大石家には、「中国の絵師が書いた絵画を献納した」との文書が保存されているという。大石家は北浦の大肝煎であり、真澄最後の取材地・滞在地とされている家である。

このように佐竹義和は民間に所蔵されていた多くの美術品を収集し、久保田城の御納戸に秘蔵していたのである。

慶応四年（一八六八・九月から明治元年）戊辰戦争が勃発、秋田藩は政府軍として戦い、領地の三分の二が庄内・仙台・南部などの軍勢に占領された。結果的には勝利したが、莫大な戦費を使い、その大半が借財として残ったといわれる。

先にのべたように久保田城には多くの美術品があった。廃藩置県後、美術品は佐竹家の所有となったが、その大半は佐竹家により処分された。特に「佐竹本三十六歌仙絵巻」が有名であった。三十六歌仙の肖像に和歌・略歴を書き添えた絵巻物二巻である。この絵巻物は佐竹家を離れた後、三十七枚の掛軸装に分割されて、異なる人々の所有となっている。その大半は重要文化財に指定されている。また、富岡家の「瑞花文円鏡」のように元の持主にかえった物や、「三鈷鐃」のように公共の機関の所有になったものもある。しかし沼館の古鏡のように行方不明のものもある。

最後に「自筆本菅江真澄遊覧記」にふれたい。真澄の著作は藩校明徳館に献納されたものであるが、その時点で七十九冊十二帖であった。日記四十一冊、地誌三十八冊、勝地臨毫十二帖である。明徳館は廃藩置県後に廃校となり、「自筆本菅江真澄遊覧記」は佐竹家に移管された。ただし、貸出されたりで六冊の日記が行方不明であった。その後、真崎勇助と狩野亨吉によって四冊が市中から発見されて佐竹家に献納された。それが昭和十九年（一九四四）に秋田市の辻兵吉家に委譲され、「自筆本菅江真澄遊覧記」七十七冊十二帖として重要文化財に指定された。明徳館に献納された著作の内、日記『十曲湖』は神戸市立美術館が所有しており、日記『小町の寒水』はいぜん所在不明である。

「自筆本菅江真澄遊覧記」は幸運にも一括して秋田県内に残った。これが他の文化財のように秋田県以外の人の手になることもなく、一括して秋田に残ることになった。辻家（現主辻兵吉氏は当研究会顧問）の英断に敬意を表したい。

明治維新後の佐竹家の文化財管理が適切であったとすれば、「佐竹本三十六歌仙絵巻」（分割されなければ国宝との説がある）や沼館の「線刻中台八葉院曼荼羅鏡像」「自筆本菅江真澄遊覧記」などを含む全国有数の博物館ができていたと思うのは筆者のみであろうか。

（当研究会副会長・秋田市）

参考文献

『秋田県の文化財』　編集・発行　秋田県教育委員会
「国宝ものがたり」　藤田秀司著
『出羽路』第四十号　秋田県文化財保護協会
『菅江真澄全集』四、六、八、九、十二巻、別巻一　内田武志・宮本常一編　未来社
「幻の鏡像〔沼館鏡〕をめぐって」　高橋　眞著
『雄物川町郷土資料』第二十五集　雄物川町教育委員会

真澄短信④

◇「あきたわき水巡り」　秋田魁新報

秋田魁新報文化部では平成十八年一月「あきたわき水巡り」を掲載中です。真澄が著作の中に残した多くの「泉」が取り上げられそうです。四月末まで次の四カ所が紹介されております。

「高清水」（秋田市）『花の真寒水』
「みさご清水」（横手市）『雪の出羽路平鹿郡』
「杉沢熊野神社の霊泉」（能代市）『浦の笛滝』
「星山清水」（美郷町）『月の出羽路仙北郡』

本誌に掲載した「菅江真澄の図絵」について

本誌に掲載した「菅江真澄の図絵」の内、六頁の「花なし山」（『粉本稿』）、九七頁「松峰鐸」（『錦木雑葉集』）は大館市立中央図書館所蔵、その他の図絵はすべて秋田県立博物館所蔵の写本によるものです。

また、表紙に使用した漁網の図は『氷魚の村君』の図絵を図案化したもので、秋田県立博物館所蔵の写本によりました。

刊後録

◇『菅江真澄研究』第五十八号お届けします。

◇今回は秋田県立博物館に併設された「菅江真澄資料センター」が開設十周年を迎えるにあたり、これの記念号として発刊しました。巻頭論文として、会員の小堀光夫、松本三樹夫の両氏にご依頼したところ、快諾をいただき掲載することができました。また、会員十六人の方から、十七の論考などのご寄稿をいただき、それぞれ個性のある研究を掲載することができました。あらためてお礼申し上げます。

◇次号以降の発行予定は次の通りです。
五十九号新聞形式八月末発行原稿締切六月末
六十号新聞形式十二月末発行原稿締切十月末
六十一号冊子形式五月末発行原稿締切三月末

◇菅江真澄に関する行事や出版物などに関する情報をお知らせ下さい。会誌の中で紹介して参ります。

編集委員　天野　荘平
小笹　鉄文
佐藤　春雄
田口　昌樹

第十九回　全国菅江真澄研究集会　実行委員会

会　長　亀井　宥三
副会長　菊地　利雄
同　近藤昌一郎
同　田口　昌樹
常任理事　天野　荘平
同　石田　修
同　小笹　鉄文
同　佐藤　春雄
同　高橋　英男
監　事　佐藤　宗久
同　清水川　修
幹　事　大場与志美
同　清水　英明

※全国菅江真澄研究集会の開催にあたり多くの会員の方からご協力いただきました。あらためてお礼申し上げます。

『菅江真澄研究』第五十八号
―第十九回全国菅江真澄研究集会記念号―

平成十八年五月二十日発行

編集・発行　菅江真澄研究会
〒〇一一―〇九〇九
秋田市寺内児桜一丁目五―五五
古四王神社社務所内
☎〇一八―八四五―〇三三三
振替口座〇二五二〇―六―五〇一八

印刷　秋田文化出版株式会社
〒〇一〇―〇九五一
秋田市山王七―五―一〇
☎〇一八―八六四―三三二二